

何故兩祖の微意を探つてなされたものとするかといふに、前にもいふ如く、善導法然兩祖は一往は明かに正行即專修雜行即雜修である。然し、善導大師が五正行を取り扱ひ給ふには、誰も知る如く開合の二門がある。開門五種、合門二種といふのである。開門の場合には、五正行肩を並べて稱名は一稱名行で、正定業と云はれてない。處が合門に來つて、一向專念の稱名を、これを正定の業と名く、佛の本願に順するが故に」と結び止め給うた。これから見ると若し五正行がすべて專修ならば、合門といふは不要のものとなる。苟も合門に來つて稱名の一行を正定之業といひ、この一向專念をすゝめ給ふ意底から伺ふ時には、五正行並べ修する場合を明に雜修とは名け給はぬけれども、何とか貶する思召があつたに相違ない。而してこの善導大師の意底を知るは法然聖人の『選擇集』二行章に依るものなれば、これを兩祖の微意といふのである。我が聖人はこの微意を開闡して二行二修を別立し給うたものである。

復就雜行有專行有專心復有雜行有雜心專行者專修一善故
 曰專行專心者專廻向故曰專心雜行雜心者諸善兼行故曰雜

行、定散、心雜故曰雜心也

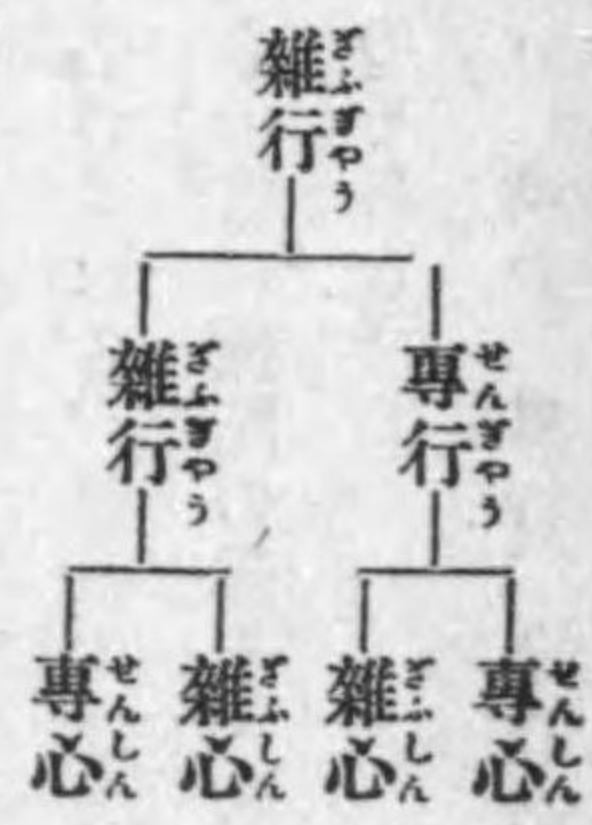
【讀方】 また雜行について專行あり專心あり。また雜行あり雜心あり。專行といふはもつぱら一善を修す。かるがゆへに專行といふ。專心といふは廻向をほらにするがゆへに專心といへり。雜行雜心といふは諸善兼行するがゆへに雜行といふ。定散心雜するがゆへに雜心といふなり。

【文科】 能行相の第二として雜行を明し給ふ。

【講義】 今雜行に就いて述べれば、雜は雜攝の意味にして、この中にあらゆる諸善萬行を攝め入れるのである。即ち淨土の五種の正行に對して、五種の雜行がある。彌陀一佛に向ひ奉りて修する時に五正行であるが、餘の諸佛に向ひ奉りて修する時は五種の雜行となるのである。

又雜は雜通の義で、その修する所の因行が、人間、天上、菩薩等の凡ての果報に通ずる故に雜行と名けられる、是れ本より純極樂往生の爲めの唯一の因種ではなく、修道者の各自が、其心の儘に彌陀の淨土へ廻向する善であるから、この意味に於いて淨土の雜行と名けられるのである。

復この雜行に就いて專行、專心あり、之に相對して雜行、雜心がある。是を圖示すれば



本文には表はしてないけれども影略互顯して上の如くなるのである。
 専行といふのは、専ら諸善中の一善を修めるのをいふ。上にも述べたやうに、一行を専修しても、行そのものが雑行であるから矢張り雑行の中に攝められる。
 専心といふは、雑行を修する信心にして、其修むる所の五戒十善等の善根を一心に極樂に廻向して往生を求める心をいふのである。

次に専行中の雑心は文には表はれてをらぬが、是は定散の雑はる心をもつて一行を専修するをいふ。行は専行であるが、それを修むる心が定散心間雑してゐるから、雑心といふのである。

次に雑行、雑心に就いて云へば、先この雑行は、専行に對するものにして、五戒十善等の諸善を兼ね行するがゆゑに雑行と名けらる。

雑心とは、この雑行の信心にして、それに定善心、散善心ありて、互に相間雑したる心をもつて雑行を修する故に雑心といふ。更にこの雑心を委しく云へば、定専心、散専心、定散雑心の別がある。定専心は、純粹なる定善心にて専ら息慮凝心を修めること、散専心とは、純粹なる散善心にて専ら廢惡修善を修める心、定散雑心とは此二心が間雑すること、或は心を凝し、或時は善を修するのである。

これは上に述べた専行の下の雑心にも通するのである。即ち雑行の雑心は、是等の心をもつて諸善を修むるに反して、専行の雑心は、是等の定散心をもつて一行を専修するの相違あるのみである。

終りに雑行専心は之も文面に表はれてゐないが、人天二乗等の善根兼行の雑行を、一心に極樂淨土に廻向することである。是と専行専心との相違は、専行が一雑行たるに反してこの雑行が諸善兼行たるにある。

亦就正助有專修有雜修就此雜修有專心有雜心就專修有二種一者唯稱佛名二者有五專就此行業有專心有雜心五專者

一專禮二專讀三專觀四專稱五專讚嘆是名五專修專修其言
 一而其意惟異即是定專修復散專修也專心者專五正行而無
 二心故曰專心即是定專心復是散專心也雜修者助正兼行故
 曰雜修雜心者定散心雜故曰雜心也應知

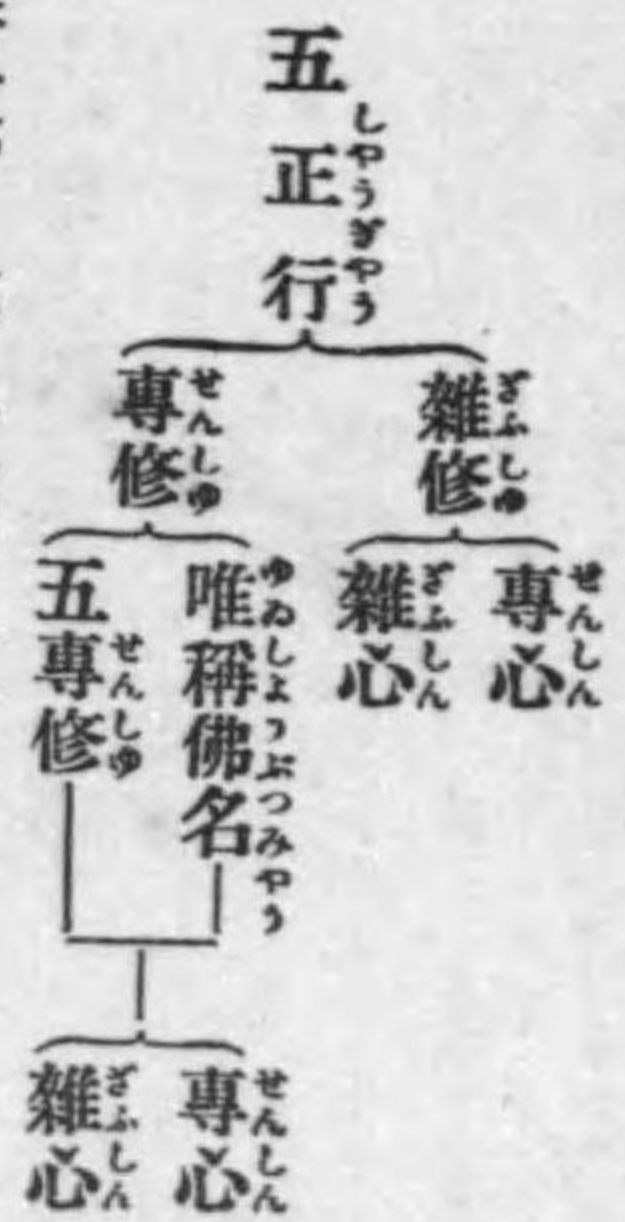
【讀方】また正助について専修あり雜修あり。この雜修について専心あり雜心あり。専修について二種あり。一にはたゞ佛名を稱す。二には五專あり。この行業について専心あり雜心あり。五專といふは一には專禮二には專讀三には專觀四には專稱五には專讚嘆、これを五專修となづく。専修その言一にしてその意これ異なり。すなはちこれ定專修なり。また散專修なり。専心といふは五正行を專にしてしかも二心なきがゆへに専心といふ。すなはちこれ定專心なり。またこれ散專心なり。雜修といふは助正兼行するがゆへに雜修といふ。雜心といふは定散心雜するがゆへに雜心といふなり。しるべし。

【文科】能行相の第三として助正を明し給ふ。

【講義】以上は淨土の行ならぬ雜行に就いて述べたのであるが、今や淨土の正行たる五正行の助正二業に就いて論すれば、初めにこの五正行を修めるに就いて専修、雜修の二つがある。

雜修といふは、此五正行中の助業、正業を並べて修すること、是雜修に就いて専心雜心の二と分れる。

次に専修に就いて云へば、又二種あり。一は唯佛名を稱すること、是は五正行を助正分別して、前三後一の四行を廢して、第四の念佛一行を専修することである。是は第二十願眞門の念佛である。二は五正行に就いてかやうに批判を加へず、各の行を同等と見て、其中の一行を専修することである。

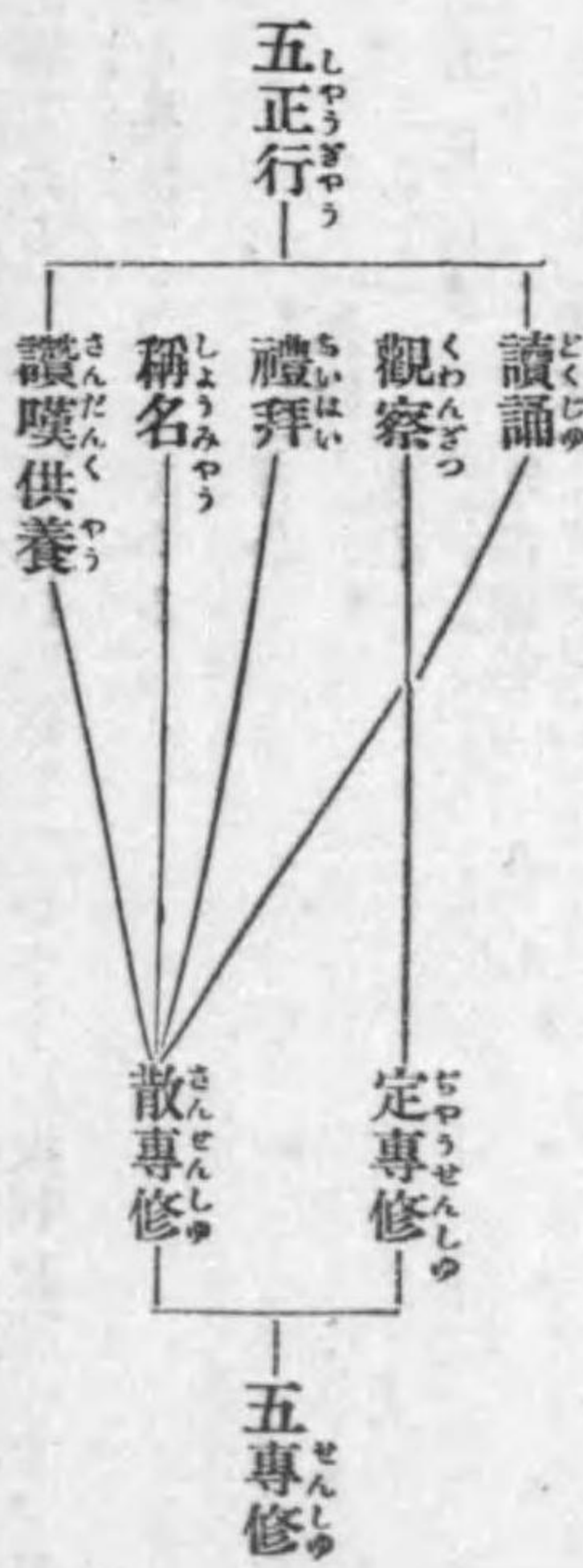


さて又雜修の下に専心、雜心があるやうに、この二専修にも専心、雜心の二つがある。即ち是等の心をもつて二種の専修を修するのである。

二専修の第二の五專といふのは、一は専ら彌陀一佛を禮拜すること、二は専ら淨土の經典を讀誦すること、三は専ら彌陀佛の依正二報を觀すること。四は専ら彌陀の名號を稱す

ること。五は専ら彌陀一佛を讚嘆供養すること、即ち是等の五正行に助正の批判を加へず、其中の一行を専修するのである。

こゝに専修というてあるが、上の唯稱佛名の専修とは其言葉は同一でも、其意味は異つてをる。唯稱佛名の専修は唯行する所の心の専一を意味し、こゝは定専修、散専修の意味である。即ち是を圖示すれば



かくの如く五専修を其質によつて區別すれば、第二の觀察は正しく定心をもつて修する行にして、餘の四正行は散心に修むる所である。

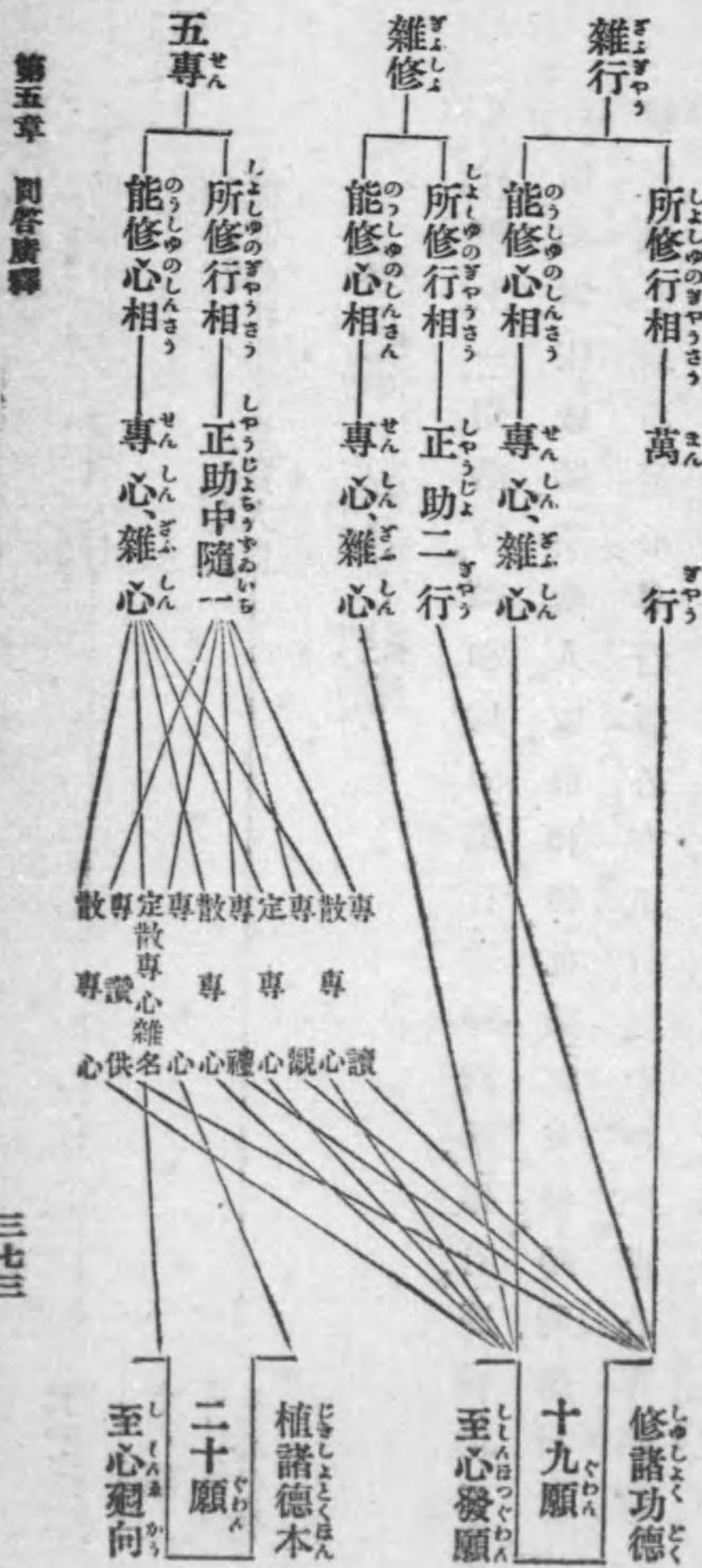
上に雑修と専修の下に、各専心、雑心ありと申して置いたが、其専心といふのは、専ら五正行を修めて餘行へ心移さぬことをいふ。即ち一心なきが故に専心といふのである。

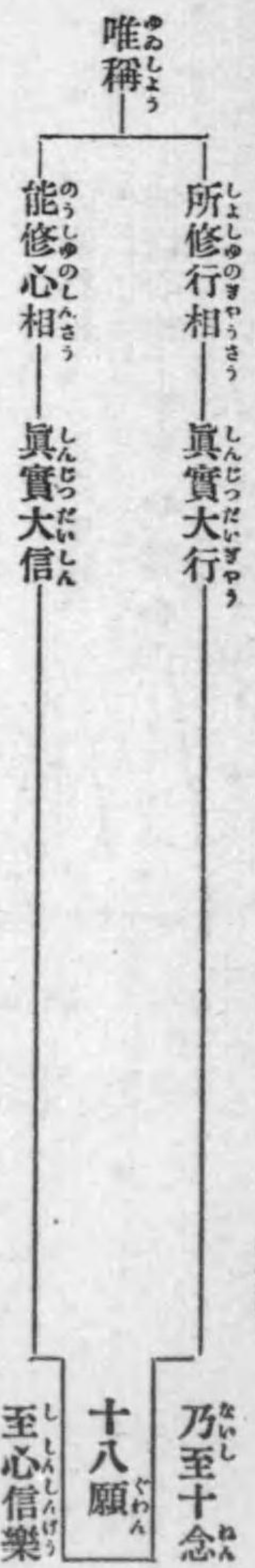
是は亦息慮凝心の定専心と、廢惡修善の散専心の二つに分れる。

又上に雑修といふたのは、五正行の中第四の稱名正定業と他の前三後一の助業とを兼行するのを雑修といふのである。

又上に専心に對して雑心といふたのは、定善心と散善心が間雜るをいふ、即ち或時は定心を以て修め、又或時は散心を以て修める。この不定の心を指して雑心といふたのである。

因に雑行、雑修、五専、唯稱の能所相と三願を配屬すれば左の如くである。





第四節 異名と結釋

凡於淨土一切諸行、綽和尚云、萬行、導和尚稱、雜行、感禪師云、諸行、信和尚依、感師、空聖人依、導和尚也。據經家披師釋、雜行之中、雜行雜心、雜行惠心、專行雜心、亦正行之中、專修專心、專修雜心、雜修雜心、此皆邊地胎宮懈慢界業因、故雖生極樂、不見三寶、佛心、光明、不照攝餘雜業行者也。假令之誓願良有由哉。假門之效、忻慕之釋是彌明也。

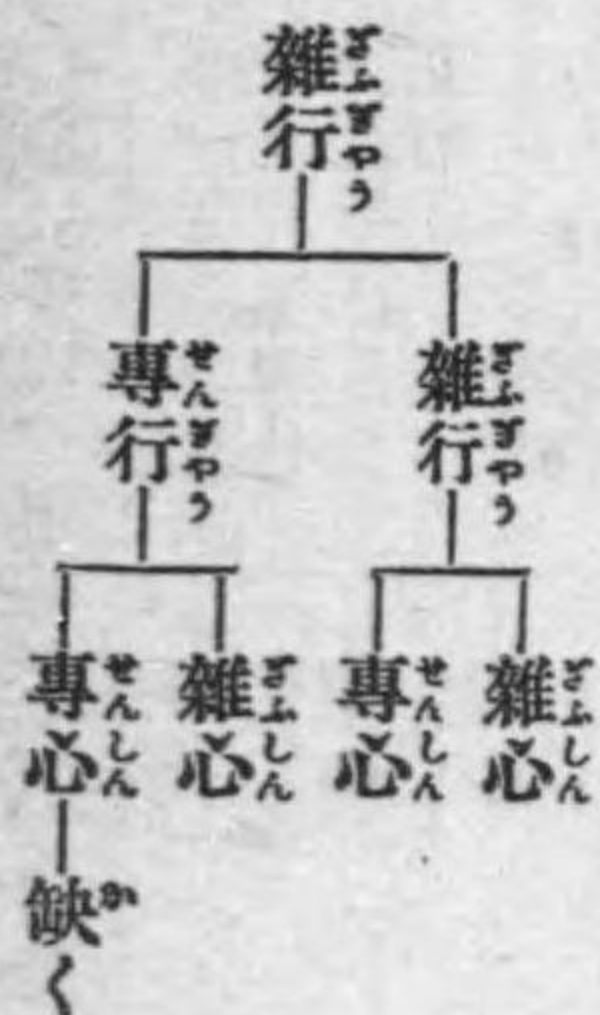
【讀方】 凡淨土一切諸行において、綽和尚は萬行といひ、導和尚は雜行と稱し、感禪師は諸行といへり。信和尚は感師により、空聖人は導和尚によりたまふ。經家によりて師釋をひらくに、雜行の中の雜行雜心、雜行專心、專行雜心あり。また正行の中の專修專心、專修雜心は、これみな邊地胎宮

懈慢界の業因なり。かるがゆへに極樂に生ずといへども、三寶を見たまつらず佛心の光明餘の雜業の行者を照攝せざるなり。假令の誓願まことに由あるかな。假門の教、忻慕の釋、これよく明なり。

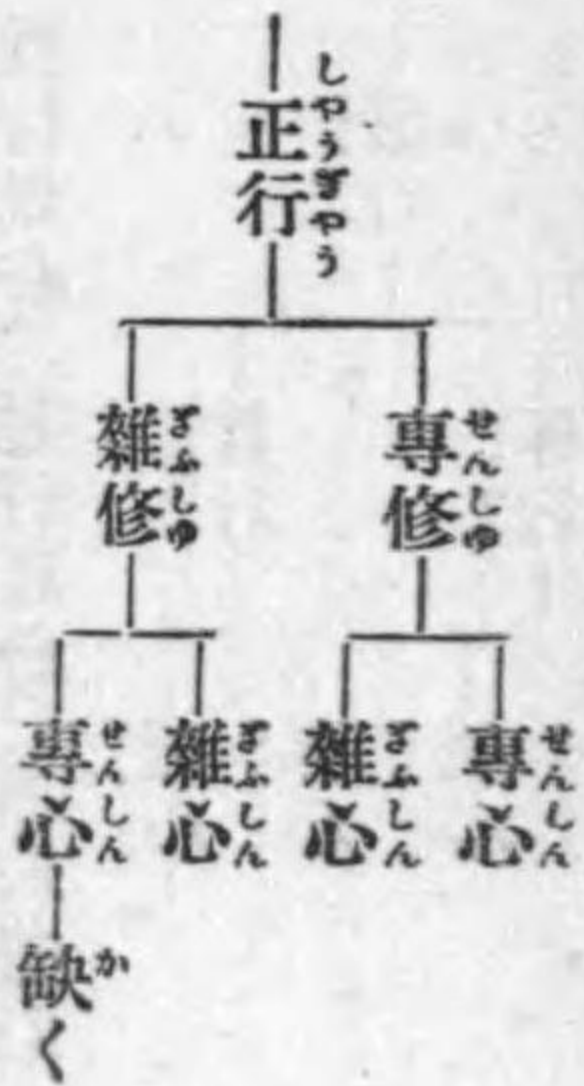
【文科】 雜行雜修の異名を擧げて結ぶ。

【講義】 上に雜行、雜修等の種々の名目を擧げて來たが、凡そ淨土往生に關する一切の諸行に就いて、道綽和尙は『安樂集』下末に之を萬行といひ、善導大師は『散善義』に雜行と稱し、懷感禪師は『群疑論』四に諸行といひ、源信和尙は『往生要集』下末に懷感禪師に依りて同じく諸行と云はれ、源空聖人は『選擇集』本に善導大師に依りて雜行と仰せられた。

今經說を根據として、善導大師の『散善義』『觀念法門』等の師釋を繙いて見るに、雜行の中に、雜行雜心、雜行專心、專行雜心あり、



亦正行に就いては、專修專心、專修雜心、雜修雜心あり、



かやうに諸行、雜行等を修める機類に種々あるけれども、是等は自力の行であるから、邊地胎宮、懈慢界の化土に往生する業因に過ぎない。故に極樂へ往生しても牢獄に入るが如く、華胎につままれて眞の三寶を見奉ることが出来ない。即ち還相の大活動、淨土の大莊嚴を我有とすることが出来ないものである。即ち彌陀の心光は、現當に亘りて淨土往生の正因を外にした雜行雜修をこととする行者を照し給ふことではない。これ眞の意味に於いて佛心光に照されるといふことは、往生の正因を獲、佛心を得得することであるからである。是といふも雜行雜修等を廣説せられたる『觀經』は、第十九願の内容を示されたもので、此中に一代佛教が皆な總じて攝められ、そしてこの衆生の根機に應じたる假の方便によりて、眞實の弘願に入らしめんとし給ふ如來の大悲方便の御思召は誠に深いものである。

雜行雜修
能於修の心
相論

そして又この第十九願は、方便假門の教へであり。之によりて生死の暗黒を慕ふ衆生をして、絶對界の光景を忻慕せしめ給ふ佛意であると善導の釋せられたことは、彌もつて明かとなつたことである。

【餘義】一、雜行について專行あり專心あり、雜行あり雜心あり。この下は雜行雜修について、能修の心相から種類をわけ給ふのであるが、御私釋がいろ／＼に入り亂れてゐて一寸了解するに困難である。それ故に解釋にも古來いろ／＼差違があるが、先づ各々の名目の名義を明にして置いて、圖表にして見ると一番明かになる。

雜行（正行に對する）、人天菩薩等の解行雜行はる故に、往生の因種に非ず廻心廻向の善なるが故に雜行といふ。

雜行（專行に對する）諸善兼行すること。

專行 專ら一善を修すること。

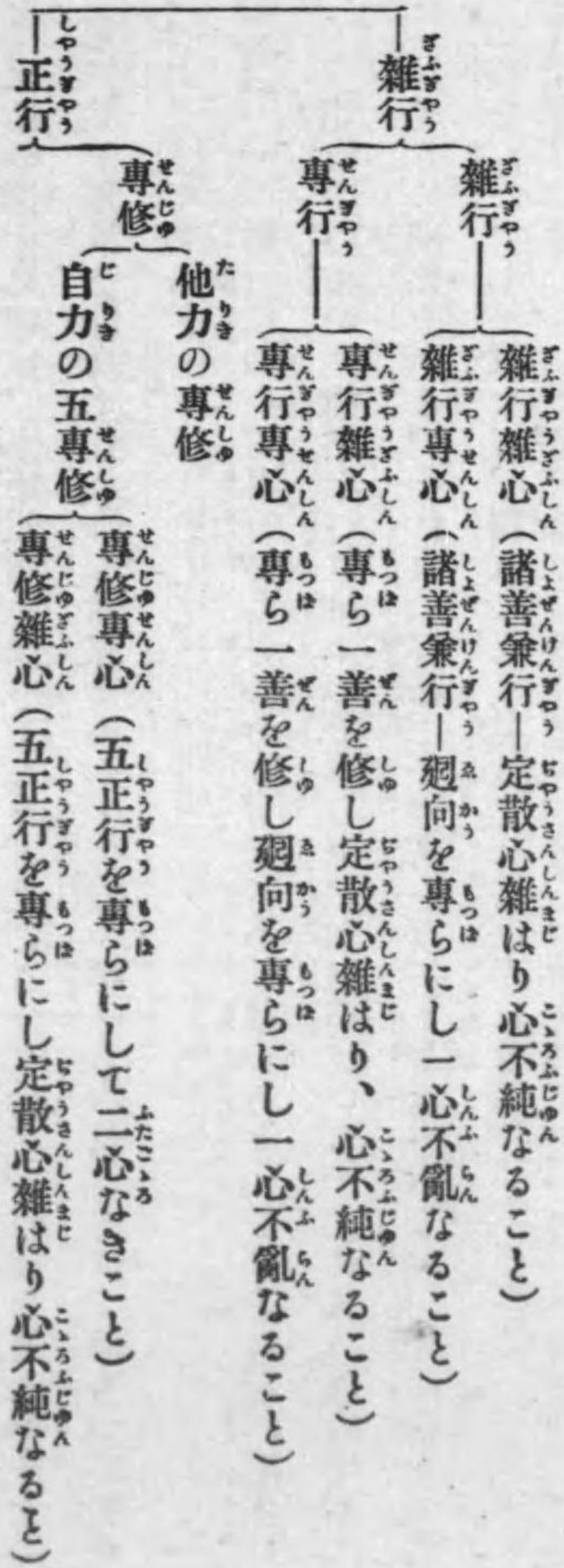
雜心 定散心雜はること。 心左右に亂れて不純のこと。

專心 廻向を專らにすること。 一心不亂のこと。

正行 純極樂の行。

專修 五正行の中専ら一行を修すること。
雜修 助正兼行

これが各名目の意義である。この中専心と雜心の釋體がはつきりせないものであるから、或る人は、専心は修相から解釋し、雜心は心相から解釋してあるけれども、實を尅すれば影略互顯であるといつてゐる。要するに、上の如く専心は廻向を主として一心不亂なること、雜心は定散交はり、心左右に亂れて不純なることと解釋すべきであると思ふ。それで御私釋に顯はれたる雜行正行を圖表にすると左の如くなる。



雜修

雜修雜心 (助正兼行して定散心雜はり心不純なること)
雜修專心 (助正兼行して廻向を専らにし一心不亂なること)

結釋の處では、雜行の下に專行專心の一句なく、正行の下に、雜修專心の一句がない。これにつれていろいろの異論がある。しかし、その異論といふも約めて見れば、專行專心雜修專心の二句はないが當然である。雜行の下で一善を修し廻向を専らにするといふことはあるべき善なく、雜修の下で助正兼行して二心ないといふことはあるべきでないからといふ義と、義としてこの兩者共にあり、御結釋にも八句となるべきであるけれども、今は略して互顯し給うたものであるといふ義である。私共の見るところにすれば、專行專心、雜修專心の二者は義としてあるべきであり、御結釋にも八句となるべきであるといふ後者の説に與したい。然し、それなら何故八句を略して六句とせられしものかといふに、それは分明わからない。いろいろの會通もあるが、どれも徹底しない。此處はさう大切な處でもないから、さう無理に會通する必要もないと思ふ。

次に、專修の下で、一者專稱佛名とあるを自力の稱名と解する説がある。この時は專修の下に他力の專修と、自力の專稱佛名と、自力の五專修と三者を出さねばならぬ譯

となる。この説は、この御私釋に於いて先づ「專修とは唯佛名を稱念して自力の心を離る是れを横超他力と名くるなり。……已に眞實行の中に顯はし畢んぬ」と宣ひ、それから更に雜行雜修を釋する中に、專修について二種一者唯稱佛名二者五專と擧げ、終りにこれ皆邊地胎宮懈慢界の業因なり」と宣うてある處から見ると、自力の念佛と解釋した方が善いやうに思はれるといふのである。然らばこの自力の專稱佛名と、五專修の中の專稱佛名と異同如何といふに、五專修の中の專稱佛名は五正行肩を並べた稱名で未だ廢立を經ず、自力の專稱佛名は前三後一の助業を簡んだ、念佛の一行である。廢立を經た念佛であるといふのである。細かい處まで注意した説のやうであるが、却つて穩當でないやうにも思はれる。矢張り、この專稱佛名は他力の稱名と見て、眞實行の中に顯はし畢つたものを、茲に更に專修の下に出されたものと見るが至當であらう。こう見ると、『愚禿鈔』下十二の五正行とはといつて五專修を出し、更に一心專念彌陀名號是名正定之業と、他力の念佛を出された義にあてはまるのである。

第五節 大觀兩經結釋

二經之三心依顯之義異也依彰之義一也三心一異之義答竟

【讀方】 二經の三心、顯の義に依れば異なり。彰の義に依れば一也。三心一異の義答へ竟んぬ。

【文科】 第一節に提起せられし大觀兩經の異同論は、上來の波瀾曲折を経て、こゝに隱顯一異の結釋を見るに至つたのである。

【講義】 上に提出した『大經』『觀經』二經の三心の交際に關しては、以上長く述べ来たのは正しく其解答であるが、今こゝに其結論を下せば、二經の三心は顯說に依れば、『大經』の三心は弘願他力の信、『觀經』の三心は要門自力の信と異なるが、若し如來の隱彰の實義、即ち二經の根本精神に至りては、二經の三心は全く同一の絶對他力の眞實信心である。

二經の三心一異の問題は是にて解答し竟つた。

第六節 三經融會問答

第一項 問

又問大本觀經三心與小本一心一異云何

【讀方】 また問、大本觀經の三心と、小本の一心と一異いかんぞ。

【文科】 上に大觀兩經を融會したつたから、次で三經の融會に進む。初めに問題提起。

【講義】 上には大觀二經の三心に就いて明されてあるが、次に此二經の三心と『阿彌陀經』の一心との異同に就いて考へて見ねばならぬ。よつてこゝに問題を提起する。

又問ふ、『大經』觀經』二經の三心と、『阿彌陀經』の一心と同一かに。

第二項 方便相の總答

答今就方便眞門、誓願有行有信亦有眞實有方便願者即植諸德本之願是也行者此有二種一者善本二者德本也信者即至心廻向欲生之心是也就機有定有散往生者此難思往生是也佛者即化身土者即疑城胎宮是也

【讀方】 答、いま方便眞門の誓願について行あり信あり。眞實あり方便あり。願といふはすなはち植諸德本の願これなり。行といふはこれ二種あり。一には善本、二には德本なり。信といふは、すなはち至心廻向欲生の心これなり。機について定あり散あり。往生といふはこれ難思往生これなり。佛といふはすなはち化身なり。

土といふはすなはち疑城胎宮これなり。

【文科】 上の問ひに對して、第一にこゝに問題となつてある『小經』開說の方便眞門をあげて答ふ。

【講義】 答ふ、いま方便の誓願たる第廿願眞門に就いて按べて見るに、此願にも行信あり、又眞實と方便とがある。其願といふは即ち植諸德本の願である。其願に説かれたる行に就いて二種あり、一は善本、二は德本である。善本とは因行の圓に具足せるをいひ、德本とは果徳が缺目なく成就せられたるものである。此因果の完備せるものが即ち彌陀の名號である。義は二つであるが、體は名號一つである。

此願の信とは即ち至心、廻向、欲生之心である。即ち眞實心をもつて、稱ふる所の名號の功徳を淨土に廻向して、往生を願求する心である（これ第二十願の行信である）。かくの如く行は他力の名號であるが、信は行者の自力の信である。

又この願を受くる機に就いて云へば、定善、散善の機に分かれてをる。そして往生は絶對他力の往生たる難思議往生に對して、是は半自力半他力であるから難思議往生である。即ち一字の褒貶である。淨土の佛は化身、淨土は疑城胎宮即ち化土である。

【餘義】 一。上來『觀經』一部の法門はこれを説き了つた『觀經』一部隱顯兩面あつて

隱彰の實義はいふまでもなく弘願他力にあるが、顯説は要門自力方便の四法である。我が聖人は、この『觀經』の表面に顯はれたる方便の四法を解剖し批判して『觀經』の根柢的精神の弘願他力の法にあるを闡明なされた。聖人はこれから進んで、筆を『阿彌陀經』に染めて、その根柢的精神を突き止めなさらうとするのである。

『大本』と『觀經』の三心と『小本』の一心と一異如何と問を起して、方便眞門の四法を説明し、『小經』一部の法門を總べ攝め、進んで嘗て『觀經』に用ひ給うた隱顯の釋義を以て『小經』の内的生命を掴み、遂に淨土三部經の一致的精神を開闡し給うた。世に『小經』を讀んだ讀書子はその數多からう。又『小經』を釋し註した學者も數多ある。けれども我が聖人の如く、巧に『小經』を整理して、言外の大旨を色讀した人が外にあらうか。我等はこの三一問答以下の御私釋を讀み行き、飽くまでも、奥の奥までも入り込まねば止まぬ聖人の精神の強烈なるを思はずにはゐられない。

二。我が聖人は、『小經』の隱顯兩面を説くに際して、『觀經』に准知するに、此の經にも亦顯彰隱密の義あるべし。

と宣うた。この御語に顯はれてゐる如く、『阿彌陀經』の隱顯は『觀經』に比准して知り得

たるものにて、隱顯の釋義は正しくは『觀經』を解釋する方軌なのである。このことは、『淨土三部經』の解釋の上に心得て置かねばならぬことである。

それで『觀經』の隱顯と、『阿彌陀經』の隱顯とは全く同じものであるかといふに、隱顯といふ抽象的意義にはかわりはないけれども、直接經說に就いて判する具體的意義に至つては多少異なる點がある。今この異點を擧げて見ると。

(一)『觀經』の隱顯は機法に通じ、『小經』の隱顯は機に局る。『觀經』にありては、法定散二善を説き、機も亦自力定散の二機が説いてあるから、隱顯の釋義は機法共に通じてゐる。それで親鸞聖人は、

顯と言ふは定散諸善(法)を開き、三輩三心(機)を開く、……彰といふは如來の弘願を彰はし、利他通入の一心を演暢す。

と宣うたのである。ところが、『阿彌陀經』は法然上人の『小經釋』にも示されてある通り『觀經』の流通の持是語者即是持無量壽佛名の意を布演した經典で、説き明されてゐる法は弘願念佛の法にて、『大經』に説かれたる法と異なることなく、従つて、法に隱顯ある筈はない。故に聖人はこの下に「教は顯にして根は漸機」と宣うたのである。かく教は顯に

して『大經』と同じく隠顯はないが、『小經』にあつては、能修の機に失がある。息慮凝心の定心にて念佛するもあれば、廢惡修善の散心にて念佛するもあり、又は定散の雜心にて念佛するもあり、共に己が稱へた念佛に功を募るから、法は弘願の念佛でも、機の失によつて、眞門の自力念佛となるのである。この眞門の自力念佛となる點が『小經』の顯說である、方便である。而も『小經』はこの顯說の方便を説き乍ら、一面弘願他力を彰はし、金剛の眞信を得せしむるやうになし給ふ。これが隱彰の實義である。それ故に、今我が聖人は、

顯と言ふは……善本徳本の眞門を開示し、自利の一心を闡まして難思の往生を勸む。

彰といふは眞實難信の法を彰はす、……無礙の大信心海に歸せしめんと欲す。

と宣うたのである。善本徳本は體を押へていへば弘願の念佛である。それが、定散自力の機の失に依つて眞門の念佛となる。これが經の顯說である。不可思議の願海を光闡して無礙の大信心海に歸せしむるが隱彰の實義である。

(二)『觀經』の隱顯は一經の始終に通じ、『阿彌陀經』の隱顯は經の一部分に局る。觀經の隱顯が一經全體に通じ、一經の顯說は全體定散の諸善、一經の隱彰は全體弘願他力なるこ

とは既に上の要門の下で説き了つたことである。今『阿彌陀經』は前項にいふが如く、所説の法には隱顯なく、顯文に明に、眞實の法を説いてあるから、隱顯が一經全體に通ずるとは云はれない。先づ『阿彌陀經』の始めに極樂の依正二莊嚴が説いてあるが、これは化土の相ではなく、明かに眞土の相である。故にこの『化卷』に要門の下に化土を擧ぐる時は『觀經』の淨土これなり」といひながら、眞門の下に化土を擧ぐる時には、「土は即ち疑城胎宮これなり」と『大經』の化土を出し、『阿彌陀經』の淨土と云つてない。又彌陀の名義を説いて、光壽二無量を出し給ふが如き、六方段の諸佛の護念の如き、みな方便の説ではなく、顯了に弘願他力の法が説いてあるのである。『阿彌陀經』にありて、正しく隱顯兩面あるは、「舍利弗不可以小善根」より「應當發願生彼國土」まで、「舍利弗若有人已發願」より「生彼國土」まで、ある。

同じく隱顯とはいひながら、『觀經』、『阿彌陀經』にあつては、この兩項の差異がある。これを知つて兩經典を綴げは、經典の奧義を讀み知ることが出来るであらう。

第三項 隱顯義の別答

第一科 標舉

准知觀經此經亦應有顯彰隱密之義

【讀方】『觀經』に准知するに、この經にまた顯彰隱密の義あるべし。

【文科】『小經』の隱顯義を述ぶるに先ち初めに標舉し給ふ。

【講義】今『觀經』に准じて考へて見るに、此『小經』にも亦顯說と彰隱密の二義あることが知られて来る。

第二科 顯義解釋

言顯者經家嫌貶一切諸行少善開示善本德本眞門勸自利一心勸難思往生是以經說多善根多功德多福德因緣釋云九品俱回得不退或云無過念佛往西方三念五念佛來迎此是此經示顯義也此乃眞門中之方便也

【讀方】顯といふは、經家は一切諸行の少善を嫌貶して、善本德本の眞門を開示し、自利の一心をばげまして難思の往生をすむ。こゝをもつて經には多善根、多功德、多福德因緣ととき、釋には九品ともに回して不退なうといへり。あるひば念佛して西方に往くにすぎたるはなし。三念五念までも佛來迎したまふといへり。これは

これこの經の顯の義をしめすなり。これすなはち眞門の中の方便なり。

【文科】次に別して『小經』の顯義を述ぶ。

【講義】初めに顯說を述べれば、釋尊は此經に於いて、一切の諸善萬行を少善根に過ぎないと嫌貶め、之に對して眞の善本德本は彌陀の名號を執持することであると開說かし、そして一心不亂の自力の一心を奮ひ起すことを勵し難思往生の果を得よと勸められた。これ即ち淨土の眞門である。

此理由によりて、本經には名號を稱ふるをもつて多善根、多福德の因緣であると説き、善導の『觀念法門』下には「散善九品の機類が、諸俱に廻心して淨土の證果を得よ」と仰せられてある。此文には念佛を稱へることはないが、九品の機が廻心することは、即ち諸行を捨て、念佛に歸することを示してをるは明かである。而も尙ほ其念佛を執じて己が善根とする故に、化土に往生するのである。今善導大師は、要門自力の機に對して、眞門の念佛を勧められたのである。

又同じく『觀念法門』下に「念佛して西方極樂へ往生するに若はない。三聲、五聲までも稱ふるものを必ず來り迎ふ」と仰せられてある。かやうに念佛して來迎に預るは、眞門

自力の念佛なることは明かである。

以上は『阿彌陀經』の顯說の義を示すものである。此れ乃ち眞門中の方便說である。

第三科 隱義解釋

言彰者彰眞實難信之法、斯乃光闡不可思議、願海欲令歸無礙、大信心海良勸、既恒沙勸信亦恒沙、信故言甚難也、釋云直爲彌陀、弘誓重致使凡夫念卽生、斯是開隱彰義也。

【讀方】 彰といふは眞實難信の法をあらはす。これすなはち不可思議の願海を光闡して、無礙の大信心海に歸せしめんとおぼす。良に、勸すでに恒沙の勸なれば、信もまた恒沙の信なり。かるがゆへに甚難といへるなり。釋に、たゞちに彌陀の弘誓の重によりて凡夫をして念すれば、すなはち生ぜしむることを致すといへり。これはこれ隱彰の義をひらくなり。

【文科】 初めに正しく『小經』の隱義を明さる一段。

【講義】 『小經』の隱彰といふは、弘願眞實の法をいふ。この法は凡夫の自力の心にては信じ難い法門であるから本經には極難信の法であると彰はしてある。斯れ乃ち佛智不可思議の廣大なる本願の正意を光闡して、煩惱惡業等の何物にも礙へられぬ大信心に入らしめ

んが爲めである。この信海に歸することは、百川の大海に朝するやうに、皆な一味の誓願海に溶け込むのである。

本經には廣く六方恒沙の諸佛の勸信が説かれてあるが、其勸信が既に恒沙の諸佛方の勸めであるから其等の諸佛方の保證を得た信心も亦恒沙の諸佛方に證據立てられた信心と云はねばならぬ。故に是を裏から味うて見れば、かやうに恒沙の諸佛の勸信證誠を要する程極難信である。従つて又極善最上の法たることが知られるのである。

『法事讚』下の釋には、「彌陀如來の本願が深重の力をもつてゐらせられるから、吾等凡夫が、それを信じ奉る一念に卽ち往生せしめ給ふ」とあるは、卽ちこの經の隱彰の實義を開闡されたものである。

經言執持亦言一心執言彰心堅牢而不移轉也持言名不散不失也一之言者名無二之言也心之言者名眞實也斯經大乘修多羅中之無問自說經也爾者如來所以興出於世恒沙諸佛證護正意唯在斯也

【讀方】經に執持といへり。また一心といへり。執の言は心堅牢にしてしかも移轉せざることを彰すなり。持の言は不散不失になづくるなり。一の言は無二の言になづくるなり、心の言は眞實になづくるなり、この經は大乗修多羅の中の無間自説の經なり。しかれば如来世に興出したまふゆへは、恒沙の諸佛證護の正意たる斯にあるなり。

【文科】『小經』の要文を引いて隱義を釋成し給ふ。

【講義】本經には「執持」と説き、亦「一心」というてある。執とは、心に堅く執りて、動轉かないといふこと、持とは、よく持ちて散り亂れず、又失はぬといふことである。即ち執持とは、金剛の如く堅固なることである。「一心」の一は無二といふこと、心は眞實といふこと。即ち二心なき誠實の心といふこと。この執持と一心とは、金剛の信心の換名である。

又斯『阿彌陀經』は大乗經典中に於いて、無間自説の經である、即ち釋尊が、對手の機類に應じて説かれた方便の經典ではなくして、他人の問を待たず、御自身の自内證の儘を説かれた隨自意の經典である。それであるから釋迦如來のこの世に出世し給ひし本懷は唯この經説にあるのである。そして恒沙塵數の諸佛が、彌陀の本願の眞實なることを證誠

し、其本願を信する衆生を護念り給ふ正意も本經に説かれてある。本經が弘願眞實を説いた經典たることは、昭々として火を視るよりも明かである。

【餘義】一『廣本』の三一問答には、「大本觀經の三心と小本の一心」とあり、略本の三一問答には、「二經の三心と小經の執持」とあり、執持と一心と共に信心を顯はす語なることは、『略本』に「執持は即ち一心なり、一心は即ち信心なり」とあり『廣本』の私釋に經に執持と言へり、亦一心と言へり

とあるに依つて明かであるが、かく『廣本』と『略本』に一心と執持を用ひわけ給ふについて議論がある。それは一方に執持の語には隱顯なく、正しく他方の信心を顯はす語であるから、たゞ弘願を顯はす『略本』にこの語を用ひ、一心は隱顯兩面を顯はす語であるから隱顯兩義を詳しく分別して明す『廣本』に用ひ給ふといふに對して、一方には執持の語にも隱顯兩義ありとするのである。

前者の説に依れば、『小經』の執持名號といふは『觀經』流通分の持名の行を受けたるものにて、『觀經』流通分にありては、既に定散の方便を廢捨し了り、弘願の念佛を立てたるもの故、この廢立し了りたる名號を執持するは隱彰の實義なりとするにある。後者の説に

依れば、成る程、念佛は弘願の法にて隠顯なきことは論者のいふ所の如くなれども、この法を修する機に依つて、隠顯が分れて來るのである。既に一心の隠顯ある以上は、一心と全く同じき執持にも隠顯兩面あるべき筈ではないか。南無阿彌陀佛の六字を稱へ、稱へた力をあてにして功を募るは、自力顯説の執持である、他力金剛の信心は隱彰の實義の執持である。今祖釋の上に於て、「執といふは心堅牢にして移轉せざることを彰はすなり。持の言は不散不失に名くるなり」とあるは隱彰他力の執持、引文に入れて、「孤山の疏」の「執は執受なり、持は謂く住持なり、信心の故に執受心にあり、念力の故に住持して忘れず」といふを引き給ふは、顯説方便の執持を顯はし給ふのであるといふのである。

『孤山の疏』の文が顯説の執持を示したものがどうかは決定することが出来ないが、義としては執持にも一心と同じく隠顯兩面あるべきことと私共は思ふのである。

二。次に執持も信心を顯はし、一心も信心を顯はす語ならば、『阿彌陀經』の一ヶ所に信心の語が二つ重なつてあるではないかといふ難があるが、共に信心を顯はす語とはいへ、その顯はす風光が異なつてゐるから繁重の嫌はないのである。執持は法を堅く信するを顯はし、一心は信する心に二心なきを示すのである。

三。無問自說といふことが、『小經』の出世本懷を顯はし、延いて『大經』の出世本懷の經典たる證文となることは既に本講義第一卷二五二頁に詳説した通りである。釋尊は一代經を説き終り給ひ、涅槃の雲に隠れ給ふも問近くして、後世の衆生に執持せしめたいと思召す一法を『阿彌陀經』に於て無問自說し給うたのである。『口傳鈔』下五丁に

これによりて、世尊説法時將了と釋します。一代の説教むしろをまさし肝要いまの彌陀の名號をもつて付屬流通の本意とする條文にありて見つべし。

とあり、舍利弗よく幾度も呼び給へども、智慧第一の舍利弗も、不可思議の彌陀法に打たれて、一言も問ひ奉らず、始めから終りまで、釋尊自ら説教し給ふがこの『阿彌陀經』である。無問自說は、一代の結經たる『阿彌陀經』の一大特色であつて、この特色に依つて『阿彌陀經』の出世本懷の經説たることが知られるのである。猶出世本懷に就ては、第一卷二四七頁以下に詳説してゐるから参照して貰ひたい。

第四項 三經一致結釋

是以四依弘經、大士三朝淨土、宗師開三真宗念佛、導三濁世邪偽、三

經、大綱雖有顯彰隱密之義、彰信心、爲能入、故經始稱如是、如是之義、則善信相也、今按三經、皆以金剛真心、爲最要、真心卽是大信心、大信心、希有最勝、眞妙清淨、何以故、大信心海、甚以回入、從佛力、發起故、眞實樂邦、甚以易往、籍願力、卽生故、今將談一心一異、義當此意也、三經一心之義、答竟。

【讀方】こゝをもて四依弘經の大士、三朝淨土の宗師、眞宗念佛をひらきて濁世の邪偽をみちびきたまふ。三經の大綱、顯彰隱密の義ありといへども、信心をあらはして能入とす。かるがゆへに經のはじめに如是と稱す。如是の義はすなはちよく信する相なり。いま三經を按ずるに、みな金剛の真心をもて最要とせり。真心はすなはちこれ大信心なり。大信心は希有最勝、眞妙清淨なり。何を以ての故に、大信心海は甚だもて入りがたし。佛力より發起するがゆへに。眞實の樂邦は甚もて往きやすし。願力によりてすなはち生ずるがゆへに。いままことに一心一異の義を談せんとなす。まことにこの意なるべし。三經一心の義、こたへをばんぬ。

【字解】一、四依 人々の依憑すべき四大士の稱。初依五品(十信以前の五階級、隨喜品、讚誦品、說法品、兼行六度、正行六度)、十信位の菩薩。第二依、十住、十行、十廻向の菩薩。第三依、十地の菩薩。第四依、等覺、妙覺、或は又初依、五品、十信、第二依、十住、第三依、十行、十廻向。第四依、十地、等覺の稱。

【文科】正しく三經一致を釋成し給ふ一段である。

【講義】かやうな譯合であるから、萬人の依憑すべき佛經の宣說者たる龍天二菩薩、及び支那、日本の淨土の宗師、卽ち曇鸞、道綽等の三朝に於ける七高祖の方々は、他力眞宗の念佛門を開いて、普く末世の罪濁に沈みつゝある邪見憍慢の人々、虛偽詭曲の人々を導いて下されたことである。

淨土三部經の肝要とする所は、實に他力の信心一つである。是をもつて經の極意に達することが出来るのである。よしや其說相には、顯說と彰隱密の異りがあつても、畢竟する所は此信心を明すの外はない。夫故に是等の經典の初めに「如是」といふてある。如是といふことは、善く信する相をいうたものである。今これによりて三經の眞意を按へて見るに、何れも皆な他力金剛の真心をもつて最要としてある。そして此真心は他人廻向の信心にして、この信心こそ世にも稀有なる、最も勝れた、眞實不可思議にして清淨なる佛心である。何故かと云へば、この他力の信心海に歸入することは甚だ困難であるからである。夫は凡夫の力では及ばず、唯如來の他力不可思議力によりて此信心を獲ることが出来るからである。卽ち吾等は迷妄の自力を執する心が深いから、自己の努力で獲られる信心ならば、易いことであるが、唯佛力のみによれば、是程困難のことはない譯である。併し夫が

他力であり、困難であるといふことが、凡夫迷妄の心慮を絶した最勝真妙の金剛心たることを證明してをるのである。

併し凡夫の迷妄に著する方面から云へば、困難であるが、一度廻心すれば又甚だ容易である。即ち眞實の極樂へ生れることはいと易い、夫は自力の功用を籍らず、偏に本願力に乗托して、頓悟頓證するからである。

今大觀二經の三心と、『小經』の一心との異同を述べ來つたが、夫は大凡上述の如くであらうと思はれる。即ち『小經』の顯説によれば、眞門念佛であるが、隱彰の實義から云へば、三經全く同一の他力信心を顯はすといふのである。三經の肝要は唯他力の一心であるといふ義は、是にて答へ竟つた。

第六章 第廿願開説『小經』意

【大意】 上に第四、第五章に互りて、度く第十九願「觀經」意を開説し了つたから、本章に來りて第廿願「小經」意を開説し給ふ。

第一節には第廿願大意として、第一項に此願所破の機類を勸勵し、第三項に正しく方便の眞門を顯はし、第一科より第五科に互りて、雑心、専心、善本、徳本を略釋せらる。更に第三項には二尊の能化、第四項に第廿願を標し、第五項に此願の異名を擧ぐ。其様式は大凡第十九願開説の場合と等しい。

第二節には、善本の經文證として、第一項「大經」第二項「如來會」第三項「平等覺經」第四項「觀經」第五項「小經」の文をあげ

第三節には善本の釋文證として、第一項に善導の釋文を第一科「定善義」以下第五科「往生禮讚」まで九文を引き、第二項に大智律師の文、第三項に智圖法師の文を引き給ふ。

第四節には、勸信を經文證として、第一項に「大經」第二項に「涅槃經」の三文、第三項に「華嚴經」の二文を引き給ひ、

第五節には、勸信釋に證として善導大師の「般舟讚」以下四文を引き給ふ。是れ蓋し『小經』の要義は上に擧ぐる如く善本、勸信の外にないからである。

次の第六節の私釋には第一項に機情の失第二項に悲嘆自昏を述べ、第三項に自力の眞門に滞るることを誡諭し給ふ。明徹の擇法眼と懇切なる宗教味は至れり盡せりである。「小經」を各方面より研覈色味して蘊す所はない。

第一節 第廿願大意

第一項 所機の勸勵

夫濁世道俗應速入圓修至德眞門願難思往生

【讀方】 それ濁世の道俗、すみやかに圓修至徳の眞門にいりて、難思往生をなれがふべし。

【文科】 第廿願の大意の中、初めに此本願に歸入することを勸め給ふ。

【講義】 五濁の末世に生れた出家、在家の人達よ、自力作善の心を捨て、速にあらゆる功德といふ功德が圓に修得せられてある名號の眞門に歸入して、難思往生を願ふが宜しい。

第二項 方便眞門

第一科 標

就眞門之方便有善本有德本復有定專心復有散專心復有定散雜心

【讀方】 眞門の方便につきて善本あり徳本あり。また定專心あり、また散專心あり。また定散雜心あり。

【文科】 眞門の要目を標舉し給ふ一段。

【講義】 第十八願の眞實に入らしめんが爲めの廿願眞門の方便に就いて、善本、徳本の二つがある。復是を修める機に就いて云へば、定專心あり。復散專心あり。復定散雜心あり、之は一々に下に辨述るであらう。

第二科 雜心釋

雜心者大小凡聖一切善惡各以助正間雜心稱念名號良教者頓而根者漸機行者專而心者間雜故曰雜心也

【讀方】 雜心といふは、大小凡聖一切善惡、おのゝ助正間雜の心をもて名號を稱念す。まことに教は頓にして根は漸機なり。行は專にして心は間雜す。かるがゆへに雜心といふ。

【文科】 教頓機漸の雜心を釋し給ふ。

【講義】 先づ定散雜心といふは、定善散善の二心が間雜てゐる心をいふ。即ち大乘、小

乗の聖者、及び善惡の凡夫が、五正行中第四の稱名正業、並びに前三後の助業を雜へ修むる心にて名號を稱念することをいふ。即ちこの五正行は、第二觀察は定心、其餘は散心の修する所であるから、助正間雜の心といふことは、定善、散善の心が間雜り起る心を指すのである。

良に定散雜心なるものは、教の側から云へば圓修至徳の名號であるから一乘頓教であるが、之を修する機から云へば自力を離れることが出来ない故に漸教迂廻の機と云はねばならぬ。修せらるゝ行體は餘行を選びすた純善無漏の名號であつて、是は一向に專修すべきものであるが、いま修する心は自力なるが爲めに定散心の間雜る心である。故に雜心と云はれるのである。

教頓機漸

【餘義】一『阿彌陀經』を判じて茲に「教は頓にして根は漸機」といふてある。この教頓機漸といふは、所謂『阿彌陀經』の教相判釋である。この機教頓漸の教相判釋を『大經』と『觀經』とに加へて見ると、『大經』は機教俱頓であり、『觀經』は機教俱漸である。然らば、この教頓機漸等といふことはいかなることかといふに先づ『阿彌陀經』についていふて見ると、『阿彌陀經』はいふまでもなく、第二十願を開説したる經典であつて、

『觀經』に廣説せられたる定散の諸善を小善根少福德と貶しめ、『觀經』流通の念佛を多善根多福德と褒めてこれを開説し、定散雜心の機類が、この念佛を聞いてその功德に目をかけ、能稱の功を慕り、この功に依つて、臨終來迎を得て往生せんとするを説いて居るのである。それで、所説の法を擧ぐれば、弘願他力の念佛にして、『大經』の法と同一なものである。これを教頓と曰はれたものである。頓といふは所謂圓頓で、『愚禿鈔』上の頓極頓速圓融圓滿之教とある意味である。一名號の中に萬善萬行恒沙の功德を悉く攝在し(圓滿)、この念佛の一行に一切行を具し、一切行に即して念佛の一行(圓融)であり、信の一念に速に無上大利の功德を獲(現益の頓極頓速)臨終の夕に大般涅槃を超證する(當益の頓極頓速)法であるから教頓といふのである。しかし法はかくの如き圓頓の法であるけれども、この法を信受する機類が、猶、弘願一乘に歸入せずして、定散自力の心にて、本願の名號を執して自己の善根となし、能稱の功をつのり、一日七日の稱名に依つて、臨終の來迎を待つて果遂の利益を得て往生せんとするから、機漸といふたものである。『大經』は法は弘願他力の眞實法にて、これを信する機は充分に誘引の實顯はれて、無手と本願のみのりを信受する衆生であるから、教機俱頓である。『觀經』は法は定散の二善にて、機も亦定

散各別の機類であるから、教機俱漸と判じたものである。それで我が祖の常に用ひ給ふ要真弘の三門を以て、三經を判する時には、『阿彌陀經』の念佛は眞門自力の念佛となるが、要弘二門を以て判する時には、『阿彌陀經』は二つに分れて法は弘願他力、機は定散要門の自力となるのである。圖示すれば左の如し。



『阿彌陀經』の念佛が眞門自力の念佛となるは、前にいくたびもいふが如く、法の失でなく、機の失である。白玉を紅錦の上に置けば赤く見ゆるが如く、弘願他力の念佛が機の失に依つて、眞門自力の念佛と呼ばれるに至るのである。

『愚禿鈔』の「一乗機」

因みに、この『阿彌陀經』の機を『愚禿鈔』には一乗の機と呼んであるが、これは『觀經』の漸教廻心の機、『大經』の一乘圓滿の機に對し、前者に對しては一乗の法を信するが故に衰じて、一乗の機といひ、後者に對しては、定散の自力心を帶して念佛に臨むから賤して、圓滿の二字を奪つたものである。

第三科 專心釋

定散之專心者以下信罪福一心願求本願力是名自力之專心也

【讀方】 定散の專心は罪福を信する心をもて本願力を願求す。これを自力の專心となづくるなり。

【文科】 眞門中、專心の意義を願はし給ふ。

【講義】 又定散の專心といふは、専ら定心をもつ所の定專心と、専ら散心をもつ所の散專心を指すので、即ち是等の心をもてる行者が、唯自力の因果罪福を信する心をもつて、如來の本願力を願求するのである。即ち自力の計度を捨て本願力に乗托する一念に、如來の大善大功德の因果が、そのまゝ行者の大善大功德となることを知らず、唯自力に執着する爲めに、如來の名號を我功德として、夫をもつて往生を願求めんとする。即ち是は如來の絶對不可思議力を、小な自分の型に取り込み、夫を我有として、功利的に往生の好結果

を獲やうと企てるので、即ち佛智不思議を信せず、善本、徳本の功德を信する故に罪福を信する心といふのである。

されど又餘へ心向けず、一向に彌陀一佛に向ひ奉る故に、是を自力の専心と名けるのである。

第四科 善本釋

善本者如來、嘉名此嘉名者萬善圓備一切善法之本故曰善本也

【讀方】善本といふは如來の嘉名なり。この嘉名は萬善圓備せり。一切善法の本なり。かるがゆへに善本といふなり。

【文科】眞門中、善本の意義を顯はし給ふ。

【講義】先に眞門の方便に善本、徳本ありと申したが、其善本といふは、彌陀如來の嘉名を指す。あらゆる萬善萬行が圓に備つてを。即ち是れ一切の善法の根本である。故に善本といふので、是は名號の因位の方面に就いていふのである。即ち如來が因位に於いて是等の萬善の法を圓備せられたことを顯はしてをる。

第五科 徳本釋

徳本者如來、徳號此徳號者一聲稱念至徳成滿衆禍皆轉十方三世徳號之本故曰徳本也

【讀方】徳本といふは如來の徳號なり。この徳號は一聲稱念するに至徳成滿し衆禍みな轉ず。十方三世の徳號の本なり。かるがゆへに徳本といふなり。

【文科】眞門中、徳本の意義を顯はし給ふ。

【講義】徳本といふは、彌陀如來の至徳の尊號をいふ。上の嘉名が因位に屬するに對して、是は果位に屬する、或は上は法の完美を示し、是は正しく機の上に圓現する方面を述べるといふても宜しい。即ち彌陀の名號は、一聲信じ稱ふる時に、其名號の廣大なる功德利益が、行者の識心に満ちて、煩惱惡業の禍は頓に功德と轉じ變る。良に是れ十方三世に於けるあらゆる徳號を生む所の根本である。故に徳本と名づけられる。

第三項 二尊能化

然則釋迦牟尼佛開演功德藏勸化十方濁世阿彌陀如來本發

果遂之誓^ヲ悲引^{シテ}諸有^ヲ群生^ニ海^ニ

【讀方】 然ればすなはち釋迦牟尼佛は、功德藏を開演して十方濁世を動化したまふ。阿彌陀如來は、もと果遂のちかひをおこし諸有の群生海を悲引したまふ。

【字解】 一。功德藏。功德の藏。善根を收貯したること。福德莊嚴の充滿せること。こゝでは萬善萬行の功德を藏めたる彌陀の名號のこと。

【文科】 第十九願の下と等しくこゝに二尊の能化を明し給ふ。

【講義】 是によりて見れば、大聖釋迦牟尼如來は功德の寶藏ともいふべき彌陀の名號の威徳利益を開演べて、普く十方の濁惡世に生れたる衆生を化益し給うたが、更に其源を云へば、阿彌陀如來はその因位に於いて、果遂の誓願 即ち第廿願を起して、あらゆる二十五有界の衆生を導き、遂に大悲をもつて弘願眞實に入らしめ給ふからである。

第四項 第廿願名

既而有悲願^ニ名植諸徳本之願^ニ

【讀方】 すてにして悲願います。植諸徳本の願となづく。

【字解】 一。植諸徳本願。彌陀の四十八願中の第廿、念を彌陀の淨土に保けて、諸の功德の本因を植

ふ、これを廻向すれば、いつかは往生の願望を果し遂げるであらうと誓ふ。故に係念定生願、不果遂者の願、又は至心廻向の願と名けらる。

【文科】 眞門の本願標舉。

【講義】 即ちこゝに如來の悲願います。夫は第廿願である。夫を植諸徳本之願と名ける此は諸の徳本を植ふるもの、即ち如來の名號を稱へた功德をもつて往生を願ふ者を助けるといふ本願である。

第五項 第廿願異名

復名^ニ係念定生之願^ト復名^ニ不果遂者之願^ト亦可^レ名^ニ至心廻向之願^ト也

【讀方】 また係念定生の願となづく。また不果遂者の願となづく。また至心廻向の願となづくべきなり。

【文科】 異名布列。

【講義】 復この願を係念定生之願と名ける。係念は念を西方に係けること、是れは因である。そして定生はこの因に對する往生の果である。即ち係念するものは、必ず往生せ

しむるといふ誓願である。復不果遂者之願と名ける。如來が此願に入るものは、どうして
も眞實報土の往生を果し遂げさせずにはおかぬと誓はせられた本願である。亦本願の名號
を己が善として廻向するのであるから至心廻向の願と名けることが出来ると思ふ。

【餘義】一。茲に第二十願について四名を挙げ給ふてある。前三名は諸師共許の願名で
あり、後の一名は我祖御己證の願名である。

植諸徳本の願といふは、第二十願の一願事因行について名を立てたるもので、願文の儘
の名稱である。

係念定生の願、不果遂者の願といふは、同じく第二十願の一願事利益について立て、係
念定生は義に依り、不果遂者は願文の儘の名である。

至心廻向の願といふは、同じく第二十願の一願事信について立名し、願文の儘の名であ
る。例の如く御己證の願名であるから、「亦可名」と仰せられてあるが、第二十願の特色を
最も明かに發揮する願名である。

第二節 善本經文證

第一項 「大無量壽經」の文

第一科 因願文

是以大經願言設我得佛十方衆生聞我名號係念我國植諸徳
本至心廻向欲生我國不果遂者不取正覺

【讀方】こゝをもて大經の願にのたまはく、たとひわれ佛を得たらんに、十方の衆生、わが名號を聞き
て、念を我國にかけて、もろくの徳本を植ゑて、心を至し廻向して我國に生ぜんとおもはん。果遂せずといは
ば正覺をとらじ。

【文科】正しく第廿願標舉。

【講義】されば大經第廿願に宣給はく、設我佛となるであらう時、十方の衆生が、我
名號の謂れを聞いて、我極樂國へ念を係け、諸の徳本たる名號を稱へ、一心に其功徳を廻
向して、我極樂淨土へ往生せんことを欲ふならば、必ず眞實報土の往生を遂げさするであ
らう。若し左様に出ないならば、我は正覺を得ないであらう。

【餘義】一。第廿願に就いては、法位、憬興、玄一等の諸師の如き、稱名往生の願とし

て順次生を許す説もあれど、義寂、御廟、眞源等多くの諸師は、皆な此願をもつて結縁の願としてゐる。即ち係念定生の願とか、聞名係念の願等と稱するものは是である。是は「係念我國」を、願の中心と見たので、彌陀の名號を聞いて、極樂へ往生したいと唯念を係けたことが結縁となりて、次生には往生することは出来ないが、第三生には往生することが出来るといふのである。

是説を判明せしめたのは『鎮西宗要』『選擇決疑鈔』に表はれたる二種の三生果遂説である。第一は過現門の三生である。即ち過去世に於いて定散の善根を修むるが一生、願文に所謂「植諸徳本」である。次に現在に於いて、是等の過去の善根を彌陀の淨土に廻向するが一生、願文に所謂「至心廻向」である。更に第三生に至つて彌陀の淨土に生れる、願文に所謂「不果遂者」である。第二は現未門の三生である。即ち現在に諸善を修めても未だ彌陀の淨土に廻向せない。次生に再び娑婆に生れて初めて先に修めたる善根を淨土に廻向するが第二生、かくて第三生に彌陀の淨土へ生れる。かくの如く三生に亘りて果遂の意義がある。以上の中第一の結縁の一生には、其厚薄によりて幾生をも經るのであるが、其を一括して結縁の一生といふのである。

西山にも『略箋』『選擇集私集鈔』等に此甘願を宿善果遂の願と稱して三生果遂説を述べてある。其意によれば、過去に修めた善根が外障等に妨げられて果し遂げないのが、第二生に彌陀念佛に歸するに至つて、百合の根が春に逢うて芽を出して花が咲くやうに、念佛の功德として開發する。かくて第三生には往生させずには置かぬとは此願意であるといふ即ち「植諸徳本」は過去生の善根、「至心廻向」は第二生の念佛の中へ廻向する所、かくて「不果遂者」が第三生の往生である。

二。然るに本宗にては、第廿願を眞門の分齊と見、第十八、第十九と關連して三願、三經、三機、三往生に配して、自力念佛の誓願とするので、諸師他流の間に立ちて、卓然たる見解を發揚してゐるのである。即ち此願の「植諸徳本」は善本徳本の名號、「至心廻向」は自力廻向の安心である。

されど、三生果遂説は天台、華嚴等にも三生成佛の名の下に、既に建立せられてゐる程人心の深い所に根據ある説である。然るに本宗に於いて此説がないのであるか。是に就いて、存覺師は此下の『六要』に上説に同じて本宗獨特の三生果遂説を述べてある。第一生は聞名、第二生は化土往生、第三生は報土、是は自ら彼の鎮西の現未門に相

當してゐるのである。是を『樹心録』には二義を以つて解釋してゐる。

『樹心』二義

一、約三經生（亦名三轉生果遂）

一、『定善義』説
二、『大經』説

二、約三願入（亦名三願入）

初めに轉生果遂に約する中、第一、『定善義』の説は其文「過去已曾修習此法」は過去の第一生にして、此法とは念佛の一法を指す。即ち植諸徳本である。次に「今得重聞」即生三歡喜は第二生にして、現在世である。かくして此人は未來必ず淨土に往生することが第三生である。是は鎮西の過現門に相當するのである。

次に轉生果遂の第二、『大經』説は下卷勸信誠疑の下、「於此諸智疑惑不信」は此世に於いて自力疑心をもつて名號を聞き、次生に「生彼宮殿」と化土に生れ、かくして「識其本罪深白悔責」して報土に生るゝが第三生である。是は上述の如く鎮西の現未門に相當する。

更に第二の願入とは、一生に於ける信念の歷程に就いて三階段を経るといふのである。『化卷』第九の「是をもつて愚禿覺、乃至、久しく萬行諸善の假門をいで、乃至善本徳本の

真門に回入し乃至選擇の願海に轉入せり乃至果遂の誓ひ良に由ある哉」といふものは是にして所謂三願轉入である。

之を要するに、果遂の誓願は、深重なる大悲の正しく機に加はる歷程を示すものにして、轉生と願入と相俟つて此願の圓現を見るのである。『淨土和讃』に

至心廻向欲生と

十方衆生を方便し
不果遂者と願じける

名號の真門ひらきてぞ
と宣給ひ、進んで

定散自力の稱名は

果遂のちかひに歸してこそ
真如の門に轉入する。

をしへざれども自然に
と仰せられしは、よく斧鑿を離れて、精神過程の妙味を歌ひ出したるものである。

第二科 成就文

又言於此諸智疑惑不信然猶信罪福修習善本願生其國此諸衆生生彼宮殿

【讀方】 又のたまはく、この諸智において疑惑して信せず。しかるになを罪福を信じて善本を修習して、そ

の國に生ぜん願ぜん。このもろくの衆生かの宮殿に生ぜん。

【字解】一。罪福 惡業、惡果を罪といひ、善業、善果を福と云ふ。惡業は必ず惡果を招きて衆生を播き破る故に罪といひ、善業は必ず善果を招きて、衆生を富樂ならしむるが故に福といふ。

【文科】「大經」下卷成就文を引用し給ふ。

【講義】又「大經」下卷に宣給はく、此如來の殊勝なる諸の智慧を疑惑うて信じ奉らず、却つて罪福因果の理のみを信じ、惡因惡果を怖れて、善因善果を得んとし、乃ち功德善根の本たる名號を稱へ、其功德をもつて極樂國土に生れんと願ひ奉る。是等の自力疑心の機は、彼の淨土中の化土たる七寶の宮殿に生れるのである。

第三科 三十行偈

又言若人無善本不得聞此經清淨有戒者乃獲聞正法上巳

【讀方】又のたまはく、もし人善本なければこの經を聞くことをえず。清淨に戒を有するもの、いまし正法を聞くことをえん。上巳

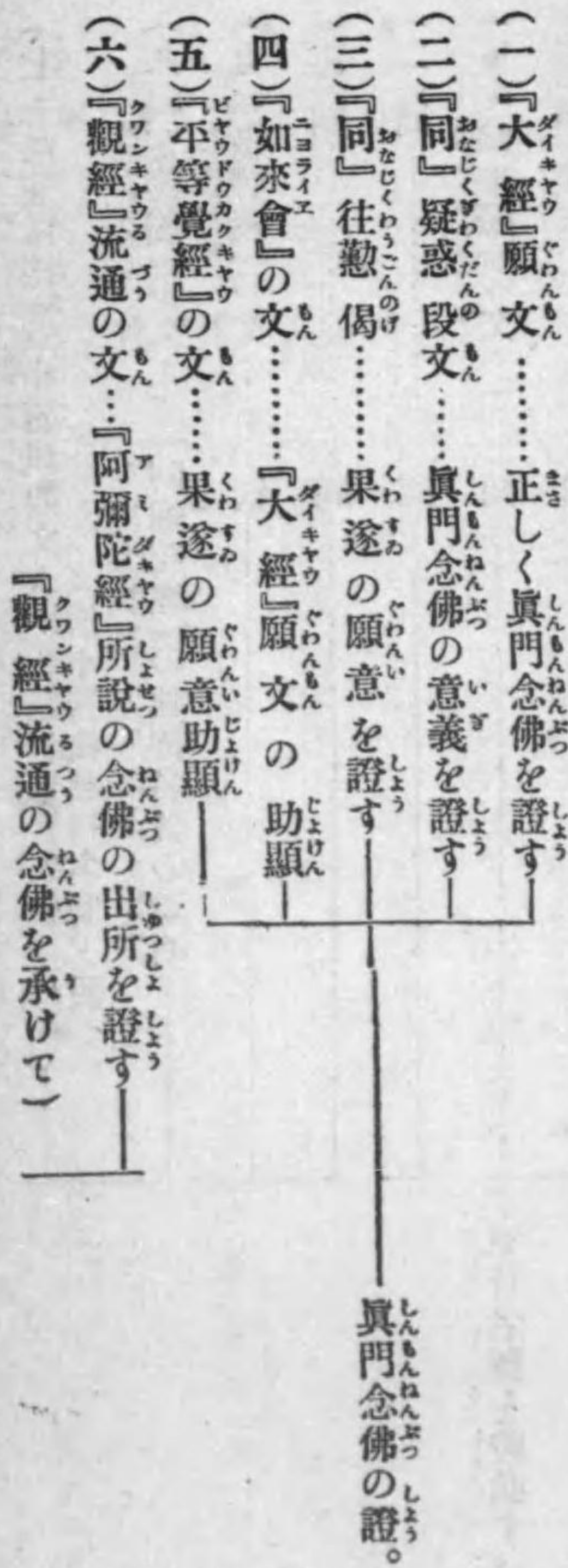
【文科】「大經」下卷三十行偈の文引用。

【講義】又同じく下卷に宣給はく、若し衆生にして、過去世に於いて彌陀の名號を聞いて、念を西方に係けたといふ所謂係念の宿善がないならば、今世に於いて第卅願の眞門の

眞門念佛
證據の諸文

教へを聞くことは出来ない。そして又同じく過去世に於いて、彌陀の淨土は念じないが、兎も角も佛の教によりて清淨の戒を有つたもの即ち汎爾の宿善がないならば、今世に於いて念佛の法門を聞くことは出来ないのである。

【餘義】一。茲に經典と釋書から廿八文引用してある。共に眞門念佛の證として引き給うたのである。大體に於て三段に分れる。即ち(一)、第一文から第五文まで眞門念佛の證文。(二)、第六文から第十八文まで執持名號の名號、功德を證し、(三)、第十九文から第廿八文まで難を擧げて信順を勸むる證文として引き給うたものである。



- (七)『阿彌陀經』の小善根の文……捨小善根執持名號と説く
 - (八)『定善義』の文……『阿彌陀經』の執持名號の説明
 - (九)『散善義』の文……同
 - (一〇)同……同
 - (一一)同……同
 - (一二)『法事讚』の文……同
 - (一三)同……同
 - (一四)同……同
 - (一五)『般舟讚』の文……同
 - (一六)『禮讚』の文……同
 - (一七)元照律師の文……同
 - (一八)孤山の『疏』の文……同
 - (一九)『大經』の文……五難を擧げて信を勸む
- 執持名號を證顯す。

- (二〇)『涅槃經』の文……遇善知識の難を擧げて信を勸む
 - (二一)同……信樂受持の難を擧げて信を勸む
 - (二二)同……同
 - (二三)『華嚴經』の文……遇善知識の難を擧げて信を勸む
 - (二四)同……同
 - (二五)『般舟讚』の文……同
 - (二六)『禮讚』の文……信樂受持の難を擧げて信を勸む
 - (二七)『法事讚』の文……聞法と信樂受持の難を擧げて信を勸む
 - (二八)同……信樂受持の難を擧げて信を勸む
- 難を擧げて信を勸む。

第二項 『如來會』の文

無量壽如來會言若我成佛無量國中所有衆生聞我名以己善根廻向極樂若不生者不取菩提上巳

【讀方】無量壽如來會にのたまはく、もしわれ成佛せんに、無量國のなかの所有の衆生、わが名を説かんを聞きて、もておのれが善根として極樂に廻向せん。もし生れずと云はば菩提をとらじ。上巳

【文科】『如來會』の因願引用。

【講義】『無量壽如來會』に言く。若し我、佛となるであらう時、數限りない國々のあらゆる衆生が、我名號の謂れを説くことを聞いて、即ち其名號を己が善根となし、夫を極樂に回向して往生を願ふならば、必ず我國へ往生せしむるであらう。若し往生することが出来ないならば、我は正覺を得ないであらう。

第三項 『平等覺經』の文

平等覺經言非有是功德人不得聞是經名唯有三清淨戒者乃還聞斯正法惡憍慢蔽懈怠難以信於此法宿世時見佛者樂聽聞世尊教一人之命希可得佛在世甚難值有信慧不可致若聞見精進求上已

【讀方】平等覺經にいはいく、この功德あるに非ざる人は、この經の名を聞くことをえず。たゞし清淨に戒を有てるもの、いまし選りてこの正法をきく。惡と憍慢と蔽と懈怠とは、もてこの法を信することかたし。宿世のときに佛を見たてまつれる者、このんで世尊の教を聽聞せん。人の命まれに得べし。佛は世に在ども甚ま

うあひがたし。信慧あること到的べからず。もし聞見せば精進してとめよ。上已

【字解】一。惡、こゝでは蔽惡のこと。即ちかたいちのわるきこと。

二。蔽、教法を惡しく聞くこと。聞きやうの惡きこと。

【文科】『平等覺經』の文を引用し給ふ。

【講義】『平等覺經』に宣給はく。この彌陀如來の御教は譯なしに聞くことは出来ない。即ち宿善の功德を具へたものでなければ、是經名を聞くことは出来ないのである。また前世に於いて清淨なる戒行をたもつたものでなければ、此世に於いて如來の正法を聞くことは出来ないのである、根性のねぢけた者、憍慢者、自ら自分の智慧を眩ますやうな聞きやうの悪い者、懈怠者とは、この法を信することは極めて六づかしい。宿世に諸佛に逢ひ奉つた人々は、自ら樂んでこの如來の御教へを聞くであらう。

人界に生を稟けることは罕である。人界に生を稟けても佛の御出世に逢ふことは甚だ難い。更に佛に御逢ひ申しても、佛を信する智慧を得ることは中々容易なことではない。若し耳に佛法を聞き、目に佛法を見ることが出来たならば、誠に獲難い機會を獲たと喜び精進んで法を求めよ。

第四項 『觀無量壽經』の文

觀經言佛告阿難汝好持是語持是語者即是持無量壽佛名也

【讀方】觀經にのたまはく、佛阿難につけたまはく、汝よくこの語をたもて、この語をたもてといふは、即ち、無量壽佛の名をたもてとなり。上

【文科】『觀經』流通分を引用し給ふ。

【講義】『觀無量壽經』に宣給はく、佛、阿難尊者に仰せらるゝやう。阿難よ、汝よく是語を心に執持てよ、この語を執持てとは即ち無量壽佛の御名をたもてといふことである。

第五項 『阿彌陀經』の文

阿彌陀經言不可下少善根福德因緣得生彼國聞說阿彌陀佛執持名號

【讀方】阿彌陀經にのたまはく、少善根福德の因緣をもて、かの國に生ずることを得べからず。阿彌陀佛を説くを聞きて名號を執持せよ。上

【文科】『阿彌陀經』の文御引用。

【講義】『阿彌陀經』に宣給はく、極樂は大乗善根界であるから、自力の定善散善等の少善根、小福德の因緣をもつては、往生することは出来ないのである。

然らば如何なる因緣によりて往生することが出来るのであるかと云へば、唯阿彌陀如來を説き奉ることを聞く丈である。即ち彌陀の名號の謂れを心に聞き開いて執持ことである。

第三節 善本釋文證

第一項 善導大師の釋文

第一科 『定善義』の文

光明寺和尚云、自餘衆行雖名是善、若比念佛者、全非比校也。是故諸經中處處廣讚念佛功能、如無量壽經、四十八願中、唯明專念彌陀名號得生、又十方恒沙諸佛、證誠不虛也。又此經定散文中、唯標專念名號。

得_ト生_ヲ此_レ例_ニ非_レ一_ニ也_ク廣_ク顯_シ念_フ佛_三昧_一竟_ト

【讀方】光明寺の和尙のたまはく、自餘の衆行はこれ善となづくといへども、もし念佛に比ればまた比較にあらず。このゆへに諸經のなかに處々にひろく念佛の機能をほめたり。無量壽經の四十八願の中のごときは、たゞ彌陀の名號を專念して生ずることを得とあかす。また彌陀經の中のごときは、一日七日、彌陀の名號を專念して生ずることをう、また十方恒沙の諸佛證誠處からざるなり。またこの經の定散の文の中には、たゞ名號を專念して生ずることをうと標す。この例一にあらず。ひろく念佛三昧をあらはしをばんぬ。

【文科】『定善義』の文によりて、諸行を廢し念佛を勸め給ふ。

【講義】光明寺の善導和尙の『定善義』に宣給はく、念佛以外の種々の行業は、元より淨土の善根と名けられてはをるけれども、若し之を念佛に比べるならば、全く比較にはならぬ。夫であるから諸經典の中に、處々に廣く念佛の功德利益の廣大なることが讃嘆へられてある。先づ『大無量壽經』の四十八願の如き、其所詮とする所は第十八願にして、即ち唯彌陀の名號を信じ稱へて、極樂に往生するのであると明されてある。又『阿彌陀經』には、一日乃至七日專ら彌陀の名號を信じ稱へて往生するのであると説き、又十方恒沙の數限りない諸佛は、念佛往生の虚しからざることを證誠し下されてある。終りに此『觀無

量壽經』には、定善散善を説いた中に、唯專ら彌陀の名を信じ稱へて、極樂淨土へ往生することが出来ることと標明げられてある。是等の例は上に擧げる如き一二に止るものではない。擧ぐるに遑あらずである。廣く念佛三昧の意義を顯はし竟る。

第二科 『散善義』の文

又云、又決定深信彌陀經、中十方恒沙、諸佛證勸一切凡夫、決定得_ト生_ヲ、至_レ諸佛、言行不相違、失_レ縱令釋迦指_シ勸_シ一切凡夫、盡_シ此_一、一身_ヲ專念專修、捨命已後、定生_ニ彼國_ニ者、即十方諸佛悉皆同讚同勸、同證何以故、同體大悲、故一佛所化、即是一切佛、化一切佛、化即是一佛、所化即彌陀經、中說_ニ至_レ又勸_シ一切凡夫、一日七日一心專念彌陀名號、定得_ト往生_ニ、次下文云、十方各有恒河沙等、諸佛同讚釋迦、能於五濁惡時、惡世界、惡衆生、惡煩惱、惡邪無信、盛時指_シ讚彌陀名號、勸_シ衆生、稱念必得_ト往生_ニ、即其證也、又十方佛等、恐_レ畏衆生、不信釋迦一佛、所說、即共同心同時、各出_シ舌相、徧覆_シ三千世界、說_ニ誠實言_ニ、汝等衆生皆應_レ信_ニ是釋迦、所說所讚所證、一切凡夫不

問、罪福多少時節、久近、但能、上、盡三百年、下、至一日七日、一心專念彌陀、名號、一定、得往生、必無疑也、是故、一佛、所說、一切佛、同、證誠、其事、也、此名、就人、立信、也、
要抄

【讀方】又のたまはく、また決定してふかく彌陀經の中に、十方恒沙の諸佛、一切凡夫を證勸して、決定して生ずることなうと信ぜよ。(乃至)諸佛の言行あひ違失したまはず。たとひ釋迦として一切の凡夫を勸て、この一身をつくして專念專修して、命を捨て後さだめてかの國に生ずといふは、すなはち十方の諸佛のごとく皆おなじく證め、おなじく勸め、おなじく證したまふ。何をもちのゆへに同體大悲のゆへに。一佛の所化は、すなはちこれ一切佛の化なり。一切佛の化は、すなはちこれ一佛の所化なり。すなはち彌陀經のなかにとかく(乃至)また一切の凡夫をすゝめて、一日七日一心にして彌陀の名號を專念すれば、さだめて往生を得と。次下の文にのたまはく、十方におの恒河沙等の諸佛ましくして、おなじく釋迦をほめたまはく、よく五濁、惡時、惡世界、惡衆生、惡煩惱、惡邪、無信の盛んなる時において、彌陀の名號を指證して、衆生を勸勵して稱念せしむれば、かならず往生を得と。すなはちその證なり。また十方の佛等、衆生の釋迦一佛の所說を信ぜざらんことを畏れて、すなはちともに同心同時にの舌相をいだしてあまねく三千世界を覆うて誠實の言をときたまはく、なんぢ衆生、みなこの釋迦の所說、所證、所證を信すべし。一切の凡夫、罪福の多少時節の久近をとはず、但よく上百年をつくし、下七日に至るまで、一心に彌陀の名號を專念すれば、さだめ

て往生をうることを、必疑なきなり。このゆへに一佛の所說をば、一切佛おなじくその事を、證誠したまふ。これを人に就いて信を立つとなづくなり。要を抄す

【字解】一、同體大悲 諸佛の慈悲をいふ。三世諸佛の慈悲は、衆生をして彌陀の淨土へ往生せしむることである。故に諸佛の慈悲は彌陀と同體の慈悲である。

二、五濁 末世に行はるる五つのいまわしき事。劫濁(時代の墮落)、見濁(人々の見解汚る)、煩惱濁、衆生濁(民衆の墮落)、命濁(短命)。

【文科】『散善義』第一文によりて諸佛證誠の念佛を明し給ふ。

【講義】又『散善義』に宣給はく、又『阿彌陀經』の中には、十方恒沙の數限りなく諸佛方が、一切の凡夫の爲めに、念佛往生の虚しからざることを證據立て、この經說を信せよさらば決定往生することが出来る。と御勸め下されてあるが、この證誠の御言葉を決定して深く信せられよ。

諸佛の御言葉と其行力とは相離れることはない。即ち御言葉は眞實にして行力の表現であり、行力はそのまゝ、言葉と表はれるのである。

あの釋迦如來があらゆる凡夫を教へ勸めて、彌陀の淨土を願生せしめ、此肉身のあ

る限り、ひたすら念佛の一行を修すれば、命終つて後極樂へ往生することが出来る。説かれたことを、十方に在すあらゆる諸佛も、亦釋迦如來と同じやうに、念佛の一行を讃嘆し、信心を勧め、自ら證據に立つて下された。斯の如く釋迦如來を始め、一切の諸佛がすべて皆彌陀如來の名號を稱へよと勧めなされることは、何故であらうかと云ふに、彌陀の大悲も諸佛の大悲も、目指す所は同じであるからである。そは諸佛といふも、元は彌陀一佛より顯はれ給ふたもので、諸佛の大悲といふも、畢竟する所、一切衆生をして彌陀の淨土に往生させたいといふに外ならぬ。故に一佛の化益し給ふ衆生は、同時に一切の佛の化益し給ふ衆生であり、一切の佛の化益し給ふ衆生は、同時に一佛の化益し給ふ衆生である。斯の如く諸佛の大悲は全く同じく、釋迦も諸佛も、同様に彌陀如來の名號を讃嘆し、念佛一行を修せよと御勧め下さるのである。

即ち『阿彌陀經』の中に乃至釋迦如來は又すべての凡夫を勧め、一日乃至七日の間、一心に彌陀の名號を稱念すれば、必定極樂に往生することが出来る。と説かれてある。そして同經の終りの文には、十方の世界に、恒沙の沙の數程の諸佛が在して、口を揃へて、釋迦如來が、能くも此の五濁の惡時、惡世界、惡衆生、惡見、惡煩惱、惡邪、無信仰の時代

に、彌陀の名號を讃嘆し、衆生を勧め勵して、名號を稱念すれば、必ず往生が出来ると御説きになつたことごと、讃嘆せられてある。是は釋迦如來と諸佛とが、同體の大悲で、同じやうに讃嘆勸信なされた證據である。

又十方に在す諸佛方は、衆生が、釋迦如來一佛の説法丈では、信せないやうなことがあるかも知れぬと云ふので、同體の大悲心から、釋尊の『阿彌陀經』を説かれると同時に、銘々に廣長の舌を出して三千世界を覆ひ、汝等衆生、此釋迦如來の説き給ふ所、讃嘆し給ふ所、證據し給ふ所を信仰せよ。あらゆる凡夫、いかなるものでも、罪業福徳の多少に拘らず、念佛を修する時節の長い短いには依らず、但上は命のある限り、下は一日乃至七日の間でも、一心に専ら彌陀の名號を稱念すれば、必ず極樂へ往生することが出来る。是は徹塵も疑ふことはない。と御説きになつた。

かやうに釋迦如來一佛の説法を、一切諸佛が證明せられたのである。上來述べ来た所は、釋迦諸佛の能説の人に就いて信を立てるのであるから、就人立信といふのである。

又云然望佛願意者唯勸正念稱名往生義疾不同雜散之業一如

此、經及諸部、中處處廣、嘆上勸令、稱名將爲三得益也、應知

【讀方】 又のたまはく、しかるに佛の願意にのぞむれば、たゞ正念を勤めて名を稱せしむ。往生の義の疾、と雜散の業には同ならず。この經および諸部の中に、處々にひろく嘆するがときは、すゝめて名を稱せしむるをまさに要益とせんとするなりしるべし。

【字解】 一。雜散之業 浮いて散り亂るゝ心にて修むる行業。こゝには大乘十二部經の首題名字を聞いて得る處の效能をいふ。一心正念の正業に對して雜散之業といふ。

【文科】 「散善義」第二文によりて專修念佛を述べたまふ。

【講義】 又「散善義」に宣給はく、然るに彌陀如來は本願の正意に引きつけて考へて見るに佛願の正意とする所は、唯念佛一行を專修して、稱名せよといふのである。そして極樂往生に就いて、其頓速なることは、かの十二部經の首題名字を聞くやうな利益とは其撰を異にしてゐる。其等は淨土の正行ではなくして、全く雜行である。そして其行を修める心は常に浮動してゐるから、雜散の業と名けられるのである。

夫故に此淨土の三部經はじめ、諸部の大乘經典の中に、處々に廣く讚嘆してあるものは、全く稱名の一行を勤めて、是が一代佛教の粹を集めた至要の利益であることを知ら

しめ給ふものである。

又云從佛告阿難汝好持是語已下、正明付囑彌陀名號流通於退代上來、雖說定散兩門之益、望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名上

【讀方】 又のたまはく、佛告阿難、汝好持是語といふより已下は、まさしく彌陀の名號を付屬して、退代に流通することをおかす。上よりこのかた定散兩門の益を説くといへども、佛の本願に望れば、こゝろ衆生をして一向にもばら彌陀佛の名を稱せしむるにあり。

【文科】 「散善義」第二文によりて念佛付囑を述べたまふ。

【講義】 又同じく「散善義」に宣給はく、「觀經」流通分に、「佛、阿難に告げ給はく、汝好く是語を持て」已下は、正しく一經の至要たる彌陀の名號を阿難尊者に付囑して、遠く末代に流傳し、宣布せしめて、一切衆生を利益せんと欲しめし給ふものである。それであるから、此流通分の念佛付屬から考へて見るに、上來正宗分に於いて、廣く定善十三觀散善三觀といふ二門の利益を御説きになつたけれども、彌陀如來の本願に望めて見ると、

其正意とする所は、正しく一切衆生をして、一向に心を専らにして、彌陀の名號を稱へしめんとするに在るのである。

第三科 『法事讚』の三文

又云極樂無爲涅槃界隨緣雜善恐難生故使下如來選要法一教念彌陀專復專上

又云劫欲盡時五濁盛衆生邪見甚難信專專指授歸西路爲他破壞還如故曠劫已來常如此非是今生始自悟正由不遇好強緣一致使輪迴難得度

又云種種法門皆解脱無過三念佛往西方上盡一形至十念三念五念佛來迎直爲彌陀弘誓重一致使凡夫念即生上

【讚方】又のたまはく、極樂は無爲涅槃界なり。隨緣の雜善おそらくは生じがたし。かるがゆへに如來要法を選びて、なして彌陀を念せしめて、專にしてまた專ならしめたまへり。劫つきなんと欲するとき五濁さかんなり。衆生邪見にしてはなほだ信じがたし。專にして專なれと指授して西路に歸せしむれども、他のために破壊せられてかへりて故のごとし。曠劫より已來つれに此のごとし。これ今生にはじめて自ら悟るにあらず、まさ

しくよき強緣に遇はざるによりて、輪迴して得度し難からしむることを致す。又いはく、種々の法門みな解脱すれども、念佛して西方に往くに過ぎたるはなし。かみ一形をつくし、十念三念五念に至るまでも佛來迎したまふ。たゞちに彌陀の弘誓の重をもて、凡夫をして念すれば、すなはち生ぜしむることを致す。

【文科】『法事讚』の三文を引いて五濁の世相應の念佛一行を勧め給ふ。

【講義】又『法事讚』に宣給はく、彌陀如來の極樂淨土は、無爲自然の國、涅槃常樂の世界である。眞如法性の理に即して、而も嚴淨圓徳の相を示す絶對界である。随つて此證果をうるには夫に相應する因行がなければならぬ。即ち人々が各自の緣に随つて善根を修するといふやうな雜毒の善根では、往生することは出来ないのである。夫故に釋迦如來は、諸善萬行の中より、弘願念佛の要法を選びて、一切衆生に教へ、唯彌陀の名號を信じ稱へて、二心なく復二心なく專修專念せよと御勧め下された。

又宣給はく、此劫波が終りに近づく時、末世の特色なる五つの濁りが盛んになつて世を汚す、一切衆生は邪の見解に惑はされて、智慧の眼眩み、如來の正法を信することが出来なくなつて仕舞うてをる。夫故に專修念佛を勧め、末世に於いては此一法の外はないと、偏に西方の極樂往生を指授して、本願の一道に歸かせても、又解行を異にしてゐる人

々の爲に惑はされ、其信仰を破壊られて故の邪見無信の輩となつて仕舞ふ。この有様は曠劫の昔から常に繰り返してゐる惨しい修道の退墮である。かやうに自ら靈に覺醒するといふことも、今生が始めてはではないのであるが、正しく本願に歸せしむる好き強縁即ち眞の善知識に逢ふことが出来なかつた爲めに、空しく生死の巷に輪廻して、出離の時期がないのである。

又宣給はく、釋尊一代に御説きになつた種々の法門は、皆吾々をして證りを開かしめるものであるが、併しながら彌陀の名號を専ら信じ稱へて、西方極樂淨土へ往生するに若くはない。夫は良に易行易修の教へであり、吾々の根機に相應したものである。即ち生命のある間は、一生涯を盡し、乃至十聲、三聲、五聲の稱名でも、如來は直ちに來り迎へ給ふ。是といふも外ではない。この弘願の念佛が如來の直説、出世の本懐であるからである。即ち彌陀の「若不生者」の誓願力が深重に在す故に吾等凡夫が一念の信を起せば、立ちに即得往生の位に定めしめ給ふのである。

第四科 『般舟讚』の文

又云、一切如來設方便亦同今日、釋迦尊隨機説法、皆蒙益、各得

悟解、入眞門、乃佛教多門、八萬四正爲衆生機、不同欲覓安身常住、先求要行、入眞門。

【讀方】 又のたまはく、一切の如來、方便を設けたまふことまた今日の釋迦尊におなじ。機に隨ひて法を説くにみな益をかうふる。おの／＼悟解をえて眞門にいれ。(乃至)佛教多門にして八萬四なり。まさしく衆生の機の不同なるがためなり。安身常住の處を覓めんと欲はり、まづ要行をもとめて眞門に入れ。

【文科】 『般舟讚』の文によりて眞門に入ることを勸勵し給ふ。

【講義】 又『般舟讚』に宣給はく、一切如來が衆生化益の爲めに、方便を設け給ふことは此度御出世になつた釋迦牟尼世尊と同じである。即ち衆生の區々なる根機に隨つて、夫々の法を説き給ふ故に、その法縁に觸れるものは皆な化益を蒙るのである。

夫であるから今此大聖釋尊の化導に預る衆生は、各自に一代佛教の肝要は何であるかといふことを考へ、こゝに正しい了解を起して、念佛の一道に入るが宜しい。乃至一代佛教の門戸は種々に分れて、八萬四千と云はれてをる。是といふも、正しく衆生の根機が様々に分れてゐる爲めである。故に苟も眞實に身を安んじ、心を常住不變の天地に懸はしむることを覓めるならば、先づ一代佛教の要行たる念佛の一道を求めて、淨土眞

門の教へに入るがよい。

第五科 『往生禮讚』の文

又云爾比日自見聞諸方道俗解行不同專雜有異但使專意作業者十即十生修雜不至心者千中無一

【讀方】又のたまはく、爾このころ自ら諸方の道俗を見聞するに、解行不同にして專雜異あり。ただし意を專にして作しむれば、十はすなはち十ながら生ず。雜を修して至心ならざれば、千が中に一もなし。上巳

【文科】『禮讚』の文によりて、專修至心を勧め給ふ。

【講義】又『往生禮讚』に宣給はく、此日我れ各處に道を修めてゐる出家在家の人々の状態を見聞するに、其信心も行業も、皆夫々相違してゐて、專修の人あれば、雜修の人もある。然るに若しも心を一にして他力念佛を專修するならば、十人は十人ながら極樂に往生することが出来る。然るに自力の計ひに陥り、助正兼ね修めて、專修專念でないならば千人の中一人も眞實報土の往生を遂ぐることは出来ないのである。

第二項 大智律師の釋文

元照律師、彌陀經義疏云如來欲明持名功勝先貶餘善爲少善根所謂布施持戒立寺造像禮誦坐禪懺念苦行一切福業若無正信廻向願求皆爲少善非往生因若依此經執持名號決定往生即知稱名是多善根多福德也昔作此解人尙遲疑近得襄陽石碑經本文理冥符始懷深信彼云善男子善女人聞說阿彌陀佛一心不亂專稱名號以稱名故諸罪消滅即是多功德多善根多福德因緣上巳

【讀方】元照律師の彌陀經義疏にいばく、如來持名の功勝れたることを明さんと欲し、まづ餘善を貶して少善根とす。いはゆる布施、持戒、立寺、造像、坐禪、懺念、苦行、一切福業、もし正信なければ、廻向願求するにみな少善とす。往生の因にあらず。もしこの經によりて名號を執持せば、決定して往生せん。すなはち知んぬ。稱名はこれ多善根多福德なり。むかしこの解をなしし人なを遲疑しき。ちかく襄陽の石碑の經の本を得て文理冥符せり。はじめて深信をいだく。彼にいばく、善男子善女人、阿彌陀佛をとくをきいて、一心にしてみだれず名號を專稱せよ。稱名をもてのゆへに諸罪消滅す。すなはちこれ多功德多善根多福德の因緣なり。上巳

【字解】一。禮誦、禮拜、讀誦。

第六章 第廿願開說『小經』の意

二。懺念 懺は梵語クシヤヤ(Kshama)音譯懺摩の略。悔過と譯す。即ち懺悔の念ひのこと。懺悔は罪障リを滅する徳あり。

【文科】『彌陀經義疏』によりて請行を貶して念佛を勸め給ふ。

【講義】元照律師の『彌陀經義疏』に云く、釋迦如來が、彌陀の名號を執持する功德の勝れたることを顯はさんと御思召して、先づ念佛以外の餘の諸善萬行を貶めて少善根とせられた。諸善萬行とは、所謂修道者の一般形式ともいふべき布施、持戒等の六波羅蜜、又は寺塔を立てること、佛像を造ること、又は淨土の五正行中の禮拜や讀誦や、或は坐禪、懺悔、苦行、及び一切福徳を得る行業等を指すのであるが、然るに若しも念佛を信する正信がないならば、よしや是等の行業をもつて、淨土に廻向し往生を願求しても、皆夫は少善根であつて、正しく淨土往生の正因ではない。然るに若し此『阿彌陀經』の説く所に隨つて彌陀の名號を信じ執持つならば、間違なく往生することが出来る。是によりても稱名が他の一切の諸善萬行に超え勝れて、多善根多福徳であることが知られるのである。私は嘗つて上の如き解釋を施したが、人々は尙ほ疑ひを挾んで信することがなかつた。然るに近ごろ襄陽に建つてある石碑の經文を獲て、之を見るに、其經文の示す所と、私の上

の釋義と能く符節を合はせたやうに一致し、人々も始めて深い信仰を懷くやうになつた。其經文は、宿縁ある善男子、又は善女人ありて、阿彌陀如來を説き奉る教へを信じて、一心に餘へ心を散さず、専ら彌陀の名號を稱へよ。この稱名の功力によりて、一切の煩惱惡業盡くみな消滅する、是は何故であるかと云へば、稱名の中に多善根多福徳の因縁が備つてをるからである。

第三項 智圓法師の釋文

孤山疏云執持名號者執謂執受持謂住持信力故執受在信心力故住持不忘已

【讀方】孤山の疏にはく、執持名號といふは、執ははく執受なり。持ははく住持なり。信力のゆへに執受心にあり、念力のゆへに住持して、わすれず。上已

【字解】一、孤山疏 智圓法師の『彌陀經疏』をいふ。法師は支那錢唐の人。天台宗に出家し、法化を四瀾の孤山に宣揚す。故に本書を孤山疏と稱す。西遼の天喜五年癸酉、壽四十七。西紀一一七二。

【文科】『孤山疏』によりて『小經』の執持名號を釋し給ふ。

【講義】孤山の智圓法師の『彌陀經疏』には「執持名號」といふは、執は心に執受ること、持は心に住持ことである。如來を信する力によりて、心に堅く名號を領納れ、如來を念する力によりて、心に深く名號の謂れを感銘して忘れることのないのを執持名號といふ。

第四節 勸信經文證

第一項 『大無量壽經の文』

大本言、如來、與世難、值難、見諸佛、經道難、得難、聞菩薩、勝法諸波羅蜜、得聞亦難、遇善知識、聞法能行、此亦爲難。若聞此經、信樂受持、難中之難、無過此難。是故我法如是、作如是、說如是、教應當信順、如法修行。上已

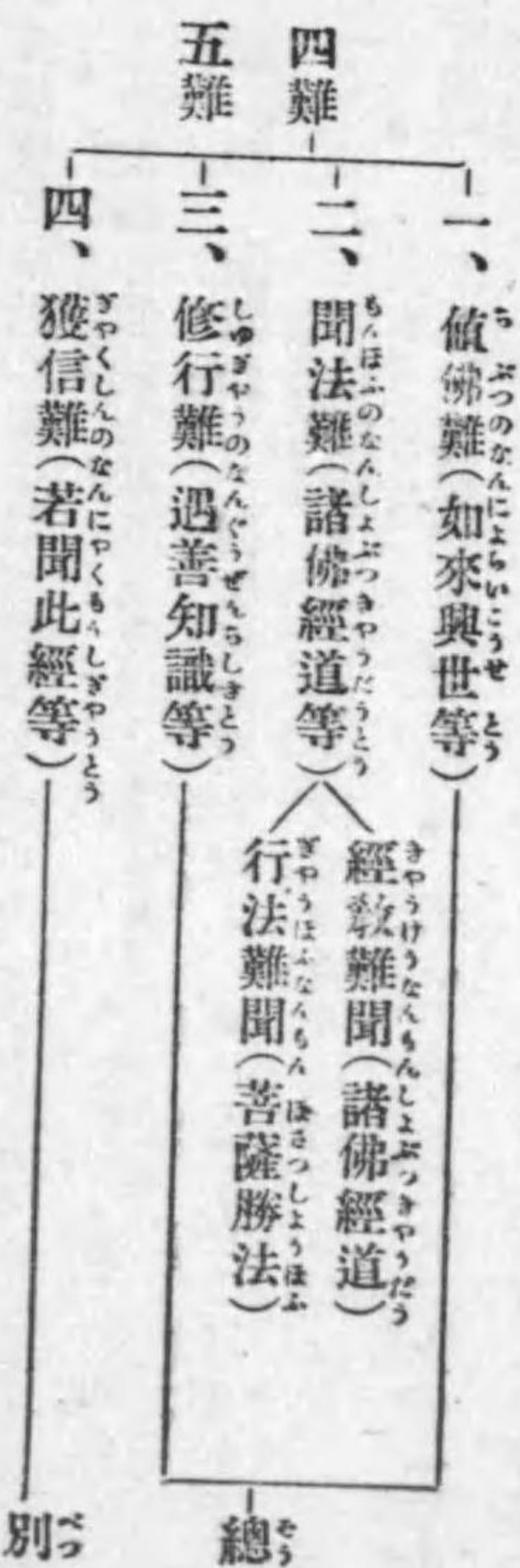
【讀方】大本にのたまはく、如來の與世値ひがたく見たてまつりがたし、諸佛の經道得がたく聞きがたし、菩薩の勝法諸波羅蜜、聞くことを得ることまた難し、善知識にあひ、法をきよく行することまた難とす。もしこの經をきいて、信樂受持すること難が中にかたし、此に過て難きことなし。この故にわが法、是のごとく作し、是のごとく説き、是のごとく教ふ、まさに信順して法のごとく修行すべし。上已

【文科】『大經』下卷の文によりて聞法難を説き信を勸め給ふ。

【講義】『大無量壽經』に曰く、釋迦牟尼如來の與世に逢ひ奉り、親しく其説法の會坐に列ることは容易でない。それは三千年に一度咲く優曇華に逢ふやうなものである。又親しき見佛聞法でなくとも、其一代の間に御説きになつた諸佛の經道を心に會得することも容易でなく、又聞くことも容易なことではない。又大乘菩薩の勝法及び其行する所の六度の行を聞くことも亦難い。そして善知識に逢ひ、其教法を聞いて教への如く能く實修めることも亦容易なことではない。それであるから、今この『大無量壽經』に説く所の教法を聞いて信樂し受持つことは、難きが中にも、これに過ぎたる難いものはない。夫故に我（釋尊）この大經の教法を説かんとする時に、是の如く上卷の初めに、五徳の瑞相を作し、次に是の如く彌陀如來の因願果海を廣説し、更に是の如く下卷には五善五惡をあげて教誨へたことである。汝等皆まさにこの教法の通りに行するがよい。

【餘義】一。此文修道の難を擧げて信心を勸め給ふ。上の『法華經』の勸信は弘願の念佛に轉入することを勸められたものであるが、此は直ちに弘願の信心を勸めて佛智疑惑を滅めん爲めに引用し給ふ。

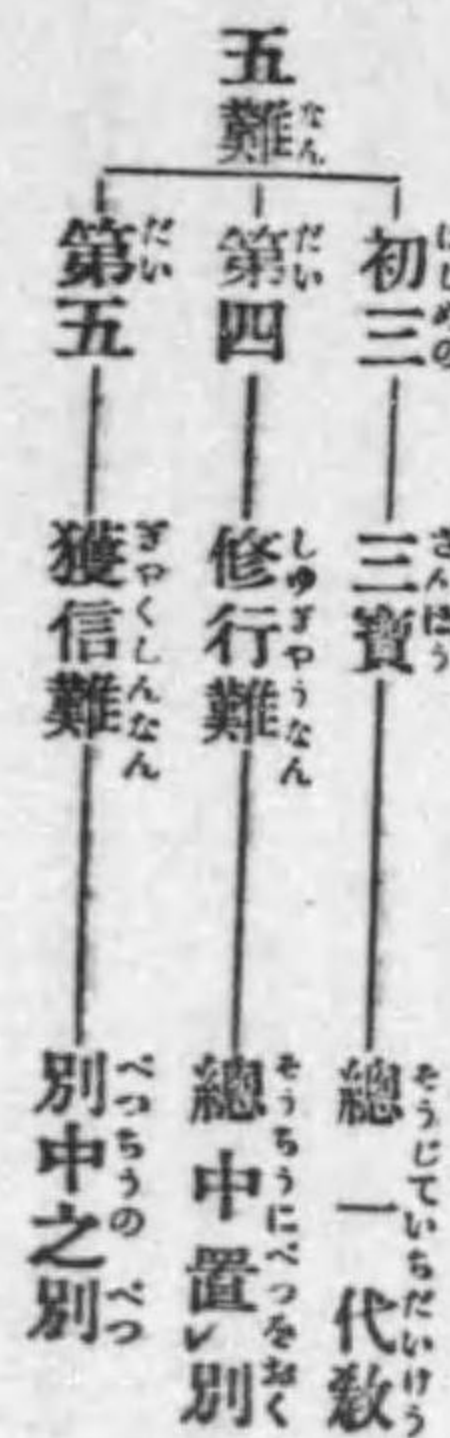
此文を解するに文段に二あり。



即ち第二聞法難を二つに開いて五難となる。五難の中初の三は、順次の如く佛法僧の三實に當る。そして圖の如く初め四難は總じて一代教に行き互るが、第五は別して本經の獲信である。

六要の一

然るに此下の『六要』には圖の如く少しく解釋を異にしてある。



即ち初めの三寶を一代教に通ずる總とし、第四の修行難に就いて、善知識といふは、總じて一代教に通ずれども此大經に於いて善知識といふ上は、別して淨土の善知識でなければならぬ。是れ總中置別といふ所以である。

『淨土和讃』及び本文より見れば上述の總別にて盡きてゐるのであるが、『六要』の釋も亦棄つべきにあらず。此兩説は併せて存して差支はないと思ふ。

二、因に如是作等の三に就いて、義寂師は序の如く如來の神通輪(身)、教誠輪(口)、記心輪(意)の三輪に配當して彌陀の利他に約してあるが、承陽師は如是作を彌陀、如是説、如是教を釋迦に配當してゐる。後説の方が趣きが深い。

第二項 『涅槃經』の文

第一科 迦葉品の文

涅槃經言如三經中說一切梵行因善知識一切梵行因雖無量說善知識則已攝盡如我所說一切惡行邪見爲因一切惡行因雖無量若說邪見則已攝盡或說阿耨多羅三藐三菩提信心爲因

是菩提因雖復無量若說信心則已攝盡

【讀力】涅槃經にのたまはく、經の中に説くがごとし。一切梵行の因は善知識なり。一切梵行の因無量なりといへども、善知識を説けば則ちすでに攝盡しぬ。わが所説のごとし。一切の悪行は邪見なり。一切の悪行の因無量なりといへども、もし邪見をとげば則ちすでに攝盡しぬ。あるひはとく、阿耨多羅三藐三菩提は信心を因とす。これ菩提の因また無量なりといへども、信心を説けば則ちすでに攝盡しぬ。

【字解】一。梵行 梵は清淨の義。清淨なる行ひのこと。修道者が空有二邊の執着を離れ清淨の心を以て、上菩提を求め、下衆生を化益すること。

【文科】『涅槃經』迦葉品の第一文によりて、善知識、信心等を述べ給ふ。

【講義】『涅槃經』迦葉品に言はく、此經の初めにも善知識と信心の徳を讚説してある如く、證りに至る一切淨行の因は善知識である。夫等の淨行の因は實に無量の多きに達してゐる、けれども善知識を擧ぐれば、皆な其中に攝め盡されて仕舞ふ。嘗つて我説く所の如く、證りを障げる一切の悪行の因は邪見である。一切の悪行の因は無量の多きに達してゐるが若しこの邪なる見解一つを擧ぐれば是等の悪行の因は皆この中に攝め盡されて仕舞う。或は又説く。無上證眞道、即ち證りに至る眞實の智慧は信心をもつて因とする。是等證りに至る因は復無量の多きに達してゐるが、その中に信心一つを擧げるならば、則ち夫等

無量の因はこの信心一つに攝め盡されて仕舞うのである。

又言善男子信有二種一者信二者求如是之人雖復有信不能推求是故名爲信不具足信復有二種一從聞生二從思生是人信心從聞而生不從思生是故名爲信不具足復有二種一信有道二信不得者是人信心唯信有道都不信有道之人是故名爲信不具足復有二種一者信正二者信邪言有因果有佛法僧是名信正言無因果三寶性異信諸邪語富闍那等是名信邪是人雖信佛法僧寶不信三寶同一性相雖信因果不信得者是故名爲信不具足是人成就不具足信至乃善男子有四善事獲得惡果何等爲四一者爲勝他故讀誦經典二者爲利養故受持禁戒三者爲他屬故而行布施四者爲於非想非非想處故繫念思惟是四善事得惡果報若人修習如是四事是名沒已還出出已還沒何故名沒樂三有故何故名出以見

明故明者即是聞戒施定何故還出沒增長邪見生憍慢故是我於經中說偈若有衆生樂諸有爲有造作善惡業是人迷失涅槃道是名暫出還復沒行於黑闇生死海雖得解脫雜煩惱是人還受惡果報是名暫出還復沒

如來則有二種涅槃一者有爲二者無爲有爲涅槃無常常樂我淨無爲涅槃有常人深信是二種戒俱有因果是故名爲戒戒不具足是人不可信戒二事所樂多聞亦不具足云何名爲聞不具足如來所說十二部經唯信六部未信六部是故名爲聞不具足雖復受持是六部經不能讀誦爲他解說無所利益是故名爲聞不具足又復受是六部經已爲論議故爲勝他故爲利養故爲諸有故持讀誦說是故名爲聞不具足

【讀方】又のたまはく、善男子、信に二種あり、一には信、二には求なり、是の如きの人、また信ありといへども推求にあたはず。この故になづけて信不具足とす。信にまた二種あり。一には聞より生ず、二には思より生ず。この人の信心、聞よりして生じて思より生ぜず。この故になづけて信不具足とす。また二種あり。一には

道あることを信ず。二には得者を信ず。この人の信心、ただ道あることを信じて、すべて得道の人あることを信ぜず、これを名けて信不具足とす。また二種あり、一には信正、二には信邪なり。因果あり、佛法僧ありといはん。これを信正となづく。因果なし、三寶の性ことなりといひて、もろくの邪語富那那等を信ずることを信邪となづく。この人、佛法僧を信ずといへども、三寶同一の性相を信ぜず。因果を信ずといへども得者を信ぜず。この故になづけて信不具足とす。この人、不具足信を成就す。至乃

善男子、四の善事あり。惡果を獲得せん。何等をか四とする。一には勝他のためのゆへに經典を讀誦せん。二には利養のためのゆへに禁戒を受持せん。三には他屬のためのゆへに而して布施を行ぜん。四には非想非々想處のためのゆへに、繫念思惟せん。この四の善事、惡果報をえん。もし人がこの如きの四事を修習せん。これを没となづく。没しをはりて還りていづ。出でをはりて還りて没す。何が故ぞ没となづく。三有を樂ふがゆへに。何が故ぞ出となづく。明を見るを以てのゆへに。明はすなはちこれ戒施定を聞くなり。何を以ての故にかかへりて出沒するや。邪見を増長し憍慢を生ずるがゆへに。この故にわれ經の中において偈を説かき、もし衆生ありて諸有を樂ふて、有のために善惡の業を造作する。この人は涅槃道を迷失するなり。これを暫出還復沒となづく。黑闇生死海を行じて、解脫をうといへども、煩惱を離するは、この人がへりて惡果報をうく。これを暫出還復沒となづく。

如來にすなはち二種の涅槃あり。一には有爲、二には無爲なり。有爲涅槃は無常なり。常樂我淨は無爲涅槃なり。常人ありて、ふかくこの二種の戒ともに因果ありと信ぜん。このゆへになづけて戒とす。戒不具足とは、こ

の人は信戒の二事を具せず。所樂多聞もまた具足せず。いかなるを名けて聞不具足とする。如來の所説は十二部經なり。たゞ六部を信じていまだ六部を信せず、この故になづけて聞不具足とす。またこの六部の經を受持すといへども、讀誦して他のために解説する能はずして利益するところなけん。この故になづけて聞不具足とす。またこの六部の經をうけなはりて、論議のためのゆへに、勝他のためのゆへに、利養のためのゆへに、諸有のためのゆへに、持誦讀説せん。この故になづけて聞不具足とす。略抄

【字解】一。非想非非想處 無色界の第四天。無所有處定を厭ひてこの天に生ず。この地は前の有想。無想を離れたる故に非想非非想處の名あり。これ三界中、最上位にあるので有頂天とも云はる。

二。諸有 諸の有。有とは現實世界の事。そして其現實世界の内容は名利であるから、こゝではあらゆる名利といふ。

三。十二部經 上五五頁を看よ。

【文科】 迦葉品の第二文によりて信不具足を説いて信心を解説し給ふ。

【講義】 又『涅槃經』に言はく、善男子よ、信心に二種ある。一は仰いで信すること、二は推求すること。即ち信心より生ずる所の智慧である。こゝに一人ありて唯仰いで信するとも、能くその心の心を呑み込んで、如來の大慈悲の奥底を窮めることが出来ないのは信不具足と名ける。是の人は絶對他力の信を獲た人ではなくして、自力の因果、罪福を信

する不了佛智の人である。

又信心に二種ありて、一は本願の謂れを聽聞することから起り、二は能く其本願の謂れを確乎と會得することから生れる。こゝに一人ありて唯大様に聞いてよく其本願の謂れを審かに思考へない。是も眞實の信心とは云はれない。信不具足である。

又信心に二種あり、一は此『涅槃經』の説を聞いて、大般涅槃の一道があるといふことを信する。二は其涅槃を體得した人があるといふことを信する。然るに一人ありて、唯涅槃の一道あることは信するけれども、その涅槃を體得した人があることを信じない。押しつめて云へば、自分も其涅槃を得ることが出来ると信じ得ないのである。是を信不具足と名ける。

復信心に二種あり、一は佛教の正しい信心、二は外道の教へる邪の信心である。即ち一切諸法は因果の道理に順つてあるものであると云ふことと、並に世に眞實の佛法僧の三寶あることを信するを信正と名ける。是に反して正しい因果の道理を無視し、そして佛法僧の三寶は、其性を一にしてはをらない、夫等は根柢に於いて一體ではなくして、全く孤立してあるものであると信じ、更に多くの道理を外れた邪の言説を信するのを信邪と名ける。

彼の因果を撥無した富闍那外道等の六師の如きは是である。更に一類の人あり、佛法僧の三寶を信するけれども、此三寶の性相は全く一つであるとは信じない。即ち眞の意味に於いて三寶は同一なのである。佛も其教法も、それを修する僧も全く其根柢を一にしてゐるものである。この三寶同一性を信することが出来ず、又因果の道理を信じて、その道理を眞に身に引き當て味うてゐる人を信じないならば、其人は亦信不具足の人と名ける。即ち此人は完全なる信仰ではなく不完全なる信を獲てゐるのである。至乃

惡の四善

善男子よ、是等の四善事を修むれば、却つて惡果を獲るであらう。其四善とは何であるか、一は他人に勝れたる名聞を得たいと思ふて經典を讀誦すること。二は我身の利益といふことを目的として禁戒を受持つこと。三は他人に屬してゐる物をもつて布施を行すること。四は外道の人達が最後の理想處としてゐる人天の善果である所の非想非々想處に生れたいと思つて念を其處へ凝して思惟へること。是等の四善事は事柄が善であつても、其を行ふ動機が自分の利益といふ穢い考へが主となつてゐる爲めに、惡果報を獲るのである。夫故に若し人ありて上の如き四事を修習するなら

ば、其人は先づ惡道に沈没み、次に惡道より浮び出で、浮び出でも還惡道に没するのである。

何故に没するのであるか、夫れは三惡道を樂うてをるから。何故に三惡道を出づるのであるか、夫は明(智慧)を得るからである。明といふは布施、持戒、禪定の意義を聞いて、心に智慧を得るをいふ。何故にこの明によりて惡道を出でながら復再び惡道に沈没するのであるか、夫は折角惡道を出で、も、人天の善果に執着して、邪見を増長し、憍慢の心を起すからである。凡夫は常にこの名利の爲めに墮落する。是故に我は經典の中に左の偈文を説いた。

あらゆる名利を樂む衆生は、
名利の爲めに善惡の業を造る。
この人は涅槃を迷失ひ、
暫時惡道をいで、復沈む人と名けらる。

黑闇生死海を渡りて

一度は苦を解脱しても
煩惱は復この人を三途に牽かむ。
之を暫し浮びて復沈む人と名くる。

如來には二種の涅槃がある。一は有爲涅槃、二は無爲涅槃である。有爲涅槃とは眞實の歸依處でなく無常にして究竟安穩の證ではない。夫は一時的な涅槃である。然るに無爲涅槃とは、常住にして變易なく眞實の法樂、眞實の大我、眞實の清淨に満てるものである。眞の涅槃は決して空寂なるものではなくして、斯の如く積極的なる常樂我淨の徳を具へたものである。

若し常人ありて、五戒十善等の善戒も、外道の教ゆる所の牛戒、狗戒等の惡戒も、共に善果を生ずるものと信するならば、その人は戒不具足と名けられるのである。是人は亦無上菩提心たる信心も善根を修する所の戒も、二事ながら具へてをらない。そして教法を聞知することを樂ひとする所謂所樂多聞をも具足てをらない。

抑も聞不具足とは云何なるものであるか。如來の教説の全體は十二部經である。この十二部經全體に行き互つてある教へを信することが聞具足であらねばならぬ。然るに其中の

六部を信じて他の六部を信じない。即ち教への半ばを失うてをるのであるから是を聞不具足と爲す。更に上に信じないと云つた其六部を受もちても、即ち十二部經全體を受持つても、それを讀誦して他人の爲めに解説することが出來ず、利益を施すことが出來なければ、其は亦聞不具足と云はねばならぬ。亦この六部經を受もち即ち十二部經全體を受持つても、徒なる論議の爲めや、他に勝れたいといふ名聞の爲め、利養の爲め、又は其他の様々の世俗的の事柄の爲めにこの經説を利用し、其を讀みそれを解説するならば、夫は亦聞不具足と名けられる。

第二科 徳王品の文

又言善男子第一眞實善知識者所謂菩薩諸佛世尊何以故常以三種善調御故何等爲三一者畢竟轉語二者畢竟訶責三者轉語訶責以是義故菩薩諸佛即是眞實善知識也復次善男子佛及菩薩爲大醫故名善知識何以故知病知藥應病授藥故譬如良醫善八種術先觀病相有三種何等爲三謂風熱水風病之人授之酥油熱病之人授之石蜜水病之人授之薑湯以知病

根一授_レ藥得_レ差故名良醫、佛及菩薩亦復如是、知_三諸凡夫病有三種、一者貪欲、二者瞋恚、三者愚癡、貪欲病者、教觀_二骨相、瞋恚病者、觀_二慈悲相、愚癡病者、觀_二十二因緣相、以是義、故諸佛菩薩名善知識、善男子、譬如船師、善度人、故名大船師、諸佛菩薩亦復如是、度_二諸衆生生死、大海、以是義、故名善知識、出抄

【讀方】またのたまはく、善男子、第一眞實の善知識は、いはゆる菩薩、諸佛世尊なり。なにを以ての故に、つれに三種をもて善く調御するが故なり。何等をか三とする。一には畢竟、二には畢竟、三には畢竟、阿貴なり。この義をもての故に菩薩諸佛はすなはちこれ眞實の善知識なり。また次に善男子、佛および菩薩を大醫とするがゆへに善知識となづく。何を以ての故に、病を知り藥を知りて、病に應じて藥をさぐるがゆへに。たとへば良醫のごとし。八種の術をよくせり。まづ病相を觀す。相に三種あり。何等をか三とする。いはく愚熱水なり。風病の人にはこれに蘇油をさづく。熱病の人にはこれに石蜜をさづく。水病の人にはこれに薑湯をさづく。病根を知るを以て藥を授くるに差ることなう、かるがゆへに良醫となづく。佛および菩薩もまた、是の如し。もろくの凡夫の病をしろに三種あり。一には貪欲、二には瞋恚、三には愚癡なり。貪欲の病には、おしへて骨相を觀せしむ。瞋恚の病には、慈悲の相を觀せしむ。愚癡の病には、十二緣相を觀せしむ。この義をもての故に諸佛菩薩を善知識となづく。善男子、たとへば船師のよく人を度するがゆへに大船師と名くるがごとし。諸

佛菩薩もまた、是の如し。もろくの衆生をして生死の大海を度す。この義をもての故に善知識となづく。出抄

【字解】一。十二緣相 十二因緣の理をいふ。これは三界の迷の因果を詳説して衆生輪廻のさまを示したものであるから愚疑の者の爲めの藥となるのである。

【文科】「涅槃經」徳王品の文によりて善知識の徳を述べ給ふ。

【講義】又「涅槃經」に言はく、善知識にも種々あるが、其中第一眞實の善知識といふは、大乘の菩薩と諸佛世尊を云ふ。何故かと云へば、是等の佛菩薩は三種の方法をもつて善く衆生の心を調御へて下さるからである。三種といふは、一は行き届いた軟な語を御使ひになる。是は攝受門である。二は缺目のない呵責である。是は折伏門である。三は軟語と呵責を時に應じて兼ね用ゐ給ふことである。この譯合をもつて菩薩諸佛は良に眞實の善知識にてゐらせられるのである。

復次に善男子よ、佛及び菩薩は精神上の大醫であるから善知識と名ける。何故かと云へば病其物を知り、藥の性質を熟知し、さて病に相應する所の治療藥を授けるからである。是を良醫に譬ふるに、良醫は八種の醫術に熟達してゐる。其中先づ病氣の相状を見るに、大凡三種ある。其三といふは風、熱、水である。乾燥する病氣の人には蘇油を授け、熱病

の人には石蜜を授け、冷える病氣の人には薑湯を授ける。かやうに病根を知つてゐる爲めに夫に相應した薬を授ければ、直ちに癒るのである。故に良醫と名けられる。

今佛菩薩も亦是通りである。あらゆる凡夫の病に貪欲、瞋恚、愚癡の三種の病氣あるを知り、貪欲の病人には、骨相觀を教へ、瞋恚の病人には慈悲觀を教へ、愚癡の病人には、十二因縁の道理を觀することを教へるのである。蓋しあらゆる貪欲の中で、尤も修道を妨げるのは、色欲であるから、其美しい皮の下には醜い骨や血濃等が満ちてゐることを觀じて、其欲念を拂ひ、又瞋恚を拂ふには、他人に對しても我子を愛する如き慈悲心を起せば、自と其瞋恚は消えて仕舞ふ。愚癡を拂ふには、吾等凡夫が如何にして今日まで流轉し來つたかといふことを知らしむる緣理を教へることが近道である。かやうに凡夫の病氣相應に藥を盛るのであるから、諸佛菩薩を善知識と名けるのである。

善男子よ、譬へば船師が能く人を乗せて河海を渡して呉れるから、大船師と名けられるやうに、諸佛菩薩も亦この船師のやうに、衆生を乗せて能く生死の大海を渡して涅槃常樂の彼岸に到らしめる故に、善知識と名けるのである。

第二項 『華嚴經』の文

第一科 善知識の文

華嚴經言 汝念善知識 生我如父母 養我如乳母 增長菩提分 如三
 醫療衆疾 一如三天 灑甘露 一如三日 示正道 一如三月 轉淨輪

【讀方】 華嚴經にのたまはく、なんち善知識を念ぜよ。我を生ずること父母のごとし。我を養ふこと乳母のごとし。菩提分を増長す。醫の衆疾を療するのごとし。天の甘露をそいぐのごとし。日の正道を示すがごとし。

月の淨輪を轉するのごとし。

【字解】 菩提分 菩提は梵音ボドヒ (Bodhi)、智、道、覺等と譯す。佛の智慧をいふ。分の字を添えたのは、菩提に關はりあひのある凡てといふ意味を表はさん爲めである。

【文科】 唐譯『華嚴經』卷七十七によりて善知識の徳を讚え給ふ。

【講義】 『華嚴經』に言はく、汝、善知識を念せよ。善知識によりて眞の自分が生れるのである。善知識こそ眞の我父母にて在す。又我菩提を求める心を長養ひ育て給ふことは、恰も乳母のやうである。夫は亦衆の疾を治療するが如く、我心の煩惱の疾を癒し、天の甘

露を灑ぐが如く、我渴いたる心を豊に濕うし、白日の正しい道を示すやうに、正しき教法を指し示し、月の淨輪をみ空に轉じて、清涼の光りを放ぐるやうに、善知識は實に我心を清からしむ。

第二科 如來大恩の文

又言、如來大慈悲出、現於世間、普爲諸衆生、轉無上法輪、如來無數劫勤苦、爲衆生云何諸世間能報大師恩、上

【讀方】 又いはく、如來大慈悲、世間に出現して、あまれくもろくの衆生のために、無上法輪を轉じたまふ。如來、無數劫に勤苦せしことは衆生のためなり。云何がもろくの世間よく大師の恩を報ぜん。上

【文科】 唐譯『華嚴經』卷六十の文によりて、如來の大恩を述べ給ふ。

【講義】 又言く、大慈悲の如來は此世に出興になりて、普く一切衆生の爲めに、眞に歸依すべき道なる無上教法を宣傳へ下された。如來が無數劫の長い間、道を修めて勤苦み給ひしは、全く衆生の爲めである。世の諸の衆生はどうして此如來大師の恩徳に報奉ることが出來やうぞ。

第五節 勸信釋文證

第一項 『般舟讚』の文

光明寺和尚云、唯恨衆生疑、不疑淨土對面、不相忤、莫論彌陀、攝不攝、意在專心、廻不廻、或道從今、至佛果、長劫讚佛、報慈恩、不蒙彌陀、弘誓力、何時、却出娑婆、何期今日、至寶國、實是娑婆本師、力若非本師、知識、勸彌陀淨土云、何入得淨土、報慈恩。

【讀方】 光明寺の和尚のたまはく、たゞ恨むらば衆生の疑ふまじきを疑ふことを。淨土對面してあひ忤す。彌陀の攝と不攝とを論することなれば、こゝろ專心にして廻すと廻せざることあり。あるひはいはく、けふより佛果にいたるまで、長劫に佛をほめて、慈恩を報ぜん。彌陀の弘誓の力を蒙らずば、何れの時いづれの劫にか娑婆をいでん。いかんしてか今日寶國に至ることを期せん。まことにこれ娑婆本師の力なり。もし本師知識のすゝめにあらずば、彌陀の淨土いかに入らん。淨土に生ずることをえて慈恩を報ぜよ。

【文科】 『般舟讚』の文によりて、信を勧めたまふ。

【講義】 光明寺の和尚、善導大師の云く、唯嘆はしいことは、衆生が折角この無上の法門に逢ひながら、疑うてはならぬことを、疑ふことである。吾等の求めてやまぬ究竟安穩

の極樂世界は、吾等の目前にありて、吾等の願ひに忤ふことはない。唯本願を信する一つで往生することが出来るのである。阿彌陀如來が助けて下さるか、下されぬかといふことをいつてある場合でない。唯吾々の意に一念の信心があつて、淨土へ參りたいといふ廻願心を起すかどうかといふことである。

或淨土の行人はいふ。今日只今より臨終の夕佛果を開かして頂くまで、其間佛徳を讃嘆して、大慈大悲の佛恩を報し奉らうと思ふ。彌陀如來の本願力を受けなれば、何萬劫かゝつた所が、どうしてこの流轉の巷たる娑婆世界を出離することが出来やうぞ。

今日彌陀の寶國へ生れさせて頂くとは、どうして思はふぞ。斯く往生の仕合せを獲ることは、皆是れ本師釋迦牟尼如來の御力である。若し本師釋迦如來の御勸めがなかつたらば、どうして此彌陀如來の淨土へ往生することが出来やうぞ。夫であるから教への如く信じて淨土に往生し、大慈の恩徳に報あるがよろしい。

第二項 『往生禮讚』の文

又云佛世甚難值人有信慧難遇聞希有法此復最爲難自信教

人信難中轉更難大悲弘普化眞成報佛恩

【讀方】 またいはく、佛世はなほた値ひがたし。人、信慧あること難し。たまく稀有の法を聞くこと、これまた最も難しとす。自ら信じて人を教へて信せしむること難か申にうた、更にかたし。大悲ひろく普く化するはまことに佛恩を報するになる。

【文科】 『禮讚』の文によりて自信教人信を勧め給ふ。

【講義】 又『往生禮讚』に言ふやう。佛の御出世の時に生れ逢ふことは非常に難事である。一體、人と生れて信心の智慧を有つことは容易なことではない。夫であるから、別して世に希有な弘願念佛の法を聞くといふことは甚六ヶ敷いことである。自らこの他力念佛の法を信じて、是を人にも信じさせるといふことは難中の難事である。かやうに彌陀大悲の誓願を廣く人々に傳へて信せしむることは、眞に報佛恩の大行である。

又云歸去來他鄉不可停從佛歸本家還本國一切行願自然成
悲喜交流深自度不因釋迦佛開悟彌陀名願何時聞荷佛慈恩
實難報

【讀方】 又いはく、歸去來、他郷には停るべからず。佛にしたがひて本家に歸せよ。本國にかへりぬれば一切の行願自然に成す。悲喜まじはりなかる。深く自らはかるに、釋迦佛の開悟によらずば、彌陀の名願いづれの時にか聞かん。佛の慈恩を荷ひても、まことに報じがたし。

【字解】 一。本家。迷の娑婆を他郷といふに對して、悟りの極樂淨土を本家といふ。吾等の歸著すべき永遠の故郷といふ意味である。

二。名願。名號成就の本願をいふ。第十七、第十八の不離一體たる彌陀佛の深重なる誓願をあらはして名願といふ。

【文科】 『法事讚』の文によりて厭離欣淨を勤め善知識の徳を嘆じ給ふ。

【講義】 又『法事讚』に言く、いざ諸共に手を取つて行かうではないか。この世は全く他郷である。吾等の永遠に住むべき場所でない。如來に従うて淨土の本家に歸らうではないか。一度淨土の本國に還るならば、一切の修せねばならぬ行も、起さねばならぬ願も、自然に一身に具はるのである。是ほど喜ばしいことがあらうか。慶喜の涙はとめどなう流れて頬を濕すことである。かやうな至幸の身の上になつたことを深く自ら考へて見るに、是れ全く大聖釋迦牟尼如來の御力の然らしむる所である。若し釋迦牟尼世尊が迷ひに沈む心を開發して下さらなかつたならば、何れの時に彌陀如來の本願名號を聞信することが出

來やうか。かやうに廣大なる彌陀釋迦二尊の慈恩を、どうして報い奉ることが出來やうぞ。

第四項 『法事讚』後序の文

又云十方六道同此輪廻無際循循沈愛波而沈苦海佛道人身難得今已得淨土難聞今已聞信心難發今已發上

【讀方】 又いはく、十方六道おなじくこれ輪廻してきはなし。循々として愛波に沈んで、しかく苦海にしづむ。佛道の人身えがたくして、今すでに得たり。淨土き難くして、今すでに開けり。信心おこしく難くして、今すでににおこせり。上。已。

【文科】 『法事讚』後序の文によりて聞法難を擧げて、勸信し給ふ。

【講義】 又同じく『法事讚』に曰はく、十方の衆生は、等しく車の廻るやうに、六道生死の巷に輪廻して、打ち止めがない。廻々りて愛欲の波に漂はされ、苦惱の海に沈淪む。良に佛の御法を聞く身になるといふは、至難のことである。然るに幸にして今はもう其得難い身となつてゐる。其教への中にも淨土眞實の要法を聞くと云ふことは、困難中の困難であるが、夫も今はもう聞くことが出來た。更に此教を聞いて信心を起すことは六ヶ敷い

ことであるが、それも今はもう起すことが出来た。

第六節 私釋

【大意】 上來第十九、第廿願の開説了り、こゝに私釋を施して自督を述べ給ふ。第十九、廿の願といふも、畢竟凡夫の機相を徹見し給ふ如來の大慈方便の外はない。そして其は近く自身の信念に於いて實驗せらるゝ所である。即ち第一項機情の失、第二項は悲嘆自督、第三項は自力の誠諦である。

第一項 機情の失

眞知專修而雜心者不獲大慶喜心故宗師云無念報彼佛恩雖
作業行心生輕慢常與名利相應故人我自覆不親近同行善知
識故樂近雜緣自障障他往生正行故

【讀方】 眞に知んぬ。專修にしてしかも雜心なるものは大慶喜心をえず。かるがゆへに宗師は、かの佛恩を念報することなし。業行をなすといへども心に輕慢を生ず。つれに名利と相應するがゆへに、人我がづからおほうて同行善知識に親近せざるがゆへに、このんで雜縁にちがづきて、往生の正行を自障々他するがゆへにといへり。

【文科】 自障々他する機情の失を述べ給ふ。

【講義】 以上の引文によりて第廿願の機類を知ることが出来る。第廿願の機は、法は他力にして機は自力であるが、かやうに諸行の中から念佛一行を專修しても、夫を修める機が自力の定散心であるから、佛凡一體の往生一定の大慶喜心を得ることが出来ない。夫故に善導大師は、『往生禮讚』に、半自力半他力の機類は、眞に如來の恩徳に報い奉るの念ひがない。従つて身口意の三業に報恩の行をなしても、心に輕慢の思ひが起り、常に名聞利養の欲念に穢され、「をれが」といふ我慢我執に眞實心を覆はれて、眞の道に進む友達と師に親み近かず、却つて正道を擾す雑多な惡縁を樂むやうになる。かやうに往生の正行たる本願念佛の一道を自ら障へ、他をも退墮せしむるものである。是といふも其本を釋ぬれば、機に雜心の失あるが致す所である。

第二項 悲嘆自督

悲哉垢障凡愚自從無際已來助正間雜定散心雜故出離無其
期自度流轉輪廻超過微塵劫巨歸佛願力巨入大信海良可傷

嗟一深可一悲嘆一

【讀方】かなしきかな垢障の凡愚、無際よりこのかた助正間雜し、定散心雜するがゆへに出離その期なし。みづから流轉輪廻をはかるに、微塵劫を超過すとも佛願力に歸しがたく、大信海に入りがたし。まことに傷嗟すべし。ふかく悲嘆すべし。

【字解】一。微塵劫 具には大地微塵劫、大地を微塵(兎毛塵羊毛塵のやうな小さなもの)に打ち砕いた程の數多い劫波。數知れぬ長い時間。

【講義】是を思ふにつけても、吾等煩惱の垢障に覆はれたる愚鈍の凡夫は、無始久遠の古から、助業を捨て、正行に歸するといふ簡別の心なく、唯此二つを修める心が雜然として存するとともに、定善散善の自力心は、常に心内に雜はりて、純一無雜の信念に住することが出来ない。是は良に悲しむべきことである。夫故に何時になつても、この生死輪廻の巷を出づる時期がなかつたことである。熟、生死流轉の我身を考へて見るに、此離れ難い自力疑心の爲めに、微塵劫の長い一の時を過しても、眞實の他力本願に歸し難く、洋洋として海の如き自力の計ひを離れたる大信心海に歸入し難い。是は良に傷嗟むべきこと深く悲嘆むべきことである。

第三項 自力戒誨

凡大小聖人一切善人以三本願嘉號爲己善根不能生信不了佛智不能了知建立彼因故無入報土也

【讀方】おほよそ大小聖人、一切善人、本願の嘉號をもておのれが善根とするが故に、信を生ずることあたはず。佛智をさとらず。かの因を建立することを了知すること能はざるがゆへに、報土に入ることなきなり。

【字解】一。嘉號 彌陀の名號のこと。この名號は萬徳を圓備せるものであるから嘉號といふ。

【文科】眞門自力の分齊を示し給ふ。

【講義】他力の大信心海に入り難いことはかやうである。是といふも、外のことではない。あらゆる大乘小乗の聖人の方々も、又あらゆる善人も、如來の名號を自分のもの、自分の善根であると、この自分といふものに力を入る爲めに、即ち自力の根切れがしてをらぬ爲めに、眞實の信心を起すことが出来ず、不思議の佛智を解了して、是と一致になるといふ境地に至ることが出来ないのである。即ち『如來會』の願文に所謂彌陀如來が名號を建立せられた御意を了知することが出来ない爲めに、眞實報土に入り得ないのである。即ち

名號建立の正意は、自力の心をもつて信じさせる御思召ではなくして、全く自力の計ひ全體を投げ捨て、他力廻向の名號一つになれといふのである。

第七章 方便開示と入眞勸發

【大意】 上に第十九、第二十願の開説了り、こゝに水濁れて石の出づる如く、方便二願の眞意を開示して、眞實の第十八願との交際を明かにし、之を御自督の上から信念歷程の表白として具體的に披瀝せられた。即ち第一節は有名なる三願轉入、第二節は仰信の表白である。

第一節 三願轉入の自督

是以愚禿釋、鸞仰論主、解義依宗師、勸化久出、萬行諸善之假門、永離雙樹林下之往生、廻入善本德本眞門、偏發難思往生之心、然今特出方便眞門、轉入選擇願海、速離難思往生、心欲遂難思議往生、果遂之誓良有由哉

【讀方】 こゝをもつて愚禿釋の鸞、論主の解義をあふぎ、宗師の勸化によりて、ひさしく萬行諸善の假門をいで、なかく雙樹林下の往生をばなる。善本德本の眞門に廻入して、ひとへに難思往生の心をおこしき。然るに今、ことに方便の眞門をいで、選擇の願海に轉入せり。速に難思往生の心をはなれて、難思議往生を遂んとおもふ。果遂の誓ひまことに由あるかな。

【文科】三願轉入をあげて信念の歷程を示し給ふ一段である。

【講義】夫であるから、我愚禿釋親鸞は、天親論主の『淨土論』の明快つた解義を仰ぎ又善導大師の燃ゆるが如き勸化に依りて、自力の諸善萬行をこととする要門の第十九願を出で、かくて其結果たる雙樹林下の往生を永く見捨てるに至つた。かくして善本徳本の名號を己れの善根とする眞門の第廿願に入りて、難思往生の半自力半他力の心を發した。併しかやうに第十九願より第廿願に轉入した私は、今や特に大悲の矜哀によりて、此方便假門たる第廿願の眞門を出で、選擇本願たる第十八願に轉入するに至つた。是れ實に難思往生の心を離れて、難思議往生の眞證を遂げんと欲ふたからである。此第十八願を信ずる心は外ではない。あらゆる自力の計ひをすて、全く不可思議の如來他力の御心に溶け込んで佛凡一體の妙境に入ることである。

良に第廿願は果遂の誓と稱し、苟もこの願を信するならば、遂には第十八願の眞實に入らずには置かぬと云はれてあるが、良に此果遂の御誓ひのあるのは、深い由のあることである。

【餘義】一、此下三願轉入論は、上の歴念の果遂を詳述するに外ならぬ。古來東西派の

學者各見解を異にして自説を唱へてをる。其中一二の説を擧ぐれば、

西派の道隱師は『略讀』に、此下宗祖の自督を述べ給ふに就き、「久しく萬行諸善の假門を出づる」等とは、出家得度の後諸善萬行を修められたが、既にして宿善開發して、念佛を萬行中の最勝往生の勝行となし、即ち諸行を捨て、眞門に歸することを云ひ、更に「方便の眞門を出で、」等とは、二十九歳の時黒谷聖人の化導によりて選擇本願に歸入せられしことをいふ。是を『御傳鈔』に「立に他力攝生の旨趣を受得し」云々と宣給ふ所であると。此説によれば、黒谷入室の時に眞信獲得と立て、其以前に三願轉入ありしといふのである。

更に東派の皆往院師は、黒谷入室の獲信と決定するを嫌うて云はく、『御傳鈔』の説は、師資面授の本意を示したもので、必ずしも此説の如く此時をもつて實の如く獲信せられたとは決斷する譯にゆかぬ。元より獲信せられぬとも斷する譯にゆかぬが、要するに此三願轉入の文より見れば、初めから眞信決定でなかつたことは明かである。さりながら五十二歳の御本書御製作の時でもあるまい。吉水當時に信心諍論や信行兩座等によつて見ても、既に弘願の信心を獲られてをつたことは知られるからである。されば正しく年代を決する

譯には行かぬが、この三願轉入の信仰的歷程は、元祖門下にありし時のことであらう云々。
此説によれば、三願轉入を吉水入室以後の或期間として、強ちに年時の長短を問題にせ
ないのである。

更に東派の慧空師は、『視聽記』に於いて、聖人は『御傳』の示す如く絶對不二の頓機に
おらせられる故に、強ちに時間的に三願轉入の事實なし、『化卷』の三願轉入は、方便の三願
に滞る人をして眞實の本願に入らしめんが爲めに、信念歷程の義意を顯はせしまでにて、
年時の次第を述べ給ひしにあらず、唯果遂の玄旨を顯はせしものに外ならず。即ち義の前
後次第を示し給ふものである。但し元より漸機あることを否定するのではない。且く漸機
に同じて果遂の旨趣を示し給ふものである云々。

此説は『御傳鈔』の説と、『化卷』後序の「建仁辛酉曆 棄二雜行一兮歸三本願」を根據と
して聖人の入信を三願轉入でないと斷じたものである。

二、以上三説中、第一説は、巧みに三願轉入の文と吉水入室の文とを會通し過ぎて却つ
て平面的の説明に陥り、信念の幽旨を失ひたるの趣きがある。然るに之に反して第二説が
三願轉入を吉水入室以後と見て、『御傳鈔』や『化卷』後序の吉水入室の文を、文字通りに解せ

ずして、深い信仰上の奥旨を握まんとした努力は嘆稱すべきものである。が尙ほ不徹底の
憾がある。更に第三説が、三願轉入をもつて、年時の次第にあらずとし、唯果遂の玄旨を
顯はすにありとせるは、是とすべきも直ちに聖人に頓機として、三願轉入なしとするは、
餘りに獨斷説に陥つたと云はねばならぬ。三願轉入は、決して單に果遂の玄旨を明すとい
ふ位の軽いものにあらずして、聖人の眞摯なる信仰經驗の告白である。此文は法門を述
べたる教説にあらずして、血肉をもつて描かれたる信念の内容である。簡單に會通し去ら
るべきものではない。

三、之に關する吾等の見解を述べれば、從來三願轉入論の基點は、『化卷』後序の吉水入室
の文と、之を繼承する前出の『御傳鈔』の文に對するこの三願歴念の文の會通である。即ち
問題の中心は、吉水入室の際三願轉入して弘願の信心を決定せられしや否やといふ點であ
る。若し『御傳鈔』の報する如く其時をもつて眞信決定とすれば、三願轉入は道隱師の如く
入室以前より始まらねばならず、或は慧空師の如く三願轉入を宗祖の上に否定せねばなら
ぬこととなる。然るに若し『御傳鈔』の文字に拘泥せず。そして此三願轉入の文を主とす
れば、勢ひ皆往院師の説たらざるを得ない。何れにしても上の三説に一貫せる思想は、三

三願轉入の眞意義

願轉入を時間的に見ることである。即ち弘願に入るまで第十九、第二十を年代的に迂回するものとす。見解にして、云はゞ客觀的に定型的に見んとするのである。之が爲めに上の如き不徹底の會通となるのである。

之に就いて第一に意義を明瞭にする必要あることは、三願轉入の意義である。之は文字の上より見れば、第十九、第二十、第十八と時間的に轉々迂回するやうに思はれることであるが、事實は之に反して、之を體驗する人に取りては、弘願に入りし自覺の一念の開展である。そして更に進んで云へばこの弘願の自覺は、第十九、第二十にありし自己を反省するの謂ひである。第十九願の分齊たる自力の諸善を修むる時に、其自力の無功なるを感じて、自分は如來の方便の善たる第十九願にあると自覺する一念の立に第十八願の機となるのである。第二十願にあつても此通りである。但しかやうに客觀的に云へば、容易く第十九、第二十を識別しうるけれども、自ら實修するに當つては、第十九願にある時も、自分としては第十八の弘願にあると思つてゐるのである。然るに如來の招喚によりて眞智内に萌して自己の空虚を感じ、自力に執して他力自然に叶はざることを感じ痛感する時に、忽然として第十八願に轉入するのである。是は第二十願にありても同様である。この轉入眞

信の一念に、宛然として第十九、第二十の分齊にありしことが心に浮ぶのである。この一念の眞自覺に立ちて回光返照する時に、此下に表現せられし如き三願轉入となるのである。

此見解に立ちて上來の問題を解決すれば、宗祖の獲眞信は『化卷』後序の文の示す如く吉水入室にありしなるべく、そして其時この三願轉入は完成せられたのである。この方面を見たのが道隱師の説である。但し此時聖人の自意識に於いて、此下に發表せられし如き信仰過程に對する明快なる批判があつたかどうかは問題である。否かゝる批判は、多くの場合多年の經驗と信念の圓熟より自然に生れるを常とすることなれば、聖人にありても三願三經三機等の信仰批判は、或は常陸時代に經典を涉獵せられし結果獲られたものであらうと思ふ。即ち此説は皆往院師の如く、元祖門下にありし時とするよりも有力であると信する。よしや元祖門下にありて、信心諍論等の多少是に類似する聖人の信仰批評を見ることが出来るけれども、而も此下に表はれし如き精嚴なる信仰批判を、當時に於いて有せられしかは頗る怪しむべきものであると思ふ。故に嚴密に云へば、聖人の三願轉入の自覺は御本書御製作の當時といふた方が最も事實に近いものであらう。

教行信證講義

四、上來吾々の力説した處は、三願轉入の自覺と吉水入室の獲信とは何等の衝突を見ないこと云ふことに結歸するのである。即ち吉水入室の眞信決定が圓熟し精練せられて、三願轉入の宗教的批判となつたもので、夫は吉水入室の際、既に萌芽として宿つてあつたといふのである。かやうに明瞭となり來れば、此三願轉入の自覺が年代的に何時であつたかといふやうな問題は、極めて些細なものとなる。それよりは、信念の事實として、常にこの三願轉入の自覺に入り、益濃厚に、益精淳に、益強烈に體驗せられることとなる。是は生々化育せられ、又夫自身向上して止むことはない。

抑も第十九、第二十願の建設は何故であるかと云へば、如來が深く吾等の機能を洞察し給ひ、無始以來の自力疑心を調順へて、弘願眞實に入らしめんとする大悲方便に外ならぬ。故に聖人は『末燈鈔』第二通の終りに

佛恩のふかきことは、懈慢邊地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも、彌陀のおんちかひのなかに、第十九、第二十の願の御あはれみにてこそ不可思議の樂にあふことにさふらへ云々。

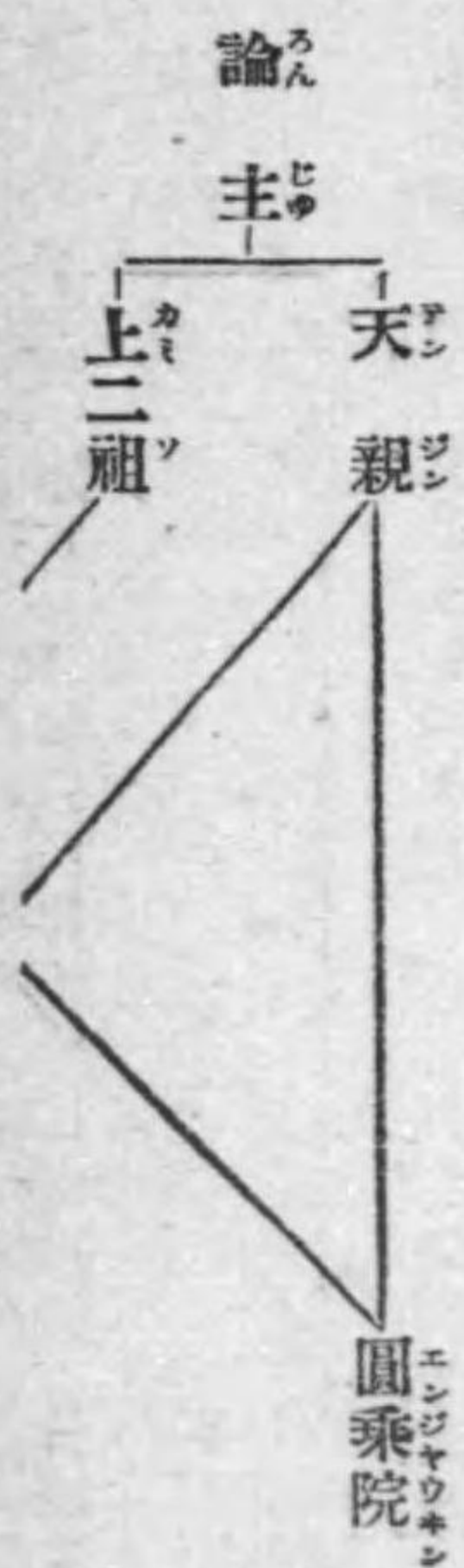
と仰せられた。如來攝化の方より云へば、十九、二十は大悲方便の願である。そしてこの

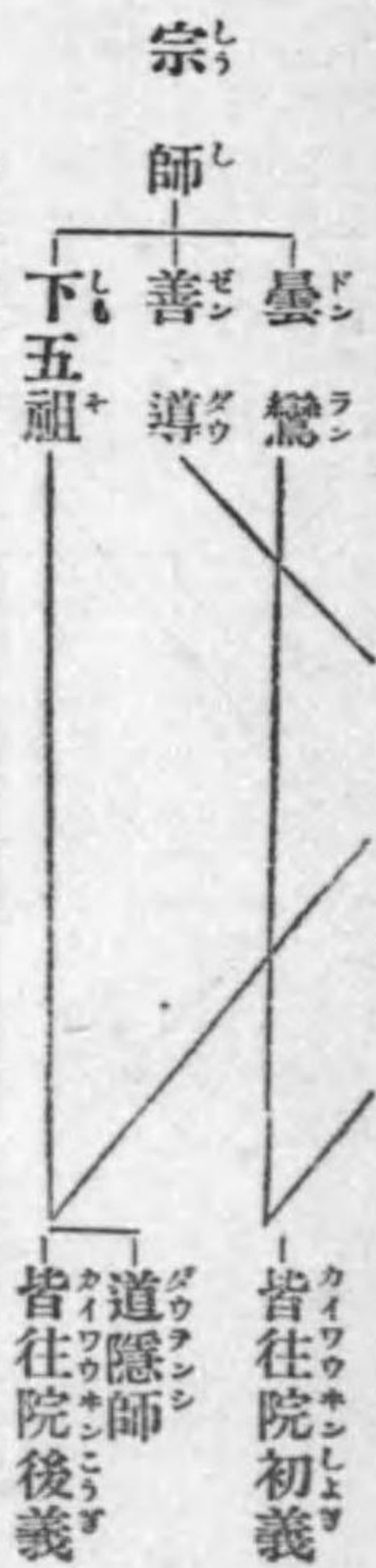
方便を惹起せしものは、實に久遠劫來の凡夫の修諸功德心、自力疑心である。されば吾等は方便の願意を案じて、常に念々に深く自己の眞相を反省すべきである。その時大悲の方便は目的を達して、定散の諸機を調順し、弘願に歸入せしめるのである。其模様を表現せるは、三願轉入の文と一連する次上の文である。

悲哉、垢障の凡愚、無際より已來、助正間難し、定散心難はるが故に出離其期なし。乃至良に傷嗟すべし。深く悲嘆すべし。云々

是れ即ち法の方便の願意が、正しく第十九、第二十の機に透徹したる所である。此傷嗟悲嘆に入りし者は、一念同時に弘願の人となりて三願轉入の信仰的過程を自覺するのである。

四、因に此下の文の中、「論主」「宗師」に就いて、七祖の何れを指したるものであるかといふ諸説を述べれば





何れも一長一短の説であるが、文に親しく且つ宗教的情緒を重要視せる點に就いて圓乘院師の説は最も勝れてゐる。天親を擧ぐれば、龍樹と曇鸞は夫に攝まり、善導を擧ぐれば、道綽源信源空の三祖は之に攝せらる。皆往院の後義も隱健であるが、上の天親、善導説と雖も、元より他の五祖を包含せることは前述の如しであるから、今はこの説に順ふ。

第三節 仰信の自督

爰久入願海深知佛恩爲報謝至德撫真宗簡要恒常稱念不可思議德海彌喜愛斯特頂戴斯也

【讀方】 爰にひさしく願海に入りて、ふかく佛恩を知れり。至徳を報謝せんがために真宗の簡要を撫ひて、つねに不可思議の德海を稱念す。いよくこれを喜愛し、ことにこれを頂戴するなり。

【文科】 仰信の自督を述べて化身士を結釋し給ふ。

【講義】 私は久しい以前から眞實の他力本願に歸入させて戴き、誠に佛恩の深重なることを知ることが出来ました。この極みない恩徳に報謝の奉らんが爲めに、淨土眞宗の要とする所の類文を撫ひ集め、常に如來の不可思議なる廣大の慈恩を念じて御名を稱することである。彌深くこの本願を喜愛び、特にこの大法を奉戴することでありませす。是れ眞實に私の眞實の喜びであります。

第三編 聖淨二道判と眞偽決判

第一章 略明

【大意】以下「化巻」の背景とも云ふべき聖淨判と眞偽判とを廣説し給ふ。前者は佛教内の自力他力の決判にして、後者は外邪異執に對して佛教の正道たることを決判するのである。本章は其略明である。

第一節に聖淨二門を擧げて時機を判じ、第二節には教法の五種説人と、之を批判すべき四依説を擧ぐ。

第一節 聖淨二門を擧げて時機を判ず

信知聖道諸教爲在世正法而全非像末法滅之時機已失時乖
 機也淨土眞宗者在世正法像末法滅濁惡群萌齊悲引也

【讀方】信に知りぬ。聖道の諸教は在世正法のためにして、またく像末法滅の時機にあらず。已に時をうしなひ機に乖けるなり。淨土眞宗は在世正法像末法滅濁惡の群萌、ひとしく悲引したまふをや。

【字解】一。像末 像法と末法。像法の像は似の意。佛滅後五百年間の正法の時過ぎ、其後一千年間をいふ。この間は正法時に似て修行するものあれども、眞の修行でないから證るものがない。三法中、教

教行信證講義
行ありて證なき時期である。次末法の末は微の意。佛滅後千五百年を経て、正像の二時過ぎ、爾後一萬年
間をいふ。この間は、佛法が漸次衰微に歸するといふので末法といふ。
【文科】 時代を決別し給ふ。

正像末の
三時論

【講義】 更に眼を時代といふ上に轉じて見れば、聖道門自力の諸の教は、釋尊在世、及
び滅後五百年間の機根の勝れた時代に相應する教であるが、像法、末法といふ機根の劣つ
た時代、即ち正法の滅するといふ惡時代に相應するものではない。かやうに聖道の教はも
う時代の適應を謬り、法を受ける機根に乖いてをるのである。

然るに淨土眞宗は、釋尊在世の正法五百年の時代、及び其後一千年間の像法時代、其後
一萬年間の末法の時代並びに法滅の時代に亘りて煩惱に穢され、惡業に繋がる、群萌を、
一様に大慈悲をもつて、誘引し給ふ教へである。

【餘義】 一、上來淨土の教行信證眞佛土化身土を明し了つた故に以下正しく聖淨
二門相待して、時代の大勢上から聖道自力の教行證廢れ、淨土の教行證の興隆するこ
とを證し給ふ。

この時代の上から、聖淨二門の興廢を主張せられたのは、七祖の上で云へば道禪禪師

時代上の
教法觀

道禪禪師
の時代觀

である。法然聖人亦是文を『選擇集』教相章に引用せられて、御自身の見解を披瀝せられた。
『安樂集』上三十五丁に

乃至一に謂く聖道、二に謂く往生淨土、其聖道一種今時證り難し。一は大聖を去ること
遙遠なるに由る。二は理深く解微なるに由る。

かくて『大集月藏經』取意の文たる「我末法時中、億々衆生乃至唯有淨土一門可ニ通入
路」を引く。且つ『同集』上卷初めには『月藏經』の五箇の五箇の文を出し、大聖を
去ること遙遠の世に生れた解浮薄にして暗鈍なる衆生の爲めに、淨土の一門の開かれたる
ことを力説してある。

法然聖人
の時代觀

『選擇集』の此下の私釋には、更に『西方要決』後序の文を引く。

夫れ以れば、像季に生居れ、聖を去ること斯れ遙かなり。道三乘に預れども、契悟する
に方なし。乃至必ず須く跡を娑婆に遠かり、心を淨域に栖しむべし。

かやうに大聖釋尊を去ること遙遠なるより聖道の修行は實修せられ難きを述べ、こゝに
像末相應の念佛の一門を唱道せられてある。更に『特留念佛章』には「當に知るべし聖道
は機縁淺薄にして、淨土は機縁深厚なり」と云ひ、『念佛附屬章』には、「故に知ぬ諸行は機

に非ず時を失ふ。念佛往生は機に當り時を得たり。乃至、故に知ぬ、念佛往生の道は、正像末の三時及び法滅百歳の時に通することをしと云ひ、『同集』末文には「當に知るべし、淨土の教は時機を叩いて行運に當れり。念佛の行は水月を感じて昇降を得たり」と時機純熟の教は淨土念佛であると、時代の大勢から聖道自力教を貶せられたのである。

我聖人は、二祖の幽意を探り、更に多くの諸經を初め『末法燈明記』を引用して、時代の大勢を論じ、修道の推移を説き、像末五濁の現代には、唯この弘願他力一法のみなりと論證せられたのである。

第二節 五説、四依を擧げて眞偽を決す

第一項 五説

是以據經家披師釋辯説人差別者凡諸經起説不過五種一者佛説二者聖弟子説三者天仙説四者鬼神説五者變化説爾者四種所説不足信用斯三經者則大聖自説也

【讀方】是をもて經家によりて師釋をひらきたるに、説人の差別を辨せば、おほよそ諸經の起説五種にすぎず。一には佛説、二には聖弟子説、三には天仙説、四には鬼神説、五には變化説なり。しかれば四種の所説は信用にたらず。この三經はすなはち大聖の自説なり。

- 【字解】一。經家 阿難を指すといふ説(大谷派皆往院)あれども、こゝでは釋尊を指す。
- 二。師釋 道綽、善導を指す。「安樂集」上、初、「玄義分」初に出づる五種説をいふ。
- 三。天仙 天は六欲天、四禪天等に住む天人。仙は仙人。世間を離れて山などに住し、神變自在の術を有すといはる人。
- 四。變化 形を變じて種々の相を示す妖怪。

【文科】五種説人を擧げて佛説を選取し給ふ。

【講義】夫故に釋迦牟尼如來の經説に基きて、道綽、善導の釋義を繕いて法の説人の差別を辯明せば、凡て一切の諸經は、左の五種の説人の外を出づることはない。

一は釋迦牟尼佛の説、二は佛の聖弟子の説、三は天仙の説、四は鬼神の説、五は變化妖怪の説である。是等後四種の説は信するに足らぬ。唯信憑すべき説は、第一の佛説である。然るに今淨土眞宗所依の三部經は、大聖釋尊の自ら説き給ふ所である。

第二項 四依

大論釋四依云欲入涅槃時語諸比丘從今日應依法不依人應依義不依語應依智不依識應依了義經不依不了義上依法者法有二十二部應隨此法不應隨人依義者義中無諍好惡罪福虛實故語已得義非語也如人以指指月以示教我一看視指而不視月人語言我以指指月令汝知之汝何看指而不視月此亦如是語爲義指語非義也以此故不應依語依智者智能籌量分別善惡識常求樂不入正要是故言不應依識依了義經者有一切智人佛第一一切諸經書中佛法第一一切衆中比丘僧第一無佛世衆生佛爲此重罪不種見佛善根人上已爾者末代道俗善可不知四依修治法也

【讀方】大論に四依を釋していはく涅槃に入りなとせし時、もろくの比丘にかりたまはく、今日より法によりて人によらざるべし。義によりて語によらざるべし。智によりて識によらざるべし。了義經によりて不

了義によらざるべし。法に依るといふは、法に十二部あり。この法にしたがふべし。人に隨がふべからず。義によるといふは、義の中に好惡罪福虚實を争ふことなし。かるがゆへに語はすでに義をえたり。義は語にあらざるなり。人、指をもて月をなす。以て我を示教す。指を看視してしかも月を視るがごとし。人がたりて言はんわれ指をもて月をなす。汝をして之を知らしむ。汝なんぞ指を視てしかも月をみざると。此また是のごとし。語は義の指とす。語は義にあらざるなり。これを以ての故に語によるべからず。智によるといふは、智よく善惡を籌量し分別す。識はつねに樂をもとむ。正要到いらす。このゆへに識によるべからずといへり。了義經によるといふは、一切智人います。佛、第一なり。一切諸經書の中に、佛法、第一なり。一切衆の中に比丘僧、第一なり。無佛世の衆生を、佛、これを重罪としまへり。見佛の善根を種まざる人なり。已しかれば末代の道俗よく四依をしりて法を修すべきなり。

【文科】四依説を擧げて修道の規範を示し給ふ。

【講義】龍樹菩薩の『大智度論』第九に、修道者の依憑すべき四種の教訓(四依)に就いて解釋を施してある。

釋尊、涅槃に入り給ふ時に、並居る諸の比丘に語り給ふやう。汝等、今日より(一)たゞ教法に依れ、人に依りてはならぬ。(二)義理に依り、言語に依つてはならぬ。(三)智に依り、識に依つてはならぬ。(四)了義經に依り、不了義經に依つてはならぬ。是を四依とい

ふ。
 第一に「法に依る」とは、教説は十二部經あるが、是等の教説を主として、人を主としてはならぬ。教説は純一のものであるが、夫を傳へる人格には缺點のあるものである。人に囚へられずして、直ちに法の眞髓を會得せよ。第二に「義に依る」とは、經説の眞意義の中には、好とが惡とか、罪惡だとか福徳だとか、虚偽だとか眞實だとかといふやうなことを諍ふことは要らない。即ち眞の意義は純一明瞭なもので、諍ひの餘地はないのである。夫故に言語といふものは此義理を表明することを目的とするものであるから、義はその儘言語といふことは出来ない。故に若し言語に拘泥するならば、遂に眞の目的たる義を逸して仕舞うのである。譬へば、人ありて指をもつて吾々に月を指示して呉れるとする。然るに指丈を見てゐて、月を見ないやうなものである。月を指示してゐる人は云ふであらう、「乃公が指でもつて御前に月を指示してゐるのに、御前は何故指を見て肝甚の目的物たる月を見ないのであるか」と。今も是と同じである。言語といふものは義を指示して呉れる指である。指は月でないやうに、言語は義ではない。此故に言語といふものを主としてはならぬと云ふのである。第三に「智に依る」とは、智慧は能く物の善惡を籌量り、差別を考へ

るものであるが、情識は之に反して常に盲目的に欲樂を求め、生死を出づる正しい要法に入ること知らない。夫故に此情識に依らず。智慧に依れといふのである。第四に「了義經に依る」とは、圓に義理を説いた經説に依れといふのである。凡そ一切の智人の中、佛は第一に位する。又一切の書籍の中に佛法の書籍は第一位を占めるものである。一切の道を修める人々の中で、佛法に隨順してゐる比丘僧が第一である。この比丘僧とは和合僧の意味で、佛法を人格の上に體現した人、即ち萬人の師表と仰がるべき人をいふ。了義經とは是等の三寶の言語を指すのである。

無佛世界の衆生を佛は重罪の人であるとせられた。是は佛に逢うても、佛法を聞いても信じない人々を指すので、どうしても、心の眼の開けない人をいふ。是は前世に佛を見奉る善根を植ゑなかつた人である。吾々はこの種の人となつてはならぬ。吾等若し自ら省みて無佛世の衆生であると悲しむならば、其處に見佛の眼は開けるであらう。上巳

爾れば、末代の出家、在家の人々よ。善くこの四依の意義を噛み分けて道に進むが宜しい。

第二章 廣明總標

然據正真教意披古德傳說顯開聖道淨土真假教誠邪偽異執外教勘決如來涅槃之時代開示正像末法旨際

【讀方】 しかるに正眞の教意によりて、古徳の傳説を披く。聖道淨土の眞假を顯開して、邪偽異執の外教を勘決す。如來涅槃の時代を勘決して、正像末法の旨際を開示す。

【文科】 二道判と眞偽判を總標し給ふ一段。

【講義】 今や進んで機教の眞假分齊を批判して時代の何たるかを決せんが爲めに、正しく佛の眞説に基きて、古聖賢の遺したる傳説を繕き、聖道一代の教は方便、淨土眞宗は究竟眞實の教なることを充分に顯開し、更に正道にあらざる邪偽の異端外道の眞相を暴露して、修道者を教誡め、終りに釋迦如來涅槃の年代を勘決して、正法 像法、末法の三時代の内容を説き示すであらう。

第三章 二道判と時代觀

【大意】 本章は正しく聖淨二道を判決し、時代相應の宗教を説き給ふ。裏から云へば、教法の眞假は時代や修道の様式の變化によりて移るゝものでないといふことを力説せらるゝのである。

第一節には「安樂集」の四文を引いて、機教相應の内容を示し、第二節には時代を勘決せんが爲めに、第一項に總説、第二項に「末法燈明記」を引用して、第一科に、四重問答して、無戒名字の比丘を末法の眞寶と論定し、第二科に、廣く「涅槃經」「十輪經」「大集經」「賢愚經」「大悲經」を引いて、像末時代の教法流布の状態を細説し、第三科に舉教比例して、結釋し給ふ。

第一節 「安樂集」の時代判

是以玄忠寺、綽和尚云然、修道之身相續不絕、逕一萬劫始證不退位、當今凡夫、現名信、想、輕、毛、亦曰假名、亦名不定聚、亦名外凡、夫未出火宅、何以得知、據菩薩瓔珞經、具辯入道行位、法爾故名難行道。

【讀方】 こゝを以て玄忠寺の綽和尚のいはく。しかるに修道の身相續してたえず、一萬劫をへてはじめて不退の位を證す。當今の凡夫、現に信、想、輕、毛となづく。また假名といへり。また不定聚となづく。また

外の凡夫となづく。いまだ火宅をいでず。何をもちか知ることなる。菩薩瓔珞經によりてつぶさに入道行位を辨するに、法爾なるがゆへに難行道となづく。

【字解】一。菩薩瓔珞經 廿卷。姚秦。竺佛念の譯。菩薩の法たる六度、四聖諦、唯識、修行の階級等種々の法門を説く、更に同人の異譯に「本業瓔珞經」二卷あり。

【文科】「安樂集」第一文によりて難行道を示し給ふ。

【講義】夫であるから玄忠寺の和尚、道綽禪師は、其著「安樂集」下卷に、然るに道を修める人が、不斷に其修道を繼續して、一萬劫の長い時期を経て、始めて不退の位を證す。そは所謂十信一萬劫の修行によりて初住に入つたもので、内凡位的不退を云ふのである。聖道門の修道は、かやうな至難なものであるが、今日の吾等凡夫は如何なる位地をもつてゐるか云へば、十住位以前の外凡の位にして、薄信の修道者を意味する信想の菩薩と云はるゝもので、あの微風にさへも飛ばされる輕毛のやうな凡夫でないか。即ち修道の力が足らぬ爲めに、些の縁によりても進退常なきものである。故に亦假名菩薩と名けられ、或は不定聚とも外の凡夫とも名けられる。是れ皆な不退の位を獲てをらぬ三界の火宅にあることをいふのである。如何にして是等の趣を知ることが出来るかと云へば、かの「菩

薩瓔珞經」を繙いて見ると、菩薩の修道の階梯や、行位等が具に明されてあり、淺より深に入り、下位より上位に昇る歴次進趣の法則は、本來法爾として謬ることはない。夫故に是等自力の修道を指して難行道と名けるのである。

又云有明教興所由約時被機勸歸淨土者若機教時乖難修難入正法念經云行者一心求道時常當觀時方便若不時無方便是名爲失不名利何者如下攢濕木以求火火不可得非時故若折乾薪以覓水水不可得無智故大集月藏經云佛滅度後第一五百年我諸弟子學慧得堅固第二五百年學定得堅固第三五百年學多聞讀誦得堅固第四五百年造立塔寺修福懺悔得堅固第五五百年白法隱滯多有諍訟微有善法得堅固計今時衆生即當去佛後第四五百年正是懺悔修福應稱佛名號時者一念稱阿彌陀佛即能除却八十億劫生死之罪一念既爾況修常念即是恒懺悔人也

【讀方】 又いはく、教興の所由をあかして、時に約し機に被らしめて淨土に勸歸することあらば、もし機と教と時と乖れば、修しがたく、入りがたし。正法念經にいはいく、行者一心に道を求めんとし、常にまさに時と方便とを觀察すべし。もし時を得ざれば、方便なし。之を名けて失とす。利となづけず、何となれば濕へる木をきりて、以て火を求めんに火うべからず。時にあらざるが故に、もし乾たる薪を折りて、以て水を求めんに水うべからず。智なきがごときのゆへに。大集月藏經にのたまはく、佛滅度のちの第一の五百年には、我もろくの弟子、慧を學すること堅固なることをえん。第二の五百年には、定を學すること堅固なることをえん。第三の五百年には、多聞讀誦を學すること堅固なることをえん。第四の五百年には、塔寺を造立し、福を修し、懺悔すること堅固なることをえん。第五の五百年には、白法隱滞して、おほく諍訟あらん。すこしき善法ありて堅固なることをえん。今の時の衆生をばかるに、すなはち佛、世を去りてのちの第四の五百年にあり。まさしくこれ懺悔し、福を修し、佛の名號を稱すべきとき者なり。一念阿彌陀佛を稱するに、すなはちよく八十億劫の生死のつみを除却す。一念すてにしかなり。いはんや、常念を修するは、即ちこれつれに懺悔する人なり。

【字解】 一。正法念處經 梵語 Saddharma Sūtriyupasthāna-Sūtra。七十卷。羅漢般若流支譯。十善業道、生死、地獄、餓鬼、畜生、觀天、身念處、の七品あり。善惡の業因によりて果報を異にすることを説き、地獄、餓鬼、畜生の狀況を説き、殊に天上の光景を綿密に廣説す。

二。大集月藏經 上三三六頁を看よ。

三。白法 白は清淨の義。善法の意。
 【文科】 「安樂集」第二文によりて機教時相應を説き給ふ。

【講義】 又云はく、茲に淨土教の興る所由を審かにして、其時期に關し、其根機に相應する教として淨土往生に勸め歸かしめるならば、第一に、若し教を受ける機類と、教其ものと、そして其時代と、此三つが齟齬う場合には、其教を實修し難く、又其教の眞意に到達し難い。

『正法念經』の説意によれば、道を修める人にして、若し一心に道を求める場合には、いつも時期と修行の方法を觀察へて、其宜きに從はねばならぬ。若し時期を失すれば、善なる方便も共に失うことになる。是を修道の失敗と名ける。修道の利益とは名けられな。何故かと云へば、濕た木を撥つて火を出さうとしても、火を得ることは出来ぬ。夫は火を出しうべき時期を失してゐるからである。若し又乾いた薪を折つて水を求めるならば上の場合と、同じやうに水の得られる筈がない。是等は智慧が缺けてゐるからである。『大集月藏經』に云はく、佛滅後の第一の五百年間は、我教へを奉ずる弟子達は、一般に證を得るに主要なる智慧を學んで堅固に夫を得るであらう。是は尤も善き時代である。

第二の五百年間は智慧を得る所の方便たる定を學んで、堅固に夫を得るであらう。第三の五百年間は、稍下りて多く聞き多く學び、經典を讀誦することが堅固であらう。第四の五百年間は、智、定、多聞の機根衰へ、唯道德的の善根功德を積み、罪障を懺悔することが堅固であらう。第五の五百年の間は時代大に墮落し、善法跡を拂ひ、道を修めること沈滞し、唯諍訟のみ多くなりゆきて、ほんの微かな善法丈が残つて餘喘を保つに至るであらう。

此經說によりて計るに、今我道綽の時代は、佛滅後大凡千五百餘年に當つてゐる。即ち第四の五百年に入つたのである。されば今の時はもう智慧、禪定、多聞の眞摯なる修道生活に適する時代でない。正に懺悔と修福の時代である。機根漸く衰へて自力の如法修行の叶はぬ濁世となつた。今ぞ彌陀佛の名號を稱ふべき時節である。一念彌陀の名號を信じ稱ふる立ろに、即ち能く八十億劫の生死の罪業を滅し除き給ふ。一念にしてこの通りである。況んや常に不斷相續して念するならば、是は恆に懺悔する所の人である。即ち念々稱名し、念々罪を滅す、かくて是人は常懺悔の生活を送る人で、正に第四の五百年といふ時代に相應する修道者である。

又云辯經住滅者謂釋迦牟尼佛一代正法五百年像法一千年末法一萬年衆生滅盡諸經悉滅如來悲哀痛燒衆生特留此經止住百年

又云大集經云我末法時中億億衆生起行修道未有二人得者當今末法是五濁惡世唯有淨土一門可通入路上巳

【讀方】 又いはく、經の住滅を辨ぜば、いはく釋迦牟尼佛一代正法五百年、像法一千年、末法一萬年には、衆生滅盡諸經悉滅。如來痛燒の衆生を悲哀して、ことにこの經をとめて、止住せんこと百年ならん。又のたまはく、大集經には、わが末法の時の億々の衆生、行をおし道を修せん、いまだ一人として得るものあらじと。當今に末法にして、これ五濁惡世なり。たゞ淨土の一門のみありて通入すべき路なり。上巳

【文科】 『安樂集』の二文によりて經典の住滅と末法の唯一教法を示し給ふ。

【講義】 又云く、今世佛教經典に就いて、殘るものと滅びるものとを辨別するならば、大凡釋迦牟尼如來一代の經說が流傳する所の年代を三期に區分し、其第一期は正法五百年

第二期は像法一千年、第三期は末法萬年である。此第三の末法には災起りて衆生多く其數を減じ、諸の經典は悉く滅びて仕舞うであらう。此時如來は、苦痛の焰に焼かる、衆生を悲哀み給ひて、特にこの『大無量壽經』を此世に留めて、百歲乃至無量歲に至らしめ給ふ。

又『大集經』の教意によれば、末法の時代に當つて、我教へを奉ずる億々無量の弟子達が、六度の行を起し、戒、定、慧の三學を修めても、恐くは一人も眞實に證りを得る者はないであらうと説いてある。

當時は既にこの末法の時代に屬し、正に是れ五濁惡世に當つてゐる。されば實の功果ある教へといふものは、唯淨土他力の一門に限る。是の一門のみが吾等が證りの堂奥に通達する所の唯一の道である。

第二節 時代勘決

第一項 正明

爾者穢惡濁世、群生不知末代、旨際毀僧尼、威儀今時、道俗思量

己分、按三時教者、勸如來般涅槃時代、當周第五主穆王五十三
年壬申、從其壬申至我元仁元年甲申、二千一百八十三歲也、又
依賢劫經、仁王經、涅槃等說、已以入末法六百八十三歲也。

【讀方】 しかれば穢惡濁世の群生、末代の旨際をしらず。僧尼の威儀をせしむ。今の時の道俗、おのれが分を思量せよ。三時教を按ずれば、如來般涅槃の時代をかんがふるに、周の第五の主穆王五十二年、壬申にあたり。その壬申より、わが元仁元年甲申にいたるまで、二千一百八十三歳なり。また賢劫經、仁王經、涅槃等の説によるに、すでにも末法にありて六百八十三歳なり。

【字解】 一。三時教 正法五百年、像法一千年、末法萬年の三時期をいふ。
二。賢劫經 十卷、四智の竺法護譯、三昧品より囉累品に至る凡て廿四品中に、三十二相品、千佛名號品、千佛發意品等、各種の法門義類を明す。

三。仁王經 二卷、唐の不空三藏譯、具には仁王護國般若波羅密多經といふ。序品、觀如來品、菩薩行品、二諦品、護國品、不思議品、奉持品、囉累品の八品より成る。本經を讀みて修する祈禱法あり、之を仁王經といふ。我國に於いては寛治四年、朝廷に於いて始めて之を修す。日月、星辰、火、水、大風、炎旱、兵賊の七難起る時に此法を修して、災を鎮め、又平生にも之を行ふ。

四。涅槃經 具に大般涅槃經、大乗涅槃經にして。北本四十卷、南本三十六卷の二本あり、「第一卷」

六九二頁、『第二卷』三〇七頁に詳述。

【文科】三時教判の旨際を總標して次の『末法燈明記』の文を起し給ふ。

【講義】爾ば上の經説に依りて勘へて見ても、世の一切の群生は、皆末法といふ時代の濁浪に汚されてゐるのであるから、等しく煩惱に穢され、惡業に囚へらるゝ人達である。然るに彼等はこの末代といふ旨際の何たるかを知らない爲め無暗に僧侶、比丘尼の威儀が亂れたとか、修行が行届かぬと毀るのである。是は僧侶も在家の人も、御互に他人を毀ることを止めにして、先づ第一に各自の分限を思量るが宜しい。

今や進んで正像末三時に關する教法を案べ、先づ釋尊御入滅の時代を勘へ見るに、夫は支那、周の第五世の主穆王の治世五十三年壬申に當つてゐる。其壬申の年から我元仁元年甲申に至るまで二千一百八十三歳である。そこで『賢劫經』『仁王經』『涅槃經』等の正法五百年説に依れば、當年はもう末法に入つてから六百八十三歳である。

第二項 『末法燈明記』の文

第一科 總説

披閱末法燈明記最澄製作曰夫範衛一如以流化者法王光宅四海以垂風者仁王然則仁王法王互顯而開物真諦俗諦遞因而弘教所以立籍盈宇内嘉猷溢天下爰愚僧等率容天網俯仰殿科未遑寧處然法有三時人亦三品化制之旨依時興讚毀讚之文逐人取捨夫三古之運減衰不同後五之機慧悟又異豈據一途濟復就一理整乎故詳正像末之旨際試彰破持僧之行事於中有三初決正像末二次定破持僧事後舉教比例

【讀方】末法燈明記製作を披閱するに、いはく、それ一如に範衛して、もて化をながすは法王(一)四海に光宅して、もて風に乗ずるは仁王(二)なり。しかれば、すなはち仁王法王が互に顯はれて物を開し、真諦俗諦はたがひによりて教をひろむ。このゆへに立籍宇内にみち、嘉猷天下にあふる。こゝに愚僧等率して天網に容り、俯して殿科をあふぐ。いまだ寧處にいとまわらず、しかるに法に三時あり。人また三品なり。化制の旨とよによりて興讚す。毀讚の文、人にしたがひて取捨す。それ三古の運、減衰おなじからず。後五の機慧悟またことなり。あに一途によりて濟はんや。一理について整さんや。かるがゆへに正像末の旨際を詳かにして、試に破持僧の事を彰はさん。中において三あり。はじめに正像末を決す。つぎに破持僧の事をさだむ。のちに教をあげて比例す。

【字解】一。末法燈明記 一卷。我國天台宗の開祖、傳教大師著。佛法王法治化の理を説き、眞諦、俗諦相依の義を述べ、正像末の三時異りあるが故に、機に利鈍あり、法に諍毀あり、末代の修道者はこの理を考へて、機教の取捨をなさなければならぬと説く。因に慈雲尊者は此書を偽作とせり、戒律を嚴修する者に取つては、不便なるが爲めか。

二。範衛 範は模範にて、「こゝには「則る」の意、衛は衛護にて、「まもる」の意。眞如に則り、眞如を守りての意である。

三。法王 大法の王。釋尊をいふ。

四。四海 もと支那に於いて、東夷、南蠻、西戎、北狄を指していふたのであるが、今は國の四方を指す。全世界といふ程の意味である。

五。光宅 光は廣、宅は居である。即ち「廣く住居すること」にて、王者が四海に徳を布くことをいふ。

六。仁王 民を憐み、仁徳を備へた帝王のこと。

七。物 衆生のこと。

八。眞諦、俗諦 この意義については、諸説區々であるが、こゝでは出世間の法を眞諦、世間の法を俗諦といふたのである。或は之を佛法(眞諦)王法(俗諦)といふてもよい。眞宗本願寺派の學者は、文化文政の頃から淨土眞宗の宗義をこの二諦の名目をもつて顯はしたが、大谷派では明治八年六月廿一日の五ヶ條の御消息から始つたらしい。

九。玄籍 玄は幽玄、奥深いこと。即ち奥深い意義を有する書籍、佛典のこと。

一〇。嘉猷 嘉は善、猷は道、善美なる道といふこと。猷は亦言也といふ。その時は善言となる。何にして帝王の善き教化を指すことに一致してゐる。道が流布せる時に言となるのである。

一一。天網 「老子」の言葉である。天の罪人を罰すること、網を以て魚を捕へるやうであるといふこと。國家の法律の嚴正なるをいふ。

一二。嚴科 天子の嚴しい科めをいふ。

一三。化制 化教、制教のこと。化教は釋尊一代の化益、攝化の經説のことにて、在家出家に行き互る教へである。制教は特に修道の比丘の爲めに立てられたる律法をいふ。

一四。三古 支那の古時代を三期に分ち、各期を其時代の聖者をもつて代表せしめたのである。上古(伏羲)中古(文王)、下古(孔子)の稱。

一五。後五 五箇の五百年の第五の五百年のこと。五箇の五百年とは、佛滅後の二千五百年を五つに分ちて其時代の特長を示したるもの。第一の五百年は解脫堅固、第二の五百年は禪定堅固、第三の五百年は多聞堅固、第四の五百年は遺寺堅固、第五の五百年はこゝにいふ後五の五百年にて、圖譯堅固の時代である。

【文科】『燈明記』の總説の文を擧ぐる一段。

【講義】傳教大師最澄の著『末法燈明記』を披閱いて見るに、曰く

夫れ一如法界の眞理に範り、その眞理の護衛を受けて、一切衆生に化益を施すものは、大法の王である。又一天四海の國々を知りして、其權力廣く邊境の隈々に及び、そして民衆に對して徳化を垂れ給ふは仁王である。夫故に此仁王と法王と一所に此世に顯はれて、衆生を開導き、法王は生死を出づる智慧（眞諦）、仁王は世間に處する要義（俗諦）を教へて、遞に相因り、一つに溶け込んで、教を弘めて下さる。所以に奥深い旨趣を藏してゐる經典の感化は、宇内に盈ち、其が衆生に與へる福祉は、天下に溢れるのである。是れ實に聖代の喜びである。

爰に愚僧は謹んで聖主の天網に基き、身を下して朝廷の嚴科を仰ぎ奉り、未だ心身の安逸を計るの違はありませぬ。然るによく勘へて見まするに、如來の教法に正像末三時の差別あり、從つて其機類にも三種に分れてゐる。攝化の教、規定の律儀の旨趣、皆時期に依つて、盛んになつたり衰へたりするのである。そしてこの教律の盛衰に就いても、其人々によつて褒貶を異にし、取捨を異にしてをりまする。

即ち古代支那の文教の中心人物に就いて考へて見ても、中古の文王は、上古の伏羲氏よりも一段の位劣り、更に下古の孔子は、文王と比べては低い地位に居らなければならな

つた。かやうに三古の盛衰は、表面甚だ不同である。是と等しく佛滅後五箇の五百年の如きは、教を受ける機類の智慧、悟了に相違ありて、第一の五百年は智慧、第二の五百年は禪定といふ風に各違つてゐる。夫であるからどうしても一概に一つの定型を以て濟うとしたり、又は單純な一道理によりて律義を定ることが出来ませぬ。かやうな譯合であるから、正像末三時の旨趣を詳かにして、破戒、持戒の何たるかを彰にするでありませう。其に就いて三あり、初に正像末の三時の分際を決定し、次に破戒、持戒の事柄を決定め、終に在世正法の教説を擧げて、末法の教へと比較するであらう。

【餘義】一。「末法燈明記」の引意を述ぶるに先ち、本書製作の傳教大師の趣意を知らねばならぬ。「元享釋書」第三卷の資治表（「同書」第二十卷より二十六卷まで、欽明天皇より順德天皇まで歷代天皇の徳化と佛敎との關係を記述す）に依れば、桓武天皇延暦十七年夏四月、全國僧侶の行狀改正の詔勅發布せられ、其多くの條項中、以後は三十五歳以上にして習得の經論中、大義十條を試験し、其中五以上に通する者にあらざれば出家を許さず、又戒律を守らざる沙門は寺を放逐すべしとのことであつた。是等の嚴科の爲めに、僧侶の刑罰を受けたものは尠くなかつた。當時僧風大に亂れて、弊害百出の有様であつた爲

「燈明記」製作の趣意

めに朝廷よりこの條令が發布せられたのである。

當時傳教大師は、入唐以前にして南都興福寺にあり、法相宗慈恩大師の『義林章』法華玄贊等に依りて本書を述作し、上の勅令は時代の氣勢に通せざるものにて、かゝる像末の時代に當つて、あのやうな嚴科を設けられては、遂には僧となる者なく、爲めに三寶の種を斷つに至るであらうと、専ら經論に依りて正像末の旨際を明かにし、在世正法の戒律をもつて像末の時代を律するは、全く釋尊の教旨を破るものであると朝廷に表白せられたのである。この表白文の爲めか、延暦廿年四月には、再び詔勅ありて、廿歳以上の者は出家を許すこととなつた。

二、次に我聖人の引意に就いては、古來三義を擧げてある。一、澆末無戒の相を知らしむる爲めに。二、一宗の宗風を扶翼せんが爲めに、元よりこの二義は同一義の兩面に過ぎない。即ち淨土眞宗の教へは、末世の無戒破戒の悪人の相を知らしめて、夫等を救済し給ふは偏に彌陀如來の深重なる本願ばかりであると云ふのである。この趣旨を顯彰はすことは、その儘宗風を扶翼することになるからである。

已上の二義は大體に於いて元より異議を唱へる必要はないのであるが、更に深く是等の

我聖人の引意

内的意義を知らねばならぬと思ふ。『燈明記』の文を見れば、末世の無戒名字の比丘の行狀を經文によりて示し、是等の比丘に對しても、一般人は尙ほ佛在世の舍利弗、目連に對するやうに恭敬供養をこととせよといふのである。是は經典といふ權威を外にしては、一見甚だ奇異に感ぜざるを得ないのである。況んや聖人が是等の教權によりて、一宗を扶翼し給ふといふことは良に謂れなきこと、云はねばならぬ。

されど一度、是等經說の外皮を破りて其奥旨に徹入する時は、吾々は是等經文の詮はす所の深意に驚き、夫と同時に是等祖聖の眞意に味到することが出来るのである。

釋尊を初め、在世正法の賢哲は、一樣に嚴正なる戒律を守り、一代の師表として民衆を導いた事實は明かなことであるが、而も時代の推移は如何ともすることは出来ない。況んや國を異にし、處を異にするに於いては尙更である、其戒律をもつて其儘末代の異國に適用せんとするは餘りに教法の外面に囚へられたるものと云はねばならぬ。僧侶と云へば、何人も教を敬ふ上から、高潔清淨なる修道者を想ひ起すものであるから、僧風の頽廢は殊に萬人の注目を惹起すものであるが、併ながら夫は單に常識の要求である。抑も上代の正法時代と比べて、像末世の僧風が何故に紊亂するのであるかと云へば、そこには時代の

時代の推移の様式

の推移といふ已み難いものがあるとともに、進んで云へば、宗教の眞精神は必ずしも一定の様式を取らねばならぬ必要はなく、時代によりて、如何に形式を異にしても、其眞意と實益とは獲られるものであるといふのである。然るにこの大乘の極意を曉らすして、或は上代の律儀をもつて制約し、或は其當時の道德法律等をもつて一概に非難攻撃するが如きは時運の大勢を知らざるとともに、第一に教法の眞精神に徹せざる謬ちに外ならぬ。是は甚だ重要な問題である。

即ち教の流傳に就いて思考するに、教は必ずしも、聖者賢者の間に實現するばかりでなく、又凡夫惡人の間にも實現するのである。否な「諸佛の大悲は苦ある者に於いてす」の金言の如く、大悲の水の注ぐ處は高嶺の花よりも、低い谷間の小草を濕はすを常とする。末世の僧は無戒名字たりとも、而も三衣を纏ひて三寶に歸依の念をもつてゐる。彼等が妻子を挾み、酒家に遊んで在家の人々と威儀を等しうしても、よく末世の機相を自覺して、心に漸愧の念、敬虔の情を生じ、自ら深く罪濁を感じて三寶に歸依するならば、そこに如來の大悲は實現し、佛智は低く罪濁の胸に下りて、刹那超越の宗教に入る事が出来るのである。是れ實に釋尊の出世本懷である。然るにこの趣旨を知らざる人々は、徒に教法をも

つて高遠なるものと思ひ、一般僧侶が一樣に清淨なる人格を具へずんば、釋尊の教法は滅亡せるものゝやうに心得て、自分はいつまでも其渦中から逃れて客觀しつゝあるのである。然るに實際より見れば、僧侶の團體も矢張り學校のやうなものにて、學校の卒業生は毎年僅少の人に止り。いつも未來卒業の學生をもつて充されてゐるのである。然るに若しも一度に卒業する學校がないとて、在學生を放逐するならば、學校は遂に存在することを得ず、従つて學問は絶滅せざるを得ない。今教界も亦其通りである。若しも在世正法の戒律をもつて末世の僧を制し、是をもつて彼等を罰するならば、修道者はこゝに絶え、教法は遂に滅するのである。

抑も教へは藥の病者に於ける如く、凡愚惡人を離れて存在するものではない。こゝをもつて大經第十八願には「唯除五逆」等と仰せられる。是を我聖人は「銘文」本三丁に「このふたつのつみ（五逆と謗法）の重きことを知らしめて、十方一切の衆生、みなもれず往生すべし」としらせんとなり

と仰せられた。是は「唯除」等の抑止の底を見破りて、大悲の眞意に徹せられたものに外ならぬ。『第二卷』五四一頁參照）こゝにこそ眞の教法があるのである。然るに教律の外

に拘泥して、徒に唯外面の美を願うて、律法主義に陥り、汚濁の胸奥に生る、宗教を知らざるものは大聖の教意に遠ざかるの甚しいものと云はねばならぬ。

是れ恐らくは傳教大師の『燈明記』述作の真意にして、又我聖人が此真意に徹せられて、全文を引用せられた所以であると思ふ。

第二科 正像末を決す

初決正像末出諸説不同且述一說大乘基引賢却經言佛涅槃後正法五百年像法一千年此千五百年後釋迦法滅盡不言末法准餘所說尼不順八敬而懈怠故法不更增故不依彼又涅槃經於末法中有十二萬大菩薩衆持法不滅此據上位故亦不同問若爾者千五百年之内行事云何答依大術經佛涅槃後初五百年大迦葉等七賢聖僧次第持正法不滅五百年後正法滅盡至六百年九十五種外道競起馬鳴出世伏諸外道七百年中龍樹出世摧邪見幢於八百年比丘縱逸僅一二有得道果至九百年奴爲比丘婢爲尼一千年中間不淨觀瞋恚不欲千一百年僧

尼嫁娶毀謗僧毘尼千二百年諸僧尼等俱有子息千三百年袈裟變白千四百年四部弟子皆如獵師賣三寶物爰曰千五百年拘睺彌國有二僧互起是非遂相殺害仍教法藏於龍宮也涅槃十八及仁王等復有此文準此等經文千五百年後無有戒定慧也故大集經五十一言我滅度後初五百年諸比丘等於我正法解脫堅固初得聖果次五百年禪定堅固次五百年多聞堅固次五百年造寺堅固後五百年闢靜堅固白法隱沒云云此意初三分五百年如次戒定慧三法堅固得住即上所引正法五百年像法一千二時是也造寺已後並是末法故基般若會釋云正法五百年像法一千年此千五百年之後正法滅盡故知造塔已後是屬末法問若爾者今世正當何時答滅後年代雖有多說且舉兩說一法上師等依周異記言佛當第五主穆王滿五十三年壬申入滅若依此說從其壬申至我延曆二十年辛巳一千七百五十年歲二費長房等依魯春秋佛當周第二十一主匡王斑四年壬子

入滅若依此說從其壬子至我延曆二十年辛巳一千四百十歲故如今時是最末時也彼時行事既同末法然則於末法中但有言教而無行證若有戒法可有破戒既無戒法由破何戒而有破戒破戒尚無何況持戒故大集云佛涅槃後無戒滿州云云

【讀方】はじめに正像末を決するに、諸説を出すことおなじからず。且く一説を述せん。大乘基は賢劫經を引ていはく佛涅槃のち正法五百年、像法一千年、この千五百年の後、釋迦の法滅盡せんと末法をいはず。餘の所説に准するに、尼、八敬に順はずしてしかも懈怠するがゆへに法更に増せず。かゝるがゆへに彼によらず。また涅槃經に末法において、十二萬の大菩薩衆まし／＼て法をたもちて滅せずと。これは上位によるがゆへにまた同じからず。問、もし爾げ千五百年の内の行事いかにぞや。答、大衛經によるに、涅槃の後、はじめの五百年には、大迦葉等の七賢聖僧、次第に正法をたもちて滅せず、五百年のち正法滅盡せんと。六百年にいたりて九十五種の外道きはひおこらん。馬鳴、世に出て、もろくの外道を伏せん。七百年の中に、龍樹、世にいでて邪見の體を摧かん。八百年において、比丘結遼にして僅に一二道果をうるものあらん。九百年にいたりて、奴を比丘とし婢を尼とせん。一千年の中に不淨觀を聞かん、瞋恚して欲せじ。一千百年に僧尼嫁娶せん。僧尼尼を毀謗せん。千二百年に諸僧尼等ともに子息あらん。千三百年に契經變じて白からん。千四百年に四部の弟子みな獵師のごとし。三寶物を賣ん。爰に

いはく、千五百年に拘提彌國に二の僧ありてたがひに是非を起してつゝめに殺害せん。よりにて教法龍宮にたまる。涅槃の十八および仁王等にまたこの文あり。これらの經文に准するに、千五百年のち戒定惠あることなし。かゝるがゆへに大集經の五十一にいはく、わが滅度の後のはじめの五百年には、もろくの比丘等、わが正法において解脱堅固ならん。はじめに聖果をうるべき五百年には禪定堅固ならん。つぎの五百年には多聞堅固ならん。つぎの五百年には造寺堅固ならん。のちの五百年には圓靜堅固ならん。白法隱沒せんと云々。この意ははじめの三分の五百年には、次のごとく戒定惠の三法堅固に住することなえん。すなはち上に引くところの正法五百年、像法一千の二時これなり。造寺已後ならびにこれ末法なり。かゝるがゆへに基の般若會の釋にいはく、正法五百年、像法一千年、この千五百年のち正法滅盡せんと。かゝるがゆへに知んぬ。造塔已後はこれ末法に屬す。問、もし爾らばいまの世は正しく何れの時にか當れるや。答、滅後の年代おほくの説ありといへども、しばらく兩説をあぐ。一には法上等周異記によりていはく、佛、第五の主種王滿五十三年壬申にあたりて入滅したまふ。もしこの説によらば、その壬申よりわが延曆二十年辛巳にいたるまで一千七百五十歳なり。二には賈長房等、晉の春秋によらば、佛、周の第二十の主種王班四年壬子にあたりて入滅したまふ。もしこの説によらば、その壬子よりわが延曆二十年辛巳にいたるまで、一千四百十歳なり。かゝるがゆへに今の時の如きはこれ最末の時なり。彼時の行事すでに末法に同ぜり。しかれば則ち末法の中に於ては、たゞ言教のみありてしかも行證なけん。もし戒法あらば破戒あるべし。すでに戒法なし、いづれの戒を破せんによりてか而も破戒あらんや。破戒をなし、いかにいはんや持

戒なや。かるがゆへに大集にはく、佛涅槃のち無戒州にみたんと。云々

【字解】一。八敬 比丘尼八敬戒のこと。比丘尼の守るべき八法。一、百夏の比丘尼も、初受戒の比丘尼を禮すべし。二、比丘を罵ることを得ず。三、比丘の罪をあげ過を説くことを得ず。四、大徳の僧に從ひて具足戒を受くべし。五、尼、僧殘戒、(失精戒等十三戒あり)を犯せば僧に從ひて懺悔すべし。六、半月毎に僧の教誨を受くべし。七、比丘に從ひて三月安居すべし。八、夏滿ちて僧中に詣り自恣(懺悔改惡すること)の人を求むべし。

二。大術經 二卷、具には「摩訶摩耶經」又は「佛昇切利天爲母說法」といふ。上卷は佛三十三天に昇りて摩耶母人の爲めに說法し給ひ、下卷は入涅槃を明し、大法傳持を述べ玉ふ。

三。大迦葉 釋尊の大弟子、頭陀第一と稱せらる。摩竭陀國の首都王舎城に近い村の富有なる迦羅門であつたが、妻とともに出家して、釋尊の弟子となり、釋尊の滅後大衆を率ゐて第一結集をなし、爾後二十年にして、彌勒の出世をまたんが爲めに鷄足山に入りて入定す。山邊著「佛弟子傳」に委し。

四。七賢聖 佛滅後、大法傳持の七大士をいふ。摩訶迦葉、阿難、優婆鞠多、尸羅難陀、青蓮華比丘、牛口比丘、寶天比丘の稱。

五。九十五種外道 上二七三頁を看よ。

六。馬鳴 梵名アシワタキーマヤ(Aśvaghoṣa)紀元一世紀、西印度の人、始め外道に歸したが、後佛敎に入り、智辯一代に高く、文華萬代を覆ふ偉人であつた。北印度の雄主迦膩色迦王の保護を受け、大に大乘佛

敎を宣揚す。「起信論」「大莊嚴論經」「佛所行讚」等の名著あり。嘗つて尊者賴吒悉羅の曲を作り、華于城の青年を感化した。

七。龍樹 「第二卷」七五二頁に詳述。

八。毘尼 委しくは毘奈耶、梵語ニヤ(Vinaya)離行、調伏、滅等と譯す。三藏中律藏のこと。

九。袈裟 梵語カチャヤ(Kaśaya)染色衣と譯す。又義によりて離塵服、消復衣、間色衣、無垢衣、功德衣、忍辱綿等といふ。出家の正衣にして、始め棄てられた白衣端等の塵埃に赤く染つたものを洗ひて綴り合はせ着用したのであるが、後その色を袈裟の正色として木蘭色に染めるやうになつた。之に大衣、七條、五條の三衣あり、後世轉じて終に、呪字袈裟、輪袈裟等を製するに至つた。

一〇。拘提彌國 梵音カーウシヤムビー(Kausambi)中印度跋踰(Vāsi)國の都城。優填王の都した處、今のアプラハバットの北、マースアの地に當る。

一一。龍宮 龍王の住む宮殿、水底又は水上にありといふ。「長阿含經」第十九には大海の底に跋踰羅龍王の宮殿あり。縱廣八萬由旬、七寶をもつて莊嚴せらると説いてある。其他諸經典には、須彌山と佉陀羅山との中間に難陀、跋難陀、二龍王の宮殿ありといひ、娑伽羅王の宮殿は雪山の中にある阿耨達池にありともとく。或は又龍宮は、龍種族の宮殿にして、干闥國の西八百里にある遮迦迦國ともいふ、又は干闥國をいふとも云はる。或は又龍宮は單なる想像上の産物であるとも云はれてゐる。

一二。法上師 姓は劉氏、朝類の人。幼にして出家し、刻苦精勵して道を修め、衣食に窮せし際は、日

に一粒一菜を練行し、心氣益昂進せりと稱す。後徳化四方に流れ、魏齊二代に亘りて統帥となり、備尼二百萬を統ぶ。道俗悦服す。周の大衆二年(西紀五八〇)七月寂、春秋八十有六。「増數法」四十卷。「佛性論」二卷。「大乘義章」六卷等の遺著あり。

一三。周異記 具に「周書異記」本文傳らず。法琳著「破邪論」上、「法苑珠林」等に引用せらる。名の示す如く周時代の特異の事跡を記載せる書籍らしい。「破邪論」上には漢の侍中傅毅の作としてあり、傅毅は後漢の明帝の夢に答へて佛教進來の媒介者となつた人である。傳記は「後漢書」七十四に出づ。又「稽古略」によれば、傅毅が明帝に佛教の將來を勧めし時に、王道といふ人が、「周書異記」を引いて之を助けたと傳へてある。此説によれば、其時代以前に出來た書らしい。

一四。魯春秋 孔子著「春秋」のこと。孔子、魯國の史官の記録によりて編する所。魯の隱公より哀公まで十二公の時代に亘りて時事の當否を斷じ、王者の大道を明かにせられた。主義ある歴史書である。左氏の註をもつて「春秋左氏傳」若くは單に「左傳」として廣く行はる。

【文科】「賢劫經」大衛經の文を引いて、三時の實際を勘決せらる一段である。

【講義】 初めに正像末三時の年代を決定するに就いては、諸説不同である。其中一説を擧ぐれば、大乘の慈恩大師窺基は、「彌勒上生經疏」上に、「賢劫經」(或は「大集經」ならんとも云ふ)を引用して云く、釋迦佛涅槃の後には正法は五百年、像法は一千年である。此

千五百年を経て、釋尊の教法は滅盡す、即ち末法の時代には教法は殘つてをるとは云はぬ。

然るに上の「賢劫經」の餘の經説、即ち「善見毘婆娑律」、「四分律」等の説によれば、正法は一千年と説いてある。夫は女人の教團が成立する時に、若し女人に出家を許すならば一千年の正法は五百年となるであらうと云ふのであるが、但し尼が八敬戒を守れば更に五百年増して一千年となるといふ。所が尼達が佛の定め給ふ八敬戒に順はず、修道を懈怠た爲めに、増すべき五百年の正法時代は増さずして、矢張り五百年となつたのである。夫であるから此正法千年説には依ることは出來ない。

然るに「涅槃經」の中に、「末法の時代に十二萬人の大菩薩方が有して、大法を維持して滅すことはない」と説いてあるのは、上位の菩薩に就いて云うたので、此場合とは違ふのである。

問うて曰く、夫ならば正法像法の千五百年間の大法護持の行事は如何なるものであつたか。

答ふ、「摩訶摩耶經」の所説に依るに、釋迦佛御入滅後、初の五百年間は、大迦葉、阿難等の七賢聖が引き續いて正法を宣傳して滅することはなかつたが、五百年後には正法滅盡

するであらう。佛滅六百年に至つて、九十五種の外道競ひ起るが、此時馬鳴菩薩ありて是等の諸の外道の説を打ち破るであらう。佛滅七百年には、龍樹菩薩出世して邪見の幢を摧き破りて、大法を宣揚するであらう。八百年には諸の修道の比丘達が放逸な生活をなしてほんの二人の人が道果を得るに過ぎない。九百年に至ると、下僕を僧となし、婢を尼とし、そして在家の者は是等の僧尼を輕んずる。佛滅一千年中に若し人々が不淨觀を聞くなれば、自分達の五欲の樂を減される爲めに、瞋恚の心を起して、聞くことを欲しないであらう。千一十年には、僧も尼も、在家の人々と同じやうに婚姻をするに至り、却つて釋尊の僧戒を毀謗するであらう。千二百年にはあらゆる天下の比丘も比丘尼も、一樣に子供を持つてであらう。千三百年には、壞爛色の袈裟が在家の服裝と同じやうに、純白な色となるであらう。千四百年には、比丘、比丘尼、淨信士、淨信女の四部の佛弟子は、皆獵師のやうに殺生を事として、三寶の供養物を賣却するであらう。佛滅後千五百年には、拘睺彌國に二人の僧があつて、互に是非の諍ひを起し、遂に殺し合ふに至り、是が爲めに如來の教法は龍宮に藏れて仕舞うのである。

『涅槃經』第十八、及び『仁王經』『月藏經』第十にも亦上のことを記載した文がある。

是等の經文に依りて考へて見るに、佛滅千五百年の後には、戒定慧の三學は全く地を拂うてゐるのである。夫故に『大集月藏經』第五十一には、「我滅度の後、第一の五百年間は諸の修道の比丘達が如來の正法を守りて解脱を獲ることが堅固であるであらう。聲聞なら菩薩ならは初地の位を得るを解脱といふ。第二の五百年間は、一段下りて其解脱を獲るの方便たる禪定を堅固に修めるであらう。第三の五百年間は、更に下りて多く聞き博く學ぶことが堅固であらう。第四の五百年間は、寺塔を建て福德を修めることが堅固であらう。第五の五百年間は、闍諍が烈しくなりて道に志す者もなく、善法は全く此世から隠没れて仕舞うであらう云々。」此經説の意は、第一より第三の五百年は次第の如く戒、定、慧三學が其時代々々の特長となりて、堅固に實修せらるゝことを述べたので、即ち上に引用した『彌勒上生經疏』の説たる正法五百年、像法一千年の二時期に當つてゐる。第四の造寺以後は末法に入つてゐるのである。故に慈恩大師の著『般若會釋』には「正法の時代は五百年、像法の時代は一千年である。此正像の千五百年を経て、如來の正法は滅盡ぶるであらう」と。此説によりて見ても、佛滅千五百年以後は、末法に屬すといふことが知られてくる。

であるか。
 答ふ、佛滅年代に關しては、様々の説があるけれども、其中兩説を擧げる。第一説は、法上師の『周異記』の説である。釋尊は週の第五主穆王滿の第五十三年壬申に入滅せられたと云ふ。此説に依れば、其壬申歳より我延曆二十年辛巳（西紀八〇一年）に至るまで、一千七百四十九歳である。第二説は、長費房の『曆代三寶記』第一に記載せる説で、魯の『春秋』をも擧げてある。此説に依れば、釋尊入滅の歳は、周の第二十世の主、匡王班の第四年壬子の歳であると云ふ。されば其壬子年から我延曆二十年辛巳歳までは、一千四百十年である。

是等の説によれば、當今は像法の最も末の時代に當つてゐる。即ち上に引用した『摩訶摩耶經』の説によれば、佛滅後千四百年には、四部の弟子達が獵師のやうである云々とあるから、此時代の佛法の行事は、もう末法と同じなのである。されば『義林章』第六、『法華玄讚』第四等の説の如く、末法に至れば、但言教丈残りて是を實修する所の行法なく、隨つて證を得るといふことはない。若し戒法の制定があるならば破戒といふものはあるけれども、既に此時代の衆生に對しては戒法の制定がない以上は、何の戒を破ることを破戒

と名けうぞ。破るべき戒法がないならば、破戒があらう筈はないのである。ちやうど禽獸は法律をもつてをらない爲めに、彼等には破法といふことがないと同じことである。既に破戒さへないと云ふならば、持戒も亦あらう筈はない。故に『大集月藏經』第九には、「佛入滅の後には、戒を持たない人々が州に一ぱいになるであらう」云々と説いてあるのは、是が爲めである。

【餘義】一。宗學上に於いて、古より、肉食妻帯論が盛んに論議せられ。そして其肯定はやがて時機相應の眞宗の正意を發揚するものと考へられて來た。是は他宗の肉食妻帯を許さざるに對して眞宗の著しい特色であり、又實際上一般在俗者と利行同事して、能くこの教へを弘傳するの効果を收めて來たことであるが、併しながら本宗に於いて特に肉食妻帯を論議するは、稍もすれば在家と出家とを根本的に區別するやうになり、従つて其區別せられたる僧の肉食妻帯の理由といふ第二義的の論議、辯解的の論議に陥り易いことである。

我聖人の上において、根本的に僧俗の區別を見ないのである。即ち僧とは、俗を棄てて出家修道をこととする者、俗とは家にありて家業を營む者と云ふが如き習俗的の見解を

眞宗の内
肉食妻帯に
就いて

非僧非俗
の宗教

捨て、苟も外儀の姿に關らず、道に進む者は皆僧である。そして是等末法の僧は、其外儀に就いては所謂在俗者と異なることはない。この在俗僧が末世の僧實である。元より社會の階級上、末世に於いても在家出家の名義異り、其生活様式の相違はあるにしても、夫はほんの外面のことである。彼等の主要なる問題は信念の樹立である。そして云ふまでもなく此弘願他力の信心は在家出家、男女、善惡、賢愚、凡聖の區別を見ない。全く同一念佛無別道故である。

我聖人の宗教は是より外はない。「非僧非俗」と宣給ひ、自ら「愚禿」と名乗り給ひし聖人の眞意は、明かに從來の意味に於ける僧侶の型を破壊して、是等の外的な思想に囚へられず、各人が一人々々深き内心の上に如來の本願力を感得することが、釋尊教化の本質であると確信せられたものである。

二。さりながら此大聖の本旨は、長い間の時代の錯に覆はれて、一般人に知ることが出来ない爲めに、教界の先進たる傳教大師の著書を引ききて、末世の僧の行狀を經論によつて證明せられたのである。試みに其二三を擧ぐれば

「於三將來世法欲滅盡時、當有比丘比丘尼於我法中得出家己手牽兒臂」

大聖の眞意は時を超越す

而共遊行彼酒家至酒家於我法中作非梵行(『大悲經』の文)
 「若有衆生爲我法剃除鬚髮被服袈裟設不持戒、彼等悉已爲涅槃之印」
 所印也(『賢愚經』の文)

等と無戒名字の比丘の行狀を説き、

「然者、像季末法、不行正法、無法可毀、何名毀法、無戒可破、誰名破戒」といふ大師の語を引いて、全く在正法時代の形式的の戒律を破つてを。即ち夫等の外面に囚へられてゐる一般人の謬見を破壊し去り、雲破れて自と清光を放つ明月を見せしめんと試み給ふのである。末世にありては無戒の比丘を實とするといふことは、一見罪を時代に嫁して、墮落僧を庇護するやうに聞えるけれども、是等經典の眞意は左様ではなくして、時代の推移といふ不可抗の表面的事實を假りて、教法の眞精神を發揮せんが爲めである。言を換へて云へば、在正法の戒法を楯に取りて僧の行狀を非難せんとする人々に對して、何人もこの墮落時代に浮沈するでないかと、各人に自覺を促すのである。何人か時代の風潮に超然たりうるぞ。皆な末世の子である。然るに身末世にありながら上代をもつて今を非議するは自らを知らざるものである。是れ我聖人が「末代の道俗、自か能を思量

僧俗一致の宗教

せよ」と疾呼し給ふ所以である。我聖人をもつてすれば、上引の經文の如きは、徒に無戒の僧を庇護するものにはあらずして、釋尊が是等「名字の僧を讀じて、世の福田と爲し給ふ」(『十輪經』の文) 所以のものは、教法の眞意と實益とは、決して時代の推移や、行儀の衰頽によりて隠没するものでない。そこに末世相應の教法があると教へ給ふと見られたのである。彼の『大經』の「獨留此經一止住百歲」は、全く此意味に外ならぬ。

三。釋尊出世の本懷は、上述の如き僧俗一致の教法にありとすれば、肉食妻帶問題の如きは、全く月前の螢ほどの價値なきものである。故に聖人は特に此問題を提げて論議することを避けられた。否全く問題にならなかつたのである。『化卷』上の文に、
「信に知ぬ。聖道の諸教は、在世正法の爲めにして、全く像末法滅の時機に非ず。已に時を失ひ、機に乖ける也。淨土眞宗は、在世正法像末法滅濁惡の群萌齊しく悲引し給ふ也」
かゝる類文は數ふるに違あらずである。『嘆異鈔』初には

「彌陀の本願は、老少善惡の人をえらばれず、たい信心を要とすと知るべし。そのゆへは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信せんには、他の善も要にあらず、念佛にまゐるべき善なきゆへに、惡をも恐るべからず、彌陀

肉食妻帶の根本義

の本願をさまざまぐる程の惡なきがゆへにと云々」

かやうに「本爲ニ凡夫」の宗教が成立せられてある上は、大小聖人重輕惡人、皆齊しく如來の弘誓に乗ずるばかりである。この弘誓を信ずることが重要である。是を主とすれば、其衣食住等の一切の生活はそが爲めの所業となる。法然聖人の『和語燈錄』に云はく

現世の過ぐべき様は、念佛の申されんやうに過ぐべし。乃至聖で申されば妻を儲けて申すべし。妻を儲けて申されば、聖で申すべし。乃至衣食住の三つは念佛の助業なり。

この文は肉食妻帶の根本義を道破してをるのである。惠空師の『叢林集』第六に云はく
譬如下毒藥在二人手中一不害傷一人、菩薩雖在三愛欲中一持三智慧一不入三惡道一譬如群國多積三糞穢一有由益三稻田茶園一菩薩雖在三愛欲中一益三於天上天下(『遺摩尼經』)
雖有妻子一常修三梵行(『淨名經』)

是等の文は、皆大乘菩薩の生活をよく語つてをるのである。さればとて元より大乘菩薩は必ず肉食妻帶せねばならぬといふのではない。夫等の如何に關せず道に入ることが至要なのである。『和語燈錄』に云はく

人々後世のことを申しけるについて、往生は魚食せぬものこそすれといふ人あり、或は

魚食するものこそすれといふ人あり、とかく論じけるを、上人きたまひて、魚くふもの往生せんには、鵜ぞせんずる。魚くはぬものせんには、猿ぞせんずる。くふにもよらず、くはぬにもよらず、たい念佛まをすもの、往生はするぞと、源空はしりたるぞと仰せられける云々。

是は肉食に就いての教示であるが、妻帯も是と異なることはない。之を要するに生活様式や傳習風俗等に障へられぬ本願の一道を信ずることが第一の問題であつて、其他の問題は、此大道の意義を闡明す上に於いて必要であると云ふに過ぎない。即ち單に教義を説明するばかりでなく、夫等各種の生活様式は、具體的に信者の信念を表現することである。然るに後人は、是等の根本を知らずして、徒らに聖人の肉食妻帯を否認するか、又は無暗に夫を讚美するのである。謗る者は在世正法の僧の行状をもつて律せんとし、讚るものは實人生に適當であるといふ。何れも皮相に拘泥んで、其精神を逸してゐるのである。

四。聞く所によれば、西派某法主、一派の學者を集めて聖人の肉食妻帯の意義を諮問せられると、多くの人は皆な夫々の見解を述べ、「末世の機相に同する」時機純熟の大法たることを知らせんが爲め」とか、「肉食妻帯は一宗の旗幟である」等といふ。然るに碩徳

の聞えある老僧は默然としてをる。法主は其人の名を呼んで意見を述べよといふ。老僧答へて「恐れながら我聖人は、肉食妻帯をもつて慙愧に堪へぬことと御覺召されたことと存じまする」云々。法主は大に嘆賞せられたることである。此碩學の一語の中に限りない法味が籠つてゐると思ふ。是等の具體的の事柄は殊に實修身讀の外はないのである。

第三科 破持僧の事を彰はす(四重問答)

問諸經律中廣制破戒不聽入衆破戒尙爾何況無戒而今重論末法無戒豈無瘡自以傷哉答此理不然正像末法所有行事廣載諸經内外道俗誰不披諷豈貪求自身邪活隱蔽持國之正法乎但今所論末法唯有名字比丘此名字爲三世眞寶更無福田設末法中有持戒者既是在惟異如市有虎此誰可信

【讀方】問諸經律の中にひろく破戒を制して衆に入ることをゆるさず。破戒なを爾なり。いかにいはんや無戒をや。而にいま重て末法を論ずるに戒なし。あに瘡なくして自らもて傷まんや。答、この理しからず。正像末法の所有の行事、ひろく諸經にのせたり。内外の道俗たれか披諷せざらん。あに自身の邪活を貪求して持國の正法を隱蔽せんや。ただしいま論ずるところの末法には、ただ名字の比丘のみあらん。この名字を

世の眞實とせん。福田ならんや。たとひ末法の中に持戒あらば、すでにこれ怪異なり。市に虎あらんがごとし。これたれか信すべきや。

【字解】一、邪活 邪なる手段によりて生活を営むこと。僧侶が道心なくして利養の爲めに法を説いて衣食を獲ること。『智度論』第十九に五種の邪命をあぐ。一、利養の爲めに詐りて奇特相を現す。二、利養の爲めに自ら功德を説く。三、利養の爲めに吉凶を占ふ。四、利養の爲めに高聲に威を現はし人をして畏敬せしむ。五、利養の爲めに得る所の供養を稱讃し、人の心を動す。

【文科】第一重問答、末法無戒説に就いて。

【講義】問ふ、諸の經典、律部等に破戒の者は佛敎の衆團に入ることが出来ないといふことを廣く説いてある。破戒でさへ尙ほ其様に禁止してある。況んや無戒に至つては申す迄も無いことである。即ち破戒といふことは、兎に角戒の何たるを認めて夫を守らんとしたのであるから、よしや幾度も破つた所が、尙ほ持戒の分野に足を入れてをるものである。然るに無戒といつては、まるで禽獸の如く、戒に對しては全く盲目的の否定をしてゐるものである。然るに今末法時代に於ける比丘のなすべき行事を論定して、無戒が比丘の行事であるとするのは、宛然傷のない者が、「私は少しも傷まぬ」といふやうなもので、夫はもう根本から云ふに及ばぬことである。無傷のものには藥の必要はない。藥といふことを思

ひ出すこともせないのである。即ち無戒が比丘の眞面目であるならば、比丘といふ名も要せず、隨つて教團へ入るとか入らぬとかといふ問題さへもない筈であるまいか。

答ふ、さう一概に論ずることは出来ない。上にも引用したやうに、正像末時代に於ける比丘の行事は諸經に多く説いてある。是は佛法の信奉者であるなしに係らず。一般の出家在家の人々の披き見る所である。夫であるから今私に末法の行事を述べたのも、唯此經説に順うたので、強ち自身の法はづれの邪な生活を貪り求める爲めに、勝手な理窟を並べて、近くは一身を守り、進んでは一國の護持ともなるべき如來の律法を隱蔽することを致さうぞ。即ち此經説は決して難問のやうに、無意義なものではなく、能く時勢の潮流の眞相を道破して、夫に順じて教法の眞意義を知らせん爲めに外ならぬことである。事實として上來論じ來つたやうに、末法の今の時には、唯無戒名字の比丘丈ではないか。此名ばかりの比丘を以つて世の眞實となすのである。そは世界全體が墮落してゐるのであるから、此名字の比丘を外にしては、他に福田がないからである。故に設末法の時代に持戒の者があると云ふならば、夫は寧ろ怪異なことで、市場に虎がをると云ふが如く、誰も信する道理はない。

問正像末事已見衆經末法名字爲世眞實出何聖典答大集第九云譬如眞金爲無價寶若無眞金者銀爲無價寶若無銀者鑰石僞寶爲無價若無僞寶赤白銅鐵白鐵鉛錫爲無價寶如一切世間佛寶無價若無佛寶緣覺無上若無緣覺羅漢無上若無羅漢餘賢聖衆以爲無上若無餘賢聖衆得定凡夫以爲無上若無得定凡夫淨持戒以爲無上若無淨持戒漏戒比丘以爲無上若無漏戒剃除髮身著袈裟名字比丘爲無上寶比餘九十五種異道最爲第一應受世供爲物初福田何以故能示衆生可怖畏故若有護持養育安置是人不久得忍地經文此文中有三八重無價所謂如來緣覺聲聞及前三果得定凡夫持戒破戒無戒名字如其次第名爲正像末之時無價寶也初四正法時次三像法時後一末法時由此明知破戒無戒咸是眞寶

【讀方】問、正像末の事すでに衆經にみえたり。末法の名字を世の眞寶とせんこと何の聖典にいでたりや。答、大集の第九にいはく。たとへば眞金を無價の寶とすることし。もし眞金なくば銀を無價のたから

とす。もし銀なくば鑰石僞寶を無價とす。もし僞寶なくば赤白銅鐵白鐵鉛錫を無價とす。是のことに一切世間の寶のうち、佛寶無價なり。もし佛寶なくば緣覺無上なり。もし緣覺なくば羅漢無上なり。もし羅漢なくば餘の賢聖衆をもて無上となす。もし餘の賢聖衆なくば、得定の凡夫をもて無上とす。もし得定の凡夫なくば、淨持戒をもて無上とす。もし淨持戒なくば、漏戒の比丘をもて無上とす。もし漏戒なくば、剃除鬚髮して身に袈裟を著たる名字の比丘を無上の寶とす。餘の九十五種の異道に比するにも第一とす。世の供をうくべし。物の爲めのはじめの福田なり。何を以ての故に。能く衆生の怖畏するところを示すがゆへに、護持養育してこの人を安置することあらん。久しからずして忍地をえん。經文この文の中に八重の無價あり。いはゆる如來と緣覺聲聞および前三果得定の凡夫、持戒、破戒、無戒名字、その次第のごとく、正像末のときの無價の寶とするなり。はじめの四は正法の時、つぎの三は像法の時、のちの一は末法の時なり。此によりて明にしんぬ、破戒無戒ことごとくこれ眞寶なることを。

【字解】一。鑰錫僞寶 鑰錫は石藥をもつて赤銅を煉つたもの。故に金寶の眞寶に對して僞寶といふ。

二。鐵の古文字。

三。得定凡夫 色界の四種定(初禪天定乃至四禪天定)無色界の四種定(空處天定、識處天定、無所有處天定、非想非々想處天定)を修得したる凡夫のこと。

四。福田 佛及び僧のこと。佛僧に供養すれば、福徳を生ずること田地の穀物を生ずるやうであるから

この名あり。

五。忍地 小乗にては見道に入る前の加行位、煖、頂、忍、世第一法の四善根を起す位。大乘にては、三賢位（十住、十行、十廻向）の入口のこと、要するに不退位に入る前の位をいふ。

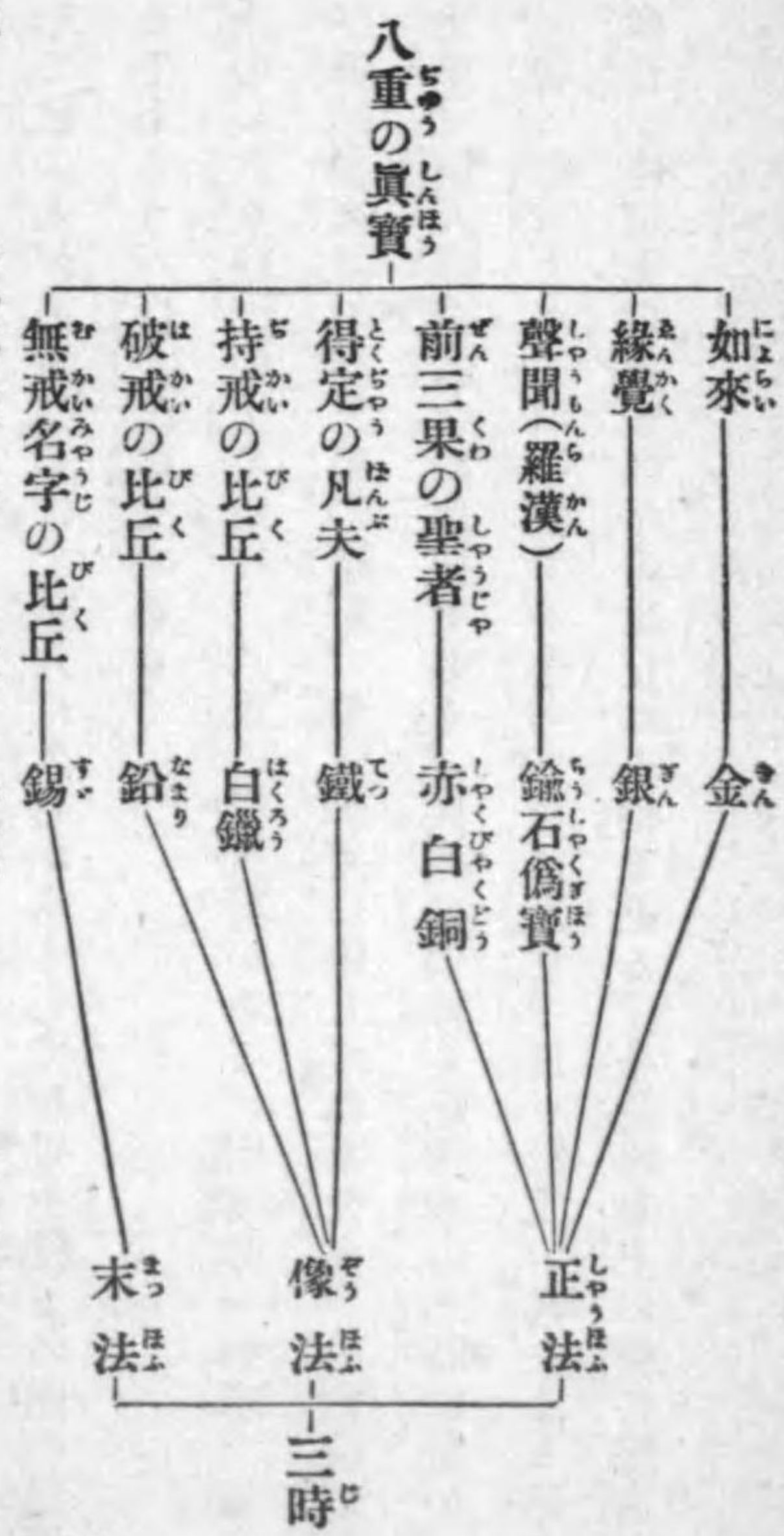
【文科】 第二重問答 末世の無戒名字の比丘を眞實する一段。

【講義】 問ふ、正像末の三時代に於ける比丘の行事に就いては、已に衆の經典に見たが、末法の無戒名字の比丘が世の眞實であるといふことは、聖典に根據があるか。

答ふ、『大集月藏經』第九に云く、譬へば眞金をもつて無價寶としても、若し其眞金のない場合には、銀をもつて無價寶とする。若し銀がなければ鉛石偽寶を無價寶とする。若し此偽寶のない時は、赤白の銅、鐵、白鐵、鉛、錫をもつて無價寶とする。かやうに一切世間の寶の中に於いて、佛の教法は無價寶である。されど若し佛寶のない時は、緣覺が無上の寶である。緣覺の居らぬ時は、羅漢が無上の寶である。若し又羅漢の居らぬ時は、預流、一來、不還等の前三果の聖者達が無上の寶である。若し又是等の聖者達が居らぬ時は、四禪八定等の禪定の出來る凡夫が無上の寶である。若し是等の得定の凡夫の居らぬ時は、淨戒を守つてゐる人を無上の寶とする。若し此淨持戒の人が居らなければ

破戒の比丘を無上の寶とする。若し此破戒の比丘がなければ、唯鬚髮を剃りて身に袈裟を着けてゐる丈の名ばかりの比丘を無上の寶とするのである。而も此無戒名字の比丘でも、佛敎以外の九十五種の外道に比ぶれば、最も勝れてゐて、其等の中の第一位に位するものである。即ち世間から供養を受ける資格がある。一般の人々の爲めには最初の福田である。何故かと云へば、此無戒名字の比丘と雖も、能く人々の爲めに、人間として尤も怖畏るべき事柄を知らせてゐるからである。夫故に此名字の比丘を供養して、護持り、養育て、僧として敬ふ人があるならば、其人は久しからずして初果を獲るの前の忍地を得ることが出来るであらう。已上は經文である。

上の『大集經』の文の中に、八重の無價寶がある。所謂第一如來、第二緣覺、第三聲聞、及び第四羅漢果の前三果の聖者、第五禪定に達してゐる凡夫、第六持戒の比丘、第七破戒の比丘、第八無戒名字の比丘である。其次第の如く正像末の三時に於いて無價寶である。即ち初の如來より第四の三果の聖者までは正法、第五得定の凡夫より第七破戒の比丘までは像法、終第九の無戒名字の比丘は末法である。今是等を上の譬に配當して圖示すれば



此によりて破戒無戒の比丘と雖も、時代によりては威く眞寶であることが明かに知られることである。

問 伏観前文破戒名字莫不眞寶何故涅槃大集經國王大臣供破戒僧國起三災遂生地獄破戒尙爾何況無戒而爾如來於一破戒或毀或讚豈一聖之說有兩判之失答此理不然涅槃等經

且制正法世之破戒非於像末代之比丘其名雖同而時有異隨時制許是大聖旨故於世尊無兩判失

【讀方】 問、伏して前の文をみるに、破戒名字眞寶ならざるることなし。何かゆへぞ涅槃と大集經に國王大臣破戒の僧を供すれば、國に三災おこり、つひに地獄に生ず。破戒なを爾なり。何にいはんや無戒をや。しかるに如來一の破戒において、あるひは毀りあるひは讚む。あに一聖の説兩判の失あるや。答、この理しからず。涅槃等の經に、しばらく正法世の破戒を制す。像末代の比丘にはあらず。その名おなじと雖もしかも時に異あり。時にしたがひて制許す。これ大聖の旨なり。世尊において兩判の失まします。

【字解】 一。三災。水災。火災。兵災の稱。

【文科】 第三重問答。名字比丘を末世の眞寶とするに就いて、異文通釋。

【講義】 問、謹んで前文を見るに、破戒の比丘も、持戒の比丘も、皆な眞寶であることが解りました。然るにどういふ理由で『涅槃經』北本第三『大集月藏經』第二十五に、「國王、大臣にして若しも破戒の僧を敬ひて供養するならば、其國に水災、火災、兵災の三災起り、現世にかくの如き苦難を受けるのみならず、未來は遂に地獄に墮するであらう。破戒の比丘を供養してさへ其通りである。況んや無戒比丘に於いては尙更である」と説かれてあるのか。さすれば如來は一の破戒の比丘に對して、或時は毀り、或時は讚め給ふと

いふことになる。唯一人の大聖釋尊として、かやうに一つの事を全く異つた兩様に批判せらるゝといふ過失のあらう筈がない。この理由いかに

答ふ、夫は質問の踏み出しが違つてゐる。問ひのやうな理筋ではないのである。即ち其『涅槃經』等の説は、正法時代の破戒に對して禁止せられた文である。従つて像末二時代の比丘に就いて仰せられたものではない。破戒の名は三時に通じて異りはないが、各時代に應じて内容が異つてゐるのである。即ち如來は其時代に應じて禁戒を設け給ふ。是れが大聖尊の旨趣である。一事に別種の批判を加へられた譯ではない。

問若爾以何知涅槃等經但制止正法所有破戒非像末僧答如所引大集所説八重眞寶是其證也皆爲當時無價寶故但正法時破戒比丘穢清淨衆故佛固禁制不入衆所以然者涅槃第三云如來今以無上正法付囑諸王大臣宰相比丘比丘尼乃至有破戒毀正法者王及大臣四部衆應當苦治如是王臣等得無量功德至是我弟子眞聲聞也得福無量至如是等制文法往往衆多

皆是正法所明之制文非像末教所以然者像季末法不行正法無法可毀何名毀法無戒可破誰名破戒又其時大王無行而可護由何出三災及失於戒慧又像末時無證果人如何彼明聽護二聖故知上所説皆約正法世有持戒時上有破戒故次像法千年中初五百年持戒漸減破戒漸增雖有戒行而無證果故

【讀方】問、もし爾らば、何を以てかしらん。涅槃等の經はたゞ正法所有の破戒を制止して、像末の僧にはあらずと。答、引くところの大集の所説の八重の眞寶のことし。これその證なり。みな時にあたりて無價なりとす。かるがゆへにたゞし正法の時の破戒の比丘は清淨衆をけがす。かるがゆへに佛がたゞ禁制して衆にいれず。然るゆへに涅槃の第三にのたまはく。如來いま無上の正法をもて諸王、大臣、宰相、比丘、比丘尼に付屬したまへり。至戒を破り正法を毀るあらば、王および大臣四部の衆まさに苦治すべし。かくのごときの王臣等無量の功德をえん。至これわが弟子なり。眞の聲聞なり。福をうることを無量ならん。至是のごとき制文の法、往々衆多なり。みなこれ正法に明すところの制文にして像末の教にあらず。しかるゆへは像季末法には正法を行ぜざれば、法としてそしるべきなし。何をか毀法となづけけん。戒として破すべきなし。誰をか破戒となづけけん。またその時大王、行として護るべきなし。何によりてか三災をいたし、および戒慧を失せんや。また像末時には證果の人なし。如何ぞ彼に二聖に聽證せらるゝことを明さん。かるがゆへに知んぬ。

かみの所説はみな正法の世に持戒あるときに約して破戒あるがゆへなり。つきに像法千年の中に、はじめの五百年には持戒やうやく減じ、破戒やうやく増せん。戒行ありといへども而も證果なきがゆへに。
【字解】一。四部衆 四衆、四輩、四部弟子ともいふ。佛の四種の弟子。比丘、比丘尼、優婆塞(清信士)、優婆夷(清信女)。

【文科】第四重問答、『涅槃經』の制戒は像末の僧に及ばずといふ事を論定する一段。

【講義】問、若し説の如くであるとするとするならば、何によりて、其『涅槃經』等の説は、唯正法五百年間に於ける所有破戒の比丘を戒められたもので、像末二時代の僧に及ばぬといふことを知ることが出来るか。

答、其は上に引いた『大集經』に説かれてある八重の眞實によりて知ることが出来る。あの文が其證據である。即ち其等の實は、其時代々に於いて無價寶であるからである。然るに正法時代に於ける破戒の比丘は、清淨に戒を持ち、道を修めてゐる比丘衆を穢す恐れがある。夫故に如來は堅く此破戒の僧を禁制して教團の中に入れ給はぬ。其所以は、『涅槃經』北本第三に言はく、如來は今無上正法を、諸の王前に大臣宰相、及び比丘比丘尼に付囑になつた。乃戒律を破り又は正法を毀るものがあるならば、佛敎の外護者たる國王大臣、及び比丘、比丘尼、清信士、清信女の四部の弟子達は、當に苦に其迷ひの病を治すが

よい。是の如くするならば、その國王大臣等の人々は、無量功徳を得るであらう。至是のやうな人にして初めて我弟子である。眞の聲聞である。功徳を獲ること無量であらう。至是のやうな破戒禁止の文は、經典の至る所に多く見ることが出来る。是等は皆正法時代に明かされたる制止の文である。像末に通ずる教へでない。その所以は、像法、末法の二時代には、正法を實の如く修行する者がないから、實の所教がないと云はねばならぬ。即ち無い法を毀ることは出来ない。されば毀法とか謗法とか名けられるものはないのである。又既に實の如く戒を持つものがないとすれば、戒はないと云はねばならぬ。さすれば破るべき戒もないのに誰を名けて破戒の比丘と云はうか。又其時の國王大臣にしても、護らなかつた理由で三災に逢ふとか。戒行と智慧を失ふといふことがあらう筈がない。又修道の人に就いて云へば、像法末法の時には、證果を開く人がないのであるから、其時の國王大臣が預流果、至阿羅漢果の聖者の教法を聞き、そして夫等を保護するといふことを、釋尊の仰せらるゝ筈はない。是の理由によつても、上の『涅槃經』等の文は、皆正法の時代に於て、正しく持戒堅固の時に破戒あることを云はれたことは明かである。
次に像法一千年の中、初の五百年の間は、戒を持つ人次第に減じ、戒を破る者が漸次増

してくる。即ち此時代は證に入るの方便たる戒行はあるけれども、機根が衰へてゐる爲めに證果を得ることが出来ないのである。かやうに終局の目的を果すことが出来ないことを目撃す。故に、修道の比丘達は、望を失うて、道を捨てるに至るのである。

涅槃、七云迦葉菩薩白佛言世尊如佛所說有四種魔若魔所說及佛所說我當云何而得分別有諸衆生隨逐魔行復有隨順佛說者如是等輩復云何知佛告迦葉我般涅槃七百歲後是魔波旬漸起當類壞我之正法譬如獵師身服法衣魔波旬亦復如是作比丘像比丘尼像優婆塞優婆夷像亦復如是至聽諸如是受畜奴婢僕使牛羊象馬乃至銅鐵釜鏡大小銅盤所須之物耕田種植販賣市易儲穀米如是衆事佛大悲故憐愍衆生皆聽善之如是經律悉是魔說云云既云七百歲後波旬漸起故知彼時比丘漸貪蓄八不淨物作此妄說即是魔說也此等經中明指年代具說行事不可更疑且舉一文餘皆准知次像法後半持戒減少

破戒巨多

【讀方】涅槃の七にのたまはく。迦葉菩薩、佛にまふして言さく、世尊、佛の所說のときは、四種の魔あり、もし魔の所說および佛の所說、我まきに云何してかしかも分別することを得べき。もろ／＼の衆生魔行に隨逐するものあらん。また佛說に隨順するものあらん。是の如きらの輩またいかんが知らんと。佛、迦葉につげたまはく、われ涅槃して七百歳の後に、これ魔波旬やうやく起りて、まさに頻にわが正法を壞すべし。たとへば獵師の身に法衣をきるがごとし。魔波旬もまた／＼かくのごとし。比丘像、比丘尼像、優婆塞、優婆夷像とならんこと。また／＼かくのごとし。乃至／＼の比丘、婢、僕使、牛羊、象馬、乃至銅鐵、釜鏡、大小、銅盤所須のものを受蓄し、耕田種植販賣市易して穀米をまうくることをゆるす。かくの如きの衆事、佛大悲のゆへに衆生を憐愍して、皆これを蓄はふことをゆるさんと。是の如きの經律はことごとくこれ魔說なりと。云々すでに七百歳の後に波旬やうやく起らんといへり。かるがゆへに知んぬ。かの時の比丘、やうやく八不淨物を食畜せん。この妄說をなさん。すなはちこれ魔の說なり。これらの經の中に明に年代をさして具に行事を説けり。さらに疑ふべからず。且く一文を擧ぐ、餘みな准知せよ。つぎに像法の後半は、持戒減少し破戒巨多ならん。

【字解】一。四種魔 通常は五種魔、死魔、煩惱魔、天魔を指せども、こゝでは魔の經律のことにて、之を二魔とし、更にこの魔經律を持つ人を二魔として、四種魔とす。

二。八不淨物 僧家に貯へてはならぬ八種の物。一、田宅園林。二、生類(草木)を種植するも。三、

穀帛を貯積すること。四、人僕を畜養すること。五、禽獸を養繫すること。六、錢寶貴物。七、鹿得釜鏡、八、衆の金飾牀、諸の重物。

【文科】『涅槃經』によりて佛滅後七百歳の僧儀を示し給ふ。

【講義】『涅槃經』初に云く、迦葉菩薩、釋迦牟尼佛に申すやう。世尊よ、世尊の御説法によりますれば、佛道を妨げる魔に四種類あるとのことでありますが、是等の惡魔の説と、正しい佛説を、どうして區別したら宜しいでせうか。又多くの衆生が、惡魔の説に惑はされて、惡魔の行に隨ふものと、或は又佛説に隨順ふものとありませうが、是等の兩者の區別をどうしたら知ることが出来るでありませんか。佛、迦葉菩薩に告げ給ふやう。我涅槃の雲に隠れて後七百年にして、天魔漸く勢を逞しくして、頻りに我正法を壞るであらう。其有様を譬ふれば、獵師が身に法衣を服て僧となり濟して愚民を誑すやうなもので、彼天魔は、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の姿を装うて、衆生を魔道に陥れるであらう。其説く所を云へば、諸の比丘が、奴婢、僕使を雇ひ、牛羊、象馬等の家畜を飼養し、乃至銅鐵の釜釜、大小の銅盤等様々の必要品を備へ、又田畑を耕し、種を植ゑ、或は市場に行きて販賣をなして穀米を儲けること等の様々の俗事に就いては、佛は實に大慈悲をもつ

て、衆生を憐愍み給ふものであるから、是等の事を皆な比丘達に御許し下さることである、云々。かやうな教説や戒律は、悉く天魔の説である、云々。

既に此經文に「佛滅七百年の後に、天魔が漸く勢を逞しくする」と説いてあるから、其時代の比丘が教團に禁せられてある八不淨物を漸次に貯へるやうになつたことが解る。かやうに戒律を犯しながら上の如き妄説を作りて自分の犯罪を隠さんとするのである。即ち是れ魔説である。此等の經典の中には、明に「七百年」等と年代を明記して具に比丘の行事を説いてあるから、疑ふべからざるものである。今は其一例を挙げたのみである。其餘の事例は是に準じて知つて貰ひたい。是れ實に像法時代の有様である。次に像法千年の後半は、持戒の比丘が減つて、破戒の比丘が益多くなつて行く。

故涅槃六云、至乃

【文科】『涅槃經』第六の文を指示し給ふ。

【講義】故に『涅槃經』北本第六に云く。至乃

こゝには經文を略してあるが、其文の大意を擧ぐれば、毒樹迦羅林の中になつた一本の藥樹、頭迦樹があ

つた。そして此兩樹の實はよく似てゐて區別がつかない。實に然する頃、一人の女ありて兩樹の落ちた實を拾うて市に賣つたが、其中に藥樹の實はほんの十分の一もない程であつた。然るに無智の小兒は此實を購ひ喰ひて命を失うた。智人達はこの女に、御前は何處からは等の果實を拾うて來たのかと問へば、女はありし處をいふ。彼等は是を聞いて、夫げ飛んでもないことぢや、彼處の林は毒樹迦羅迦に滿されてゐる。藥樹鎮頭迦はほんの一本しかないのである、云々。八不淨法を持つてゐる衆の比丘の中に淨戒を保つ比丘のゐる有様は恰もこのやうである、云々。

又十輪言若依我法出家造作惡行此非沙門自稱沙門亦非梵行自稱梵行如是比丘能開示一切天龍夜叉一切善法功德伏藏爲衆生善知識雖不少欲知足剷除鬚髮被著法服以是因緣故能爲衆生增長善根於諸天人開示善道乃至破戒比丘雖是死人而戒餘才力猶如牛黃此牛雖死而人故取之亦如麝香死後有用云云既云迦羅林中有一鎮頭迦樹此喻像運已衰破戒滿世僅有一二持戒比丘

又云破戒比丘雖是死人猶如麝香死而有用爲衆生善知識明知此時漸許破戒爲世福田同前大集次像季後全是無戒佛知時運爲濟末俗讚名字僧爲世福田

【讀方】また十輪にいはいく、もしわが法によりて出家して惡行を造作せん。これ沙門にあらすして、みづから沙門と稱し、また梵行にあらすして、自ら梵行と稱せん。かくの如きの比丘、よく一切天、龍、夜叉、一切善法功德伏藏を開示して、衆生の善知識とならん。少欲知足ならずといへども、剷除鬚髮して法服を被著せん。この因縁をもての故に、よく衆生のために善根を増長せん。もろくの天人において善道を開示せん。乃至破戒の比丘、これ死せる人なりと雖も、しかも戒の餘才(力?)牛黃のごとし。この牛死せりと雖も、而も人にとさらに之を取らる。また麝香の死して後に用あるがごとしと云々。すでに迦羅林の中に一の鎮頭迦樹ありといへり。これは像運すでに衰へて破戒濁世にみち、僅に一二持戒の比丘あらんに喩ふるなり。

又はいく、破戒の比丘これ死せる人なりと雖ども、なをし麝香の死して用あるがごとし。衆生の善知識となること、明に知んぬ。この時やうやく破戒を許して世の福田とす。前の大集におなじ。つぎに像季の後ばまたくこれ戒なし。佛、時運をしろしめして末俗を濟んがために、名字の僧をほめて世の福田としたまへり。

【字解】一。十輪「大方廣十輪經」の略稱。譯者の名を逸す。この文は第三證相品中に出づ。新

譯は支那の『地藏十輪經』である。大乘の六度等種々の法門を説く。

二、牛黄 牛の一種、死後藥品に用ゐらる。

三、鎮頭迦樹 迦羅迦樹のこと。黒果と譯す。果實は柿の實に似てゐるといふ。

【文科】『十輪經』の二文によりて、末世無戒名字の比丘を福田であると示し給ふ。

【講義】又『大方廣十輪經』第三に言く、若し我教法に従うて出家しながら、而も出家にあるまじき悪行をなす者があらう。是等の沙門は、沙門たるの資格を備へてをらぬにも係らず沙門と自稱し、亦清淨な行ひでもないものを、清淨行であると云うてをるであらう。

併しかやうな比丘でも、一度出家して佛法を學んだ上は、能く天龍、夜叉等八部のあらゆる善法、功德、及び隠れてゐる功德の實を開示して、衆生の善知識となるであらう。欲少に足ることを知ること、戒法堅固の知識ならずとも、鬚髮を剃り法衣を身に纏ふ爲めに、夫が因縁となつて衆生の爲めに菩提の善根を増長しめ、諸の天人の爲めに證に赴かしめる善道を開示することである。乃至、破戒の比丘は、云はば死人のやうなものであるけれども、而もあの牛黄が死んだ後も藥品として故に大切にするやうに、又麝香が死後其香の爲めに

珍重せられざるやうに此破戒の比丘も、一度戒法を受けた爲めに其の餘力として、尙ほ衆生の爲めに功德を施すに至るのである、云々。

上の『涅槃經』の文には、迦羅林の中に僅に一の鎮頭迦樹があると説いてある。是は像法の運勢漸く衰へて、破戒の比丘世に瀾蔓る濁惡世に、僅に一二の持戒の比丘があることを譬へたものである。

又云はく「破戒の比丘は死人と擇ぶことはないが、猶ほ麝香が死後人の役に立つやうに、衆生は善知識となる」といふのは、佛、明かに此像法時代には破戒を許して世の福田とし給ふことが知られるのである。夫は前に引用した『大集經』の説と一致してゐる。

次に像法の末期からは全く戒といふものはない。佛は此時代の大勢を知らしめ、末世の在俗を濟はんが爲めに、無戒名字の比丘を讀じて、世の福田であるとせられたのである。

又大集五十二云、若後末世於我法中剃除鬚髮身著袈裟名字、比丘若有檀越捨施供養得無量福、又賢愚經言、若有檀越將來末世法乘欲盡正使善妻挾子四人以上名字僧衆應當禮敬如

舍利弗大目連等又云若打罵破戒無知身著袈裟罪同出三萬億佛身血若有衆生若有衆生爲我法故剃除鬚髮被服袈裟設不持戒彼等悉已爲涅槃印之所印也至乃

【讀方】また大集の五十二にいはく。もし後の末世にわが法の中において、剃除鬚髮し、身に袈裟を着たらん名字の比丘。もし檀越ありて捨施供養をなせば、無量の福をえん。また賢愚經にのたまはく、もし檀越ありて將來末世に法乗つきんとせむに、たとひ妻を蓄へ、子を扶むとも、四人以上の名字の僧衆まきに禮敬せんこと舍利弗大目連等のことくすべし。又のたまはく、もし破戒、無知の身に袈裟を着たるものを打罵せん罪は、萬億の佛身より血をいだすに同からん。もし衆生ありて、わが法のために剃除鬚髮し袈裟を破服せん。たとひ戒をたもたずとも、彼等はことごとくすでに涅槃の印のために印せらるゝなり。至乃

【大集】「大集經」「賢愚經」によりて末世無戒名字の比丘の功徳を述べ給ふ。

【講義】又『大集月藏經』第廿に云く、末法の時節に於いて我教法を奉じて鬚髮を剃り、身に袈裟を着ける無戒名字の比丘に對して、若し檀越が此等の比丘を懇に供養するならば、無量福徳を得るであらう。

又『賢愚經』に言はく、我教を信ずる檀越は、末法の世に戒行衰へ、衆生をして生死を出づる唯一の乗物たる佛法が滅びんとする時に、よしや其當時の比丘達が戒に背いて妻を

持ち、子を抱いても、是等の四人以上の破戒名字の僧を供養すること、さながら在世に於いて、舍利弗、目連等の大弟子を供養するやうに敬禮ふがよい。

又云『大集月藏經』第八はく、人ありて袈裟を纏ふ比丘を罵言り擲つならば、よしや其比丘が戒を保つことも出來ず。又學問のない身でも、其罪は萬億の佛身から血を出すと同じであらう。夫であるから、若し人ありて我教法を信奉して鬚髮を剃り、袈裟を身に纏ふならば、設ひ規定通りの戒行を保つことが出來ないにしても、彼等は皆な涅槃に至るべき道を歩いてゐるので、涅槃の印をもつて印しづけられてゐるものである。至乃

大悲經云佛告阿難於將來世法欲滅盡時當有比丘比丘尼於我法中得出家已手牽兒臂而共遊行從酒家至酒家於我法中作非梵行彼等雖爲酒因緣於此賢劫一切皆得般涅槃此賢劫中當有千佛興出我爲第四次後彌勒當補我處乃至最後盧至如來如是次第汝應當知阿難於我法中但使性是沙門汗沙門行自稱沙門形似沙門當有被著袈裟者於賢劫中彌勒爲首乃

至盧至如來彼諸沙門如是佛所於無餘涅槃次第得入涅槃無有遺餘何以故如是一切沙門中乃至一稱佛名一生信者所作功德終不虛設我以佛智測知法界故云云乃至

【讀方】大悲經にいはく、佛、阿難につけたまはく。將來世において、法滅盡せんと欲せんとし、まことに比丘比丘尼ありて、わが法の中において出家を得たらんもの、己が手に兒の骨を棄て、而もともに遊行して、酒家より酒家にいたらん。わが法の中において非梵行をなさん。かれら酒の因縁たりと雖も、この賢劫において一切みな般涅槃を得。この賢劫の中において、まさに千佛ましくして、興出すべし。我を第四となす。つぎにのちに彌勒まさに我所を補へし。乃至最後盧至如來まで、かくのごとく次第に、汝まさに知るべし。阿難、わが法の中においてたとひ性は、これ沙門にして沙門の行を汚し、自ら沙門と稱せん。形は沙門に似て、當に袈裟を被着するものあるべし。賢劫の中において彌勒を首として、乃至盧至如來まで、かのものろくろの沙門、是のごとき佛の所にして、無餘涅槃において、次第に涅槃に入ることをえて、遺餘あることなげん。何を以てのゆへに。是の如く一切沙門の中に乃至一びも佛の名を稱し、一びも信を生ぜん者の所作の功德、つるに虚設ならじ。われ佛智をもて法界を測知するがゆへなりと。云云乃至

【字解】一、『大悲經』五卷、隋、天竺三藏、那連提黎耶舍、法智とにも譯。釋尊の涅槃、傳法付囑、舍利供養等を説く。

二、非梵行 姪事等、凡て佛の制戒を破る行爲。不淨行のこと。

三、賢劫 賢人の多く出世する劫法のこと。この現在の劫の名である。即ち一大劫(成、住、壞、空)各廿小劫あるから合せて、八十小劫を含む)の中、この住劫(廿小劫)には多くの佛出世し玉ふ。第九の小劫の人壽減じて五萬歳の時第一の拘留孫佛出世し、四萬歳の時、第二の拘那含牟尼佛出世し、二萬歳の時第三の迦葉佛出世し、更に減じて人壽百歳の時第四の釋迦牟尼佛出世し、第十の小劫の人壽八萬歳の時に彌勒佛出世せらる。かやうに此現在の住劫の間に賢人出世する故に此住劫を賢劫と稱すと傳ふ。

【文科】『大悲經』によりて法滅時代の僧侶の威儀を示し給ふ。

【講義】『大悲經』に云はく、釋迦牟尼佛、阿難に仰せらる、やう、將來世我教法の滅盡んとする時我教法を奉じて出家した比丘、比丘尼達が、實の如く戒行を修めず、在家の人達と同じやうに、我兒の手を引いて酒樓より酒樓へ遊びまわり、出家の身として教法の中に入り浸りながら、淫事をなすであらう、彼等不淨の比丘は、かやうに酒色に耽つても惡因縁を醸しても、而も此賢劫中には、一切皆な涅槃に入るであらう。

即ち此賢劫中に千佛相繼いで出世し給ふのであるが、其中我は第四の如來である。我に繼いで出世する佛は彌勒である。彌勒佛は、當來この世に出で當に我位を補ふであらう。乃至番々出世の佛出世して最後に盧至如來まで、是の如く續くのである。汝よく是を會得せ

阿難よ、我大法の中に於いて、本性丈の沙門にして、少しも夫が開發せられてをらす、即ち戒行具はず、沙門の行を汚し、自ら口に沙門であると云ふてゐるが、夫はほんの名前丈である。而も形は眞實の沙門に似て袈裟を身に纏うてをる。是等名字の比丘と雖も、此賢劫中に出世し給ふ彌勒佛を首として乃至盧至如來に至るまで、何れか有縁の如來の教へによりて次第に無餘涅槃に入りて涅槃するであらう。そして遺餘す生死はないであらう。何故かと云へば、苟も佛敎を奉じて出家した、一切の沙門に就いて云へば、修行を積み戒を守る者は云はずもがな、乃至下りて一遍にても佛名を稱へ、又一度佛敎を信じたものならば、其作す所の功德はどこまでも虚設とはならない。必ず其が因縁となりて、終には涅槃を得るに至るのである。

我、佛智をもつて、法界の不可思議なる道理を測り知つた爲めに、此事が知られたのである。故に一度佛敎に縁を結ぶならば、其人の行狀の如何に關らず、必ず悟りを得るに相違ないのである、云々。乃至

此等諸經皆指年代、將來末世名字比丘爲三世導師、若以正法時制文而制末法世名字、僧者教機相乖人法不合、由此律云制三非制者、即斷三明、所記說是有罪、此上引經配當已訖。

【釋方】これらの諸經に、みな年代をさして、將來末世の名字の比丘を世の導師とす、もし正法の時きの制文をもつて、而も末法世の名字の僧を制せば、教機あひ乖人法合せず。これによりて律には、非制を制すれば、すなはち三明の記することゝを斷す。説これ罪ありと、この上に經をひきて配當しをばんぬ。

【字解】一。三明 天眼明、宿命明、漏盡明の稱。即ち如來の智慧を三方面より顯はせしもの。

【文科】上來廣く末世名字の比丘相を明し來つたからこゝに結釋せらる。

【講義】此等の諸經典には、皆年代を明記して、將來末法時代に於いては、無戒名字の比丘をもつて、世間の導師とすることを説いてある。然るに若し正法の時節に須ゆべき戒律の制文をもつて、末法に生れた無戒名字の僧を律するならば、恰も病氣に應じて調合せねばならぬ藥を、不用意に用ゐるやうに、藥は却つて毒となる如く、教と其を受ける機は相反撥して、人と法と一つにならず、唯害ありて益がないことになる。此に由りて『四分律』第四十七に云く、制すべからざるものを制するならば、此制止は如來の智慧によりて

記されたる制止の眞意義を漸減するであらう。是は却つて罪となるのである。是故に戒律といふものは、是を實際に施すには、よく機に應じなければならぬといふことが知られる。以上經文を引いて、論旨に配當し訖る。

第四科 舉レ教比例

後舉レ教比例者末法トシテ法爾トシテ正法毀壞三業無記四儀有乖且如三像法決疑經云乃又遺教經云乃又法行經云乃鹿子母經云乃又仁王經云至乃已上

【讀方】後に教をあげて比例せば、末法トシテ法爾トシテ正法毀壞し、三業記なし。四儀乖くことあらん。しばらく像法決疑經にのたまふがごとし。乃また遺教經にのたまはく。至また法行經にのたまはく。至乃鹿子母經にのたまはく。至また仁王經にのたまはく。至乃已上

【字解】一。像法決疑經 一卷、一五紙。失譯人。正續藏乙第二十三套第四册所載。佛入滅の際、大涅槃を説かれし後、常旃善陁に對して、滅後十年の後、漸く非法起るべしとて、僧俗の非法を擧げて之を誡め、大慈布施を勧め給ふ。古來偽作と稱せらるるも、尊い教訓を載せてある。

二。遺教經 一卷、姚秦、羅什三藏譯。具に佛垂般涅槃略說教誡經といふ。佛、寶算八十

歳にして拘尸那伽羅の郊外なる雙樹の間に入滅し給はんとする時、諸弟子の爲めに如來の滅後は戒を師として心を攝め五根を制し、少欲知足にして道を修めよと説かれたるものにして、慈意痛切を極む。

三。法行經 具には「觀察諸法行經」四卷、隋天竺三藏闍那崛多譯。無邊善方便品、先世勳相應品、乃至授記品等大乘諸法門を説く。

四。鹿子母經 『末法燈明記箋述』五十には法譯とあれども、开は縮藏宙六にある「鹿母經」のことにて、内容全く異つてゐる。尙ほ「同箋述」に「法苑珠林」五十四の文を引いてある。縮藏には「珠林」四十一卷である。「箋述」は明藏に依つたらしい。其「珠林」の文に曰く「又十誦律云、鹿子母別請五百羅漢、佛言、無智不善、若於僧中、次請一者、得大功德、果報利益、勝別二請五百羅漢、一切遠近無不悉聞」云々。「鹿子母經」の譯者卷數等不詳、或は此「十誦律」の一段を名けしものにあらざるか。

五。仁王經 二卷、唐不空三藏譯。具に「仁王護國般若波羅蜜多經」といふ。序品、觀如來品、菩薩行品、二諦品、護國品、不思議品、奉持品、囉累品の八品より成る。日本に於いては寛治の頃、本經によりて七難消滅の祈禱を修す。是を仁王經法といふ。

【文科】在世正法の教を擧げて末法の教と比較する一段である。

【講義】後に在世正法の教を擧げて末法の教と比較するならば、抑も此末法に於いて正法

衰滅し毀壞れ、修道者の三業調はずして記す價值なく、行住坐臥の四儀乖いて、戒律全く廢ることは、偏に時運の然らしむる所で、誰の仕業でもないのである。

是は多くの經典に説かれてあるが、手近く二三の例を擧ぐれば、

『像法決疑經』には、此經には檀徒が物を供養しても敬意がない。全く不實の心である。云々と説く。

『遺教經』には、乘騎除齋を説く、即ち一日馬に乗れば、五百日の持戒の功徳を失ふといふ。正法時代の嚴しい制戒である。

『法行經』『鹿子母經』には、檀越の人々が比丘を特別に招待供養することの非法を説いたのである。即ち別請戒のことである。是も在世正法の制戒である。

『仁王經』には、立統破禁を説く。即ち僧に位官を立てることを誡めてある。かやうに正法の教と末法の教は異つてをるのである。但し時代が變り、機教の分齋が異

うても、佛法の眞髓は三時に一貫して變はることはないのである。

第四章 眞偽決判と異執誠誨

【大意】前章に於いて聖淨二門の對辨を了へたから、本章に於いて、廣く經論釋を的證して、外道の邪偽を碎き佛道の正眞を明し給ふ。

第一節は總じて眞偽決判を標し、第二節經文證として第一項『涅槃經』第二項『般舟三昧經』第三項には『日藏經』の文を引く、第三項中、第一科は星宿品にして星宿四時の運行等に關する信仰的解決を與へ、第二科念佛品には冤女の歸佛を詳説し、第三科護塔品には、冤女の歸佛を説く。更に第四項には『月藏經』の文を引き、第一科第二科には諸惡神の歸敬をとき、第三科に諸天王の佛敎護持を廣説し、第四科には諸天王に大法を付囑し給ふを明す。第五科は諸魔の歸敬、第二科は諸天に對する大法護持の佛敎を説き、第七、第八科には修道者護持の佛敎を明す。

更に第五項『首楞嚴經』以下第十一項『佛本行集經』まで七個の經文を引いて、占相、祈禱、呪詛等の邪偽を斥けて、正法を明し給ふ。

第三節には論文證として『起信論』を引いて修道の魔障を示し。

第四節には釋文證として第一項『辨正論』を引いて、廣く道敎と佛敎を比較對論して、佛敎の正道たることを證せらる。第二項『法華論』第三項『法界次第』以下第九項『往生要集』の文まで、八文を引い

て外道の邪説を毀ちて歸三寶を説き給ふ。
第五節には外典の代表として『論語』の一文を引き、かくして本草終はる。波瀾萬疊なれども秩序整然としてある。

第一節 總標

夫據諸修多羅勸決真偽一教外教邪偽異執者

【讀方】 夫もろくの修多羅によりて眞偽を勸決して外教邪偽の異執を教誡せば、

【文科】 眞偽決判を總標し給ふ。將に大風雨を捲き起さんとする一點の黒雲にも譬ふべし。

【講義】 夫れ諸經典を根據として、眞實の教と虚偽の教を分別し決着して、佛教以外の諸の邪偽なる見解を教へ誡めるならば

第二節 經文證

第一項 『涅槃經』の文

涅槃經言歸依於佛者終不更歸依其餘諸天神出略

【讀方】 涅槃經にのたまはく、佛に歸依せん者は終にまたその餘のもろくの天神に歸依せざれ。出略

【文科】 以下廣く引用せらるる諸經論の總序文ともいふべき北本『涅槃經』第八の文を引いて邪神の歸依を斥け給ふ。

【講義】 『涅槃經』北本第八に言はく、大法の王たる佛に歸依する者は、決して佛以外の諸の天神等の神々に歸依してはならぬ。若し佛以外の神々に歸依するならば、眞に佛に歸依し奉つたとは云はれぬ。

【餘義】 一。此下正しく外道天神等に歸依することの邪執を誡め、念佛の行者は、祈らずとも天地神明の影護を受けつゝあることを證せられる。

此下の『六要』の釋は、よく聖人の眞意を闡明してある。

「問ふ、天地祇は世の貴ぶ所、何ぞ之を誡むる乎。」

答ふ、佛陀に歸するは釋教の軌範、神明を崇むるは世俗の禮奠、内外別なる故に法度此の如し。是れ則ち月氏、晨旦の風教、崇むる所の神多く邪神なるが故に、三寶に歸依する者は之に事ふることを得ず。故に『俱舍』に云はく
「衆人、所逼を怖れて多く諸仙の園苑、及び叢林、孤樹、制多等に歸依す。此歸依は勝

にあらず、此歸依は尊に非ず、此歸依に依りて能く衆苦を解脱せず。
 乃至我朝は是れ神國なり、王城の鎮守、諸國の擁衛諸大明神、其本地を尋ねれば、往古の如來法身の大神、異域の邪神に相同じかるべからず。和光の素意本利物にあり、且は宿世値遇の善縁に酬ひ、且は垂迹多生の調熟に依りて、今正法に歸して生死を出でんと欲す。其神恩を思うて忽諸にすべからず。然りと雖も、一心一行を專にせんと欲す、稱念の結縁だも猶ほ且つ之を聞くは一宗の廢立、大師の定判なり。乃至別に念せずと雖も其利益を蒙る。故に彌陀を念すれば、必ず諸佛菩薩の冥護を得、其垂迹たる天神地祇又本地の聖慮に違すべからず。

『御文』の神聖の
 『和語燈錄』の神聖の
 拜明録の神聖の

『御文』二ノ十に「夫れ一切の神も佛と申すも、いまこのうる所の他力の信心ひとつを取らしめんがための方便に、もろくの神、もろくのほとけとあらはれたまふいはれなればなりし、是と同意である。尙ほ同、一ノ九、二ノ二、三ノ一、『破邪顯正鈔』中、『持名鈔』末等にも委しく此意を述べてある。更に『和語燈錄』には
 されば念佛を信じて往生を願ふ人は、殊更に惡魔を拂はん爲めに、よろづの佛神に祈りをもし、慎みをもすること、なにかはあるべきぞ。況んや佛に歸し法に歸する人には、一切

祈禱災
 の根源

の神も、恒沙の鬼神を眷屬として、常に此人を守り給ふと云へり。至我等が惡業深重なるを滅して、極樂に往生する程の大事をすら遂げさせ給ふ。まして此世にいく程ならぬ命をのべ、病を扶くる力ましますらんと申すこと也。云々
 は全く此下の我聖人の御意と一つである。
 二。之を要するに祈禱災は、我愛貪著の毒火から起る毒煙である。即ち上出の『俱舍論』の所謂災害、無常等の所逼を畏れて、現世の欲樂を滿さうとして神に祈るので、眞實の歸依信賴ではない。諸神諸佛に追従まうす心に外ならぬ。そしてこの追従の對象になるものは、皆邪神淫祠である。故に彼等が如何に祈つても決して其苦みを滅さず、却つて益苦みを増すのみである。夫は通常の欲望生活と等しく渴いて鹹水を呑み、益渴を増すやうな道理である。是故に此下に我聖人は諸經論を引いて、諸天鬼神を拜んではならぬことを述べ、更に進んで日月星宿等の布列の意義に及び、是等の天地の現象は大自然の專制の邪神によりて起るものにはなく、全く信心の行者守護の爲めであると立證し、信念の眼をもつて見れば、森羅萬象一として不可思議境の現象でないものはないと、眞信仰の天地の融會無障礙なることを明し、最後に『起信論』によりて、外道の所有の三昧は、

皆見愛我慢の心を離れず」と等と結ばれた。

良に人心に於ける迷信の念は深い。釋尊の教團に於いても、比丘達は卜占等をこととして制戒を受けてをる。當時の印度より支那日本の現代に亘りて、一般民衆の迷信は萬古其姿を改めない。皆現世の欲樂の爲めに、神佛を拜し、福祉を祈つてゐる。諸佛聖賢は之を見はし、或時は此念を善く導いて正法に入らしめ、或時は此心を苛責して正法に入らしめ給ふのである。

他力信心
と諸天鬼神

然るに一度正法に入りて心を佛地に樹つれば、一切の諸天鬼神は、祈らずとも日夜に影護し給ふ。『現世利益和讃』に

南無阿彌陀佛をとなふれば

四天大王もろともに

よるひるつねにまもりつゝ

よろづの悪鬼をちかづけず。

願力不思議の信心は

大菩提心なりければ

天地にみてる悪鬼神

みなことごとくおそるなり。

等と仰せられたは是である。『歎異鈔』第七節には

「念佛者は無礙の一道なり。そのいはれいかんとなれば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなし。罪惡も業報も感ずることあたはず。諸善も及ぶことなきゆへに無礙の一道なり」と云々

は能くこの下の意義を簡勁に表はしてゐるのである。此下『日藏經』『月藏經』を引いて廣く諸天鬼神と佛敎の關係を説き給ふ所以は、全く此意味を廣説せらるゝ外はないのである。

第二項 『般舟三昧經』の文

般舟三昧經言優婆夷聞是三昧欲學者乃自歸命佛歸命法歸命
命比丘僧不得事餘道不得拜於天不得祠鬼神不得視吉良日
上巳又言優婆夷欲學三昧乃至不得拜天祠祀神上略

【讀方】般舟三昧經にのたまはく。優婆塞の三昧をきして學せんと欲せば、乃自ら佛に歸命し、法に歸命し、比丘僧に歸命せよ。餘道に事ふることなえざれ。天を拜することなえざれ。鬼神をまつることなえざれ。吉良日を視ることなえざれ。上又のたまはく、優婆塞三昧を學せんと欲せば、乃天を拜し、神を祠祀することなえざれ。出略

【文科】『般舟三昧經』の二文によりて外邪を誡め歸三寶を明し給ふ。

【講義】『般舟三昧經』に言はく、我教を奉ずる清信女よ、是の念佛三昧の謂れを聞いて、教への如く會得せんと欲ふならば、乃自ら進んで三寶に歸命するがよい。即ち佛に歸命し奉り、法に歸命し奉り、比丘僧に歸命し奉れ、信者の歸命する所は唯この三寶である。この一念歸命の所にあらゆる佛法の大海は信者の胸に生れるのである。されば佛敎以外の教へに奉事してはならぬ。大自在天、毘紐天等の天神を拜んではならぬ。諸の怪し氣な鬼神を祠つてはならぬ。又吉日良辰に心を用ひて、縁起、占ひをこととしてはならぬ。夫等は徒なる偶像崇拜や庶物崇拜であつて、我心を邪神や自然物の奴隸とするのである。是は全く邪道である。

又同經に言はく、我教へを奉ずる清信士にして、此念佛三昧を心に會得せんとするなら

ば乃天神を拜み、鬼神を祠祀てはならぬ。

第二項 『日藏經』の文

第一科 星宿品の文

大乘大方等日藏經卷第八魔王波旬星宿品第八之二言爾時。法盧虱吒告天衆言。是諸月等各有一主。儻汝可救濟四種衆生。何者。爲四救地上人。諸龍夜叉乃至蝸等。如斯之類。皆悉救之。我以安樂諸衆生。故布置星宿。各有分部。乃至摸呼羅時等。亦皆具說。隨其國土方面之處。所作事業。隨順增長。法盧虱吒於大衆前。合掌說言。如是安置日月年時大小星宿。何者。名爲有六時也。正月二月。名暄暖時。三月四月。名三種作時。五月六月。名求降雨時。七月八月。名物欲熟時。九月十月。名寒凍之時。十一月。名合十二月。大雪之時。是十二月分。爲六時。又大星宿。其數有八。所謂歲星。熒惑。鎮星。太白。辰星。日月。荷羅。瞻星。又小星宿。有二十八。所謂從昂。至胃。諸宿